
夢譚(ムタン)

園部 怜示

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢譚^{ムタン}

【Nコード】

N1064K

【作者名】

園部 怜示

【あらすじ】

事故の取材にきていた記者 関野幸一は、被害者である佐原愛華に気に入られ、事故の真実を記事にするはずだった。が、気がつけば部屋がこの世じゃない?!

何故、俺なのか? 何故彼女は事故について話さないのか? 現実と異空間を行き来する二人のダークファンタジー

※最初のうちは平気ですが後半に行くほどホラーを増していきたいと思います。

プロローグ

フツとして見上げていたのは空より遠い空間だった。

見上げていたのは何だったのだろうか？考えてみても答えはない。これからも、この先も、自分に答えは得られないだろう。

唯一見えるこの黒い闇に散らばる星が、己の知らない空であったならばとつくづく思う。それは誰がこぼしたため息だっただろう。息に揺らぐともし火のようにかすかに星がゆれたように見えた。と、さらにそれは揺らいだ。星ではない、見るほどに近くなりつつあるあれは、ゆるゆるとその炎をほの白く上げている。

「ああ、まだ……なのか。やれやれ、どうするつもりなのやら？」
星は炎だった。自分の手元まで来たそれは扉の取っ手の形をしている。

「さて、またもぐるとするか」

それは、いや、そのヒトは燃え盛る取っ手に触れ、しっかりとそれを握った。熱を帯びているはずであろう、その炎に触れた指からは焦げた音はしない。炎は白さをまして、握りつぶされたように掻き消えた。取っては青銀の色に変わると、彼の手のひらに吸い付くように回り、空間には扉ができたのだった。

今宵も、アレに会うために……………。

Key 1 白い扉

さて、何処から話したものでしょうか。この話をするのは、簡単なはずなのだが手順を追わないと、とても意味のある話には繋がらないだろう。

何せ、今も続いていて、おれ自身にも把握し切れてないところが多少ある話だ。

まずこの話は、聞いた俺の実体験と、この話の主といえる人間とで作られた話であることを断っておこう。あの頃、当時の俺の名前は 関野 幸一。実真東新聞記者でそこそこの稼ぎをしていた……。

朝の通勤ラッシュが終わった頃、垂れ込める雲を見上げると、鈍った靴の音がやけにビルの谷に響くように感じた。昨日降った雨のせいだろう、湿ったアスファルトから立ち上ぼる陽炎を遅刻しそうな学生が走り消していった。

水溜りを蹴散らして走り抜けた彼のおかげで跳ねた泥水に、微かな怒りを覚える。いや、これは、泥のことだけで怒っているのじゃない。今任されている事に自分が、納得がいかないことは分かっている。

男は右胸ポケットに入れていたすこししけた煙草に手を伸ばす。足を止めて学生の後ろ姿を見やると、近場の喫煙所に立ちよることにした。

やはり気分が晴れない時はこうするのがいい。関野はなれた手つきで愛用の少し黒ずんだ銀のオイルライターを指で音を立ててあげる。

滲んだ音を立ててついた煙草をくわえ、湿っぽい空気を吸い込みながら面を上げる関野の顔には、なんともいえない苛立ち、それとも不満でもあるのであろうか？口元に刻んだしわと、無精ひげがその感情を物語っていた。

「や、おはようさん。にーさんなんだか浮かない顔しているな？どうしたい？」

隣の揚々とした男が話しかけてくる。電車待ちなのだろう。時計をちらとみながら、重く煙草をすっている関野に話しかけてきた。

「いや、別に。あんただって揚々としている割には、随分所在無さげな格好してるじゃないか」

違いない。と、言いながらくたびれたスーツを軽く正すと、かれは持っていた書類を片手に、喫煙室から歩いていった。

出て行った後で、関野はさらに深く煙を飲み下した。

「分かっているとも。分かっているさ。」

煙と一緒に気持ちを吐き出す。分かっているからこそその自分に対する苛立ちなんだと。

今回の命令の件はそれこそ、政治関連特種専門の俺の記者魂というちっぽけなプライドが放っている些細なおごりからくるものに過ぎない。くゆらせ、灰をこぼしたタバコが熱い。

既に半分以下になっていたタバコを銀色の灰皿に突っ込み、喫煙室の扉を押しやると、携帯から聞かされた病院に向かって、濡れた

靴で歩いていた。

今朝の新聞記事のネタは、早朝三時半近くまで待ち伏せした小物代議士だった。ゴミ箱からの盗撮という前衛時代的な写真の撮り方だったが、結果は成功。小物集団の会談後の取引まで写真に収めることに成功した。

そして、その後に休む間も無く回された仕事。もう、数ヶ月も前のタネになるだろう。いまさらと思うようなタネを副編集長自らの権限で、無理やり向かわされることになった。それが昨今だ。

「いやいや、ねむ……いね」

あくびをかみ殺しもせず堂々と大口を開けているところを、遅刻で急いでいたサラリーマンに見られたが、これが勤労の証なので俺は気にしない。せこせここと忙しく働いているサラリーマンたちには無い、別の苦勞をして俺はここに居るなんて事をいちいち考えるような気配り人だったら、こんなところで走ってはいやしないだろう。

足先が重いが、記事にしなければならぬ人間がこの先にいる。副編集長に無理矢理やれといわれた事故からの奇跡の生還者への取材だ。

「関野、兎に角行け。お前ぐらいしか後はうちの部署でいってないのだからな」

無理やり全員が行かされるインタビューって何だ？そんな大物が居たのだろうか。副編集長はいつもと変わらぬ声だったが、俺にこれを頼んだ際には、どこか疲れきっているように聞こえた。

まあ、聞き違いだろう。

この時、何も知らぬまま、俺自身はこれから現実との間を見るこ

とになるであろう病院へ向っていった。

いまも、つくづく思う。あの時本当に、俺は若かったし、完全な現実主義者^{リアリスト}だった。幻想主義者^{ファンタジスト}になった気は今も昔も無いが、それでも、今の現況を誰かが聞けば、おれは間違いなく変人扱いされるだろう。

どうにもこうにも自分の気持ちだが、収まりがつかないままなので、又煙草を乱暴にくわえた。

新しく加えて火をつけたタバコの苦さを飲み下し、車通りの多い大通りまで剥がれたレンガタイルを踏んでひたすら歩いた。考えたってこの件を解決はさせられない。やるだけやらなければ、これは一段落もつけないだろう。

軽く燻らせた白煙が口から滴るように漏れて、おれ自身の気だるさを外へ外へと流しださせる。気分を変えるためにふかしたタバコが半分まで来た頃、やっと、俺は白永原衛生第一病院の前に到着する事が出来た。

Key1 白い扉2

「ここ、ねえ。辛気臭いところだ。正直、なんで俺みたいな追っかけ記者にお鉢が回ってきたのやら。気が知れんね」

呟いた煙を最後の一服にして、入り口前の吸殻入れにタバコを消し潰すと、朝の空気にはかなり不釣り合いな病院の中へと、足を踏み入れた。

病院内は患者がそれぞれの科に続く廊下を忙しげに行きかい、少し落ち着き始めたところなのか、入り口付近は人の行き来が少なく、閑野が入った自動扉が砂利をはさんだ音を起てて閉じる音もそんな廊下の足音にまぎれて病院の一部になった。

とりあえず、目的の人物のいるという病室を聞かねば。受付を探して目を動かすと、白い服を見た。玄関の前で整然と並んだ受付機械の横カウンターには、せっせと動いている白い服のナース。

患者の受診順番の整理を行っている看護婦は俺が近づくと、受付表から眼を上げてこちらに答えた。

「おはようございます。新患の方でしょうか？それとも、お見舞いの方でしょうか？」

「ああ、見舞いです。えと、ここ最近入院した奇跡の患者に会いに来たのですが。何号室でしょうか？」

と、途端に看護婦が固くなった。

「え、あ、……ああ。そう、なんですか。記者の方ですよね？」

ついで眉も少しきつくなった。あまり歓迎をされてないらしい。

この手の記者がさぞかし多かったのだろう。病院内まで構わずにやってくるウィークリー関連の記者、突撃を専門とするところが来ないはずもない。数ヶ月前のこととは言え、病院自体に大勢の記者が押しかけていたのはテレビにも映っていたことだった。嘘を付く気もないし、断られたらどうとでも言い訳がつく。看護婦に聞かれたままに、俺は答えた。

「ええ、実真東の記者です。無理ですか？」

「いいえ、構いませんけど。またですか。……部屋に入るときは細心の注意を払ってくださいね。その前に、入れるかどうか分かりませんが」

「はあ？患者さんに、攻撃でも受けるんですかね？」

軽口の俺の返答に、看護婦の唇がきゅっと締まり、震える声がソレに答えた。

「えーと。それは、違います。」

そういった彼女は、口元をつぐんで逡巡した後、なぜか声が和らいだ。

「患者さんは攻撃もしませんし、唯そこにいるだけなのですけど」
一拍、軽く咳をして、看護婦は哀れむように俺を見た。

「来た記者の方をえり好みして、扉の前に来た途端に『入るな』っ

て言うのですよ。もっとも、入れって言われた人なんか見たことないのですけどね」

「あれ？じゃあ、他社が出した記事は？直接受けたことになっていきますけど、毎日々（まいひび）新聞なんかは」

看護婦は、俺がそういったのを聞いて今度は気の毒そうな眼で見してきた。朝っぱらからこんなに色々見られるなんて、いや、俺はどんな相手を取材させられているのだ？

確かトラックと普通自動車の玉突きによって起こった事故の爆発の巻き込まれながら、骨折だけで済んだ患者の体験を聞かせてもらうだけだったはずなのだが……………。

「そうか、そうか」

納得したように看護婦は一人頷いた。よりいっそう哀れみというか、同情というか、あまり見られてうれしくない眼差しが向けられる。

「あなた前みたいな新米記者さんなのね。それにしても汚れているけど。まあ、いってみなさい。どうなるかは分かっているけど。くれぐれもドアを叩たきつけるような真似とかはしないで下さいね。患者さんは、心療内科の別館三階三一八号室です。」

看護婦はそういうと、ソソクサと資料整理に戻っていき、後に関野だけが納得のいかないまま残され、疲れた表情にはさらに、不快感を表すしわが刻まれた。

不快感を持ったまま、階段を重く上っていくと、心療内科の黄ばんだ色の札がかかっているところまで来た。

病院の中でも、ここに居る人たちはそれぞれ、抱えた悩みが違う。何が在ったのかは分からないが、現状では自分の思考や感情を支えられなくなってしまった人たちがここで疲れを癒している。

関野の心療内科についての意識はそれくらいだった。

しかし、それなら、事故の患者が何故ここに居るのだろうか。心身にそんな支障はないと報道されていたはずなのだが。……

疑問符を浮かべたまま、関野は病院の階段を一足一足、患者の部屋へ向かって踏みしめていた。時折聞こえる悲鳴のような鳴き声に、びくりともするが、構わず三階までの階段を上りきった。まだ眠気が払えてないのか少し足元がふらついて、階段の手すりをつかむ力が強くなる。

（体を動かしていないわけじゃないが、いかんせん寝不足でまともに歩けないな。）ふらついた足元を見て、自分も若くないのか？と思って少しばかりへこんだが、頭を振って眩暈ごと眠気を放ると髪の毛を握るように頭をひと掻きして、階段の3階踊り場を離れた。

階段を上りきって踊り場を抜けた先、ナースフロアがようやく見えた。人は少ないが、消毒薬と薬物の匂いが一段と濃く香った気がして、関野は微かに咳き込んだ。

吸い込んだ空気が少しだけ違う。病院の空気も、場所で感じ方が違うのだろうか？

そうして、昼間だというのに、ひっそりとした午後の昼下がりを思い起こさせる廊下を三一八号室に向かって、足を進めていく。そして、とうとう問題の三一八号室の前に付いた。名札のかかる個人室、『三一八号室 個人 佐原愛華』の前に。

Key 1 白い扉2（後書き）

どういうわけか、看護婦さんがすっごく気の毒がっているのは、薄汚れた関野さんが、下端新聞記者だと思ったからですね……。無精ひげ生やしてクタクタのスーツじゃ、そう思われますよ、関野さん。

Key1 白い扉3

一步、扉の前に足を踏み出したのとほぼ同時、中から自分に染み付くような声が響いた。

「……。ああ、又来たの。記者さんね」

「あ、そ、そうだ、です」

足音で分かったのだろうか、不意打ちに関野が後ずさりをしながら扉を見ると、妙な圧迫感を扉から感じる。先ほどの声の主は、まるで向こう側から関野自身を値踏みしているかのように、扉の向こう側で、微かに皮肉の入った微笑をもらした。

「くふっ。くくくっ。何かおじさん面白い反応しているみたいね？」

おじさんという言葉にムツとして、関野の声は少し低くなった。が、初めて声を聞いた相手に対して、こういう話し方をするのも仕方がないか、と思い直すと、向こう側の年下の相手に表情をつくらって声を出していた。

「いきなり、話しかければこっちだって驚く。で、記者だって分かっているのならどうする？」

「とりあえず、お名前だけ伺っておきましょうか。私の名前はご存知よね？」

関野は扉の向こう側で随分と楽しそうに話すものと思った。こうして話を聞くと、とてもじゃないが彼女がここにいる理由が分か

らない。見えない向こうで彼女は答えを待っている。

まだ夏は終わらない時期だったが、冷房の冷たさが流れていた汗を止める。

「……ああ、知っている。佐原愛華、だろ。俺は実真東新聞記者
関野 幸一だ」

声の主の細った声は、関野の声を聞くと、今度は笑い方をぴたりとやめて、途切れながら言葉を選びつつこちら側へと答え出した。

「お名前ありがとうございます。……そうね、事故のことに、ついて、聞きに来たのでしょうか？」

「そうだ。事故のことについての話だけを聞いて来いと、上司に命令されてきた」

「あなたの意思は無くて？じゃあ、私が何でここに居るのかも聞いてくれるの？」

声の主はあくまで言葉を繋げているが、違和感がある。何かを聞いているのは分かった。しかし、何を？

「それについては知らないね。おれは事故のことしか聞かされてない。だからここに居る理由なんか聞いても仕様がな

聞かなくてもいいわけではないが、ここで何を言われるのかも分からない以上、関野は敵意のない事と必要以上かまわない事を示そうとした。今まで何人も相手をしてきた奴ならそれぐらい読めるだろうと踏んで。

案の定、扉の向こう側で重いものが倒れ掛かる音がする。愛華は

扉を隔てて向こう側にいるのだろう。

「ふくん。ずいぶん正直ね。前の記者は面白がって聞こうと躍起になるから追い返したし、別の記者はあくまで優しくしようと徹して、逆にソレがすっごく気分悪くなったけど、あなたはあくまで、そのところはソレでいいので通すの。ふくん」

近くなった声は高慢に聞こえた。いや、高慢というのは彼女の声が少し高いと感じたからだろうか？右手を胸ポケットに置いて彼は今、愛華の値踏みと向きあっていた。

「なら、もう一つ。これは何でもいい、答えて。いまあなたの周りで一番よく見える窓から、何色の光が見える？」

何の事やら、わけの分からないまま奥の窓を目だけで見やると、薄く映ったオレンジ色の輝きを見たまま答えた。すこしくすんだ灰色の建物が見え、この病院の雰囲気も表と同じだろう。と思えた。

「オレンジ色だ。向こうの建物の色で、オレンジだ。で、これが何だ？」

と、俺が答えると、彼女の言葉は途切れた。返ってこない。

そして、俺も自分のいった言葉に違和感を覚え、唇を浅くかんだ。何だ、何だ、この違和感は……………。

思わず、自分の携帯に手が伸びるが、携帯は院内では使用厳禁。切っている確認も出来ない。いや、だが持っているアナログ時計は、時計は動いているはず。

関野が見た時計は、午前十一時と十四分。差し込んでいる光は、夕焼けのようなオレンジ。

腹の内側がぎゅっと引き絞られるような感触に、関野は数歩、窓に向かって歩いていった。

慌てて、靴紐に躓きながら窓まで駆け出し、窓に向かってとまることなく走った。激しく手を窓につけて、表を見ると、外は何一つ変わらないお昼時の光景で、鳩が公園に飛んでいくごくありふれた風景と、自分のあせて叩たたきつけた手の横に映る眼を見開いた間抜け顔の自分自身。

では、あのオレンジの光は？ 隣には建物なんか無い。あるのは公園のうっそうとした緑が眼下に広がるだけ。

「その人！ 病院内は静かにとわれなかったんですか！」

年季を積んだおばちゃん看護婦が俺を叱責して、ようやく俺は気味の悪い空気の中から現実へと息継ぎをした。

「あ、ああすみません。つい、気分が悪くなって。大丈夫です。今は、もう、大丈夫ですから。」

看護婦は納得行かないような顔を見せながら点滴用具を片手に抱えて、無機質な音を立てながら廊下の曲がり角まで行って消えた。

「みえた、のね？」

扉からまた、タイミングよく彼女の声が響いた、通った声がやけにリアルなので振り返ると、うっすらとした茶色い栗毛色の髪があった。肩元で浅く縛られた三つ編みは彼女の細首を守るように揺れている。

瞳は浅い黒スグリの色、卵形の整った顔立ちに、あまり血色はよいとは言えないまでの唇の色がことさら、彼女の存在感を浮き立たせている。

「君が、この病室の。入れないのじゃなかったのか？」

手首にまいた包帯がやけに白くて、そのこ自身をその場に繋ぎとめるかせのように見えた。変わらぬ無表情のまま、彼女は、愛華は俺の中を覗き込むように見つめた。

「それは、話の通じない奴らだから。あなたは私の中の、あれの一端を見る事が出来た。誰も見えるはずが無いと思っていたのに、やはり、あいつは嘔吐きね」

愛華の最後の発言に関野は思わず問いかけた。

「お、おい？何をいつてるんだ？」

関野がそういつている間に、彼女は関野の手を引くと、自らの病室内に彼を招き入れた。

引き入れられたというのが正しい。そのまま入ってもよかったが、一歩踏みとどまる気持ちがなかったわけではない。関野は彼女の招きに迷った。あまりにもうまい具合に運びすぎる。

「どうしたの？」

「いや、あっさり引き入れてくれるもんだからな。ちょっと驚いただけだ」

「引き返す？止めはしないわよ？それとも私のお話、記事にしにき

たのなら最後まで聞いていくのかしら？」

愛華の微笑みが俺の顔に向けられた。挑戦、いや、挑発の気を帯びた目は深く自分の眼と交わった。こんな娘に馬鹿にされているのかと、関野はそのときの戸惑いを振り払い、引かれるままに室内に足を踏み入れてしまった。

Key 1 白い扉4

引き入れられた病室内部は陰鬱としていた。真白い天井、機械的にも思える設計をされた洗面台。そして、点滴付の寝台。外を絵画のように切り取った窓だけがここで唯一の色を見せていた。本数は少ないが鉄格子がついていなければもっとよく見えたことだろう。

見舞い客を迎えるための椅子は、緑鮮やかな丸い円座布団のついた四足の椅子。関野はその椅子を引きずり寄せると、愛華と向き合う形で座った。

愛華はといえば、早速自分の白いベッドに乗って薄いかけ布団へ、足をつっ込んでいる。

「いらっしやい。何にもないけど、ここに来てくれたことだけ歓迎するわ」

ベッドの上で足を伸ばして座った状態で、愛華は揺らした三つ編みの先を弄ぶようにしていじっている。その姿には、この子が年相応女の子にしか見えない幼さが見えた。けれど、幼さがある反面どこか達観しているような印象も受ける。

寒々しいというか、なんだか人を見ていないというか、彼女がここにいる理由もわかりそうだ。

何かを感じるわけでもなく、さっきの異変を彼女が何か知っているかもしれないという予感が沸々と湧き出してくる。先ほどの夕焼けの色、ありえない時間帯の光景、消えうせたかもしれない建物。

関野の疑りの中にある探究心と好奇の心、それを見透かすように幾度かこちらを気にしながら愛華は包帯の先をいじっていた。

「記者さん？ いや、これから関野さんと呼ぶわね？ あなたはさっき何かを見た、それは夕焼けの中の、廃墟。そうじゃない？」

「……みえてない。そんなのが見えていたらここに俺も患者としてきているだろうよ」

関野の嘘などないに等しいのだろう。彼女はベッドのすぐ脇の引き出しに手をかけるとその二段目を引き出した。見れば、中には白い紙に何らかの絵が描かれたものや、走り書きのメモが数多に書かれている。

紙をめくる乾いた音もそこに、中から一枚の紙を引き出すと引き出した絵を見ながら窓の外と彼を見比べてやれやれといった様子で愛華は掛け布団のうえに無造作に数枚の紙を散らした。

一見するとただの落書きのようにしか見えないこれをどうしろというのだ？

これを見せるためだけに呼び入れたのか、と思うと関野は見向きもせずに椅子から立とうとした。そも、簡単に入れすぎた。誰も入れない部屋というのも看護婦がそれを見てないだけで、うそだったに違いない。

「そんな絵を見せるためだけに呼んだなら、俺は帰らせてもらおう。」「
ったく、あの看護婦何考えているんだ。」

呆れから吐き捨てるような口調になった関野をそれでもじっと見

ている愛華は、やはり少し微笑んでいる。

「絵を見せるためだけに呼んだ？それとも看護婦さんが嘘でもついたと？あなたの見てない事だってあるわ。まして、初めて来た病室の相手が何を考えているのか分からないからって、そう言わないで頂戴」

一部言っている事は正しい。だが、だからといって関野はそこにとどまる気にはならなかった。ここから離れられる理由ができたのに、そこまでして話をする相手でもない。

「何を考えていようと、看護婦が嘘だろうと、俺はどうでもいい。仮に部屋に入れたただけだったとしても、そこから記事を膨らませれば言いだけの話だ。付き合う道理もないだろう」

「これが、あなたの見た場所だっていったら、少しは信じてくれるのかしら？」

扉に半分向き直った彼の耳にその声はまっすぐに響いた。

「……………何を信じるんだ？」

向き直るかどうか迷う。感覚だけでものをいうのは好きではないが、それでも戻れと誰かがささやく。記者としての直感？いや、人としての好奇心だけだ。

関野の目は認識を急いだ。書き散らした地図の右上に書かれたのは、「夢国…ペナンプティ」の文字、あからさまにとってつけられたような文字にがっかりするが、その地図はじっくりと見てみると、驚くほど仔細に書かれていた。

「ゆめくに？随分とその夢物語にご執心なようだな。いっぱい絵描きにでもなれるぜ。ここから出られたらな。それとも、その地図も俺が見た風景とやらみたいにここでしか見えない。とかいうつもりじゃないよな？」

「見えないはずはないわよ。だって、この現実という世界で書いている絵ですもの」

愛華はそういいながら地図の一点を指し示した。

「ここ、ここ。たしか砂漠にできた工業地帯のザナイといった都市だったわね。関野さん？聞く気がないならどうぞ、お帰りになって結構よ？まだ私の夢物語に付き合うつて気はないでしょうから」

引き止めるようなそぶりを見せていたはずの彼女は、口元の下がった関野の顔をみたからなのか、そつと、手で扉をさした。

「そうさせてもらうよ。」

途中から明らかに造語のような単語が並び、関野は椅子からすでに立ち上がって部屋を出ようとしていた。愛華は引き入れたにもかかわらず、そんな彼を見送ろうとしている。どうあっても、彼女の手のひらの上にいつしか乗らされている気が、関野のイラつきを増上させた

愛華の言葉のとおり関野は扉に向かいあい、取っ手を回したはずだった。

と、螺子同士がこすれあういやな音、そして半回転しか動かない

ドアノブ。

何度となく動かそうとするが音ばかりで一向に開かない。

眉の間に皺を寄せて必死に回すが、螺子の音がひどくなるだけで扉は前後に揺れるだけで開かなかった。

「……………お、おい、ここからだせよ！畜生……おまえ、知ってやがったな？出れないのを」

精神病棟の患者の部屋だということをいれて、ここが個室であることも含めると、嫌な推測だがまさか、誰かが楽しく談話しているから閉めてしまえといったようなことで閉めたわけではない。かといって、愛華自身がこの部屋の患者だから閉められるような設備にはなっていないはず。

鍵の位置を調べたが、何が原因かさっぱりわからなかった。

「そこはコツのいるあけ方があるのよ、なんせこの病室少し古くてね。出方にも格式があるから」

さぞかし滑稽なのだろう。俺は彼女が頬を膨らませまいとして笑いをこらえているのを、目を細めてみている。

「そんな格式知りたくもないけど、聞くためにはあんたのお話に付き合わなきゃ出られない。そういうことなんだろう？」

また、うすく彼女は笑った。

改めて彼女に向き直り、関野は乱暴に椅子に前後逆に座った。いつも書き留めている、すれた青いメモつき手帳のできるだけ末尾のほうを開くと、愛華の顔を小憎らしそうに見つめて「じゃあ、聞かせろ。」とぶっきらぼうに言った。

「最初からそうすればいいのにね？面白い人。ついでに言わせてもらえば、後から私に言われるのを予想してのメモ取り？」

「ほっとけ、どうせ書かなかったら書かないで絶対に突っ込んでくるだろ。短いが、お前さんのことが少しわかった。損な性格してるせいで、記者たちが近づきたくなかったんだろ？」

「お褒めに預かり光栄だわ」

後にも、ここまで本当に小憎らしいという言葉が似合う娘に会ったのは関野も初めてだった。

Key 1 白い扉5

向き直ってから少し間をおいて、彼女はぽつぽつとつぶやくように話し出した。

「ことの始まりはどこからだっただかしら……」

そういいながら彼女は関野のしかめ面を見つつ話を続ける。

愛華がそれは7歳のころにまでさかのぼるということを関野はメモを取りながら聞いていた。

今にしてみれば遠くにあり、霧深く包まれたところにあるくらいに過去の話になるわ。

あのときの後悔をいまだ引きずっては、私は、夕闇の異界に溶け込むことをやめる事は、できなかった。

「本当に夢物語かよ」

関野のペンを握る手に力がこもり、僅かにボールペンがきしんだ。

「いらいらしても結構。だけどね、出られない事は忘れないで頂戴？最近では体調がよくなってきたから下手にあなたが動いたらあなたのせいにして体調が悪苦なることだってあるわよ」

厄介すぎる言葉に、関野は思わず下唇を強くかんでから、そつぽを向いて咳をすると、

「続けろ」

と、メモ帳のほうに意識を集中させた。
愛華はそれにうなずくと、語り始める。

まどろみを抜け、いったん落ちて、眠りについた意識を新たな形で再構築させる。そこで、私は彼とであった。

「彼？何だ、登場人物紹介もなしにいきなり」

「黙って聞いてよね」

挟んだ側からぴしゃりと注意され、頭をかきながら関野はまたメモ用紙に目を向けた。

「やあ、アイ。久しいね。君の時間でどれだけたった？」

「相変わらず不定形だな。私の中でまたまどろんでいたの？」

会話が成り立っていないようで、ここでの会話はこんなもの。私が話すことは、彼には楽に伝わり、逆に彼の話すことも私には伝わる。

「そう、あの時から……」

ため息のように言葉をこぼした愛華は、離している間、時折窓の外景色を懐かしむように見ていた。

過去、あの日、私はあの夢で彼に出会った。夢は現実の逃避だとも、心理学方面からの考えもなかった子供のころ、飛ぶ夢を見ていた。

近所の空を飛びまわり、どこまでも果てない上空に向かって飛び

上がる夢。

その夢を見たとき、電柱の上にいる影を見たことが私をこの異界、現界とはまったく違う世界へと誘うつむぎ手と出会ってしまった。

はじめまして、というわけでもなく、彼は一人電柱の上で腰掛けて夢の中を覗き込んでいた。

孤独感も、面白みもない顔。それが私の中の好奇心を誘った。彼の瞳はどこかを見ていた。何をというわけでもないのに、何かを見ているのだ。それが何なのかはわからなかった。

「そろそろ、移ったほうがいいのだろうか？俺も、居過ぎた気がする」

独り言を言ったあと、彼は座ったまま、ふうっとため息をついた。そうして、ため息をつくと同時に体が透けていく。

「ま、まって？」

飛んでいた体を浮かせたまま、思わず私は彼に声をかけてしまった。消えた体がこちらを振り返って、そうして瞳がこちらみたとき、ようやく彼の体は何だったのかを見ることができた。

揺らいだ霧のようだった体は私の視線を得て、固定化していくようにその形を定めていく。

はじめに見たときのあの不可解な形は何だったのかはわからなかったが、とにかく、あれを彼と決めたときに彼の姿は決まったと、今でも思う。

年齢としては十代後半、格好はその、なんと言っているのかかわらない。……透明な袖のシャツ、その上に羽織った後ろに長く伸びた先端に金細工のついたチョッキのようなもの、くるぶしで止められた弛みあるズボン、そして足先に靴はなく、素足のままだった。

「な、に？」

言い留められたのを、信じられないといったように彼は私を見据えた。

電柱に乗ったままの彼は、固定化した体を馴染ませるように、幾度となく握りかえし、今ここにあることを自分で納得させるようだった。

ようやく、彼自身の体が揺れていたのが納まると、彼のほうから私に話しかけてきた。話しかけた彼の声は姿と同じように、最初は掠れて、最後にははっきりとその重みを加えた。

「気がついたか。……珍しいことだ。こんな年齢で私の形を見定めるとは。そして、資格があるとは」

本当に驚いたような素振りそぶりだった。見た目と言葉遣いことばづかいが変だと後々から考えれば分かったが、彼の姿はその時はそれで当然と思っていた。なにせ、ここは自分の夢だったからだ。

「世は広いな、いかに現界との接点が薄いとはいえ、私もいささか気を散らしていたようだ。そして、独り言の後ですまない。初めまして。見し人」

彼はしゃべらなかった言葉を一気に溢れ出させるように私に向か

って盛大な独り言を言って、ようやく、挨拶をした。

彼の言葉の大半は当時の小学一年に上るか、あがらないかくらいの私にとっては半分以上が意味のわからない単語の集まりであった。

けれど、彼の言葉が何を示しているのかはかすかに感じていた。彼が長い間何かを求めていたことは。

たどたどしいながらも、彼に私は質問を重ねてみた。

「あの、その、…。あなたは、私の夢の中で生まれた人？」

「いや、そうじゃない。さて、……。そうだね夢の中にしか居ないといえば正しいがそうでない。かといって現界に関与しないかといえ、そうでもない。いやまったく、僕という存在は不確かこの上ない。

だけど、君に答えよう。僕は君の夢の中に生まれたんじゃない。僕が、君の夢の中に現れたのさ」

「？作られたんじゃないのなら、その、私の夢で生まれたんじゃないくって、別のところからやってきた？」

彼はしどろもどろしながら答える私の回答を聞くなり、軽い音を立てて手をたたいて見せた。

にっこり笑ったところから察するに、どうやらそれが正しいらしい。そうしているうちに、彼はくると宙で一回転して見せると、

腰の脇に涼やかな音色を立てる一総の鍵束をもった。

そうして音をわざと立てるように、私の目の前にその鍵束を突き

出してきたのだ。

涼やかに鳴らした鍵の束は、とても薄い霜の柱を束ねた音にも聞こえるほど透き通った響きを伝えた。

そして、彼は私の前にさらにそれを突き出した。

「取ってみるといい……。君なら、取れる」

「何で？　なんで？　この鍵束からどうして、取れるの？　どこにも開けるつなぎ目がないし……。それに、これどこがひとつの鍵なのかわからない」

鍵の束はとても、細かな毛の束のようにも見える。かぎ一つ一つがとても細かく、そして、くっつくようにして連なっているので、鍵は空いている隙間など無いのだ。

迷っている私を、薄く微笑みながら彼は見ていた。まるで、さあ、早く、とってくれる。と、そういうわんばかりに。

私は、恐る恐る手を伸ばした。空中で浮いたまま、旋回する鍵の束にそっと、指先を滑り込ませた。

鍵の束は見て感じたとおり、とても滑らかで、それでいて砂糖粒に触れたような微細な凹凸を感じさせた。

どれかひとつを取ろうとしても、この鍵はなかなかひとつで取れない。

すべるたびに何枚も重なり、時に力を入れてずらそうすると、紙をずらす如くにさらに分裂する。

つかめないもどかしさから、ついに、鍵をひとつにすることを諦めて、私はその中のひとつに思えた鍵を抜き取ることにした。

「ね？　これとっても、いいの？　本当に取れるの？」

「取りたいって思えば、あるいは鍵が取れると思うなら」

彼は変わらずに微笑んだまま私を見つめている。そうして、差し出した鍵束に顔を向けると、いつ取れてもおかしくないという感じで、じっとその鍵束と私の指先を見つめた。

取れるはずだから、彼の言葉はとも取れる響きには取れなかった。でも、取れないというわけでもなかった。何でなのか、彼の言葉からは何も取れない。

ただ、言葉をこちらに投げかけてくれるだけ。

私は、取れるという、彼の言葉を信じた。

只信じた。

取れるという言葉がどちらにまったく傾くわからない状況での判断なんて初めてだったが、それでも、私はありえないかもしれない言葉をひたすらに信じた。そして、ともすれば壊れかねない鍵を自分に向けてチカラをこめた。

リ
イ
ン

触れた指先に残る鍵は、つながっていた輪の部分のところだけを崩して私の指の中に取り残された。

「こ、こわれ」

触れた指先の感触のまま、そこに白く白く残った鍵が私の手のひらで形のままこぼれた。

と、それは金平糖のように崩れ、砂に変わり、そしてついには私

の体の中に吸い込まれてしまったのだ
崩れ吸い込まれた鍵は手の内から淡い輝きを見せながら明滅している。

吸い込まれた感触は指の間に砂が通り抜けるようで、それがもぐりこむ痛みは一片たりとも、なかった。

「な？　なんで？　はいっちゃった。……はいっちゃったよ」

もちろんあわてにあわてた。体の中に鍵がもぐりこむなんていう異常現象、大人でもそうだろうけど、7歳の私にはもっと受け入れがたい事だったからね。

鍵の光を宿した手は、夢の太陽とは違う白を放ちながら、掌から私に向い根を伸ばしだした。

「ああ、久しい。幾年、幾年月、どれだけ会わなかったんだろうか。ああ、久しい」

鍵束を腰に戻した男は、感銘深く言葉をこぼした。そうして、愛おしそうに、私の手の中で宿る光が浸食をはじめ、変色し、変形を重ねていくのを見つめている。

痛みも何もないこの変形は、私の中で鍵が化学反応を起こしているようにも見える。

けれど、痛みはない。私自身を傷つけるでもなく、ただ、掌から腕へと侵食を進めながらひたすらに変わっていく。

変色を間近で見ながら、私は鼓動が跳ね回るのを押さえようとしていた。何が起こっているのか、考える事ができない。

そうこうするうちに、鍵の光で背景の私の夢さえも、形成を新たにしていた。

形成が始まった空間は只純白で、三次元である事が確認出来るだけの空間だった。重力、光、大気、全てが不安定。

鍵ののたうつ輝きを見ながら、周りの空間と、何処でもない場所に座っている男とをみながら、オロオロとする事しかできない。

形成はその間にも進み続け、白の空間は、夢とは根本が違っているように見えた。私の夢でなく、しかしそこにあるだけという空間。

すえば肺に絡みつくような呼吸、着いた足場は水上を踏むよう。鍵の腕から感じる重力波は絹羽の手触りを思わせる。

ドクン

急速な変貌の中、一つの鼓動を私の中から聞いた。

と、痛覚を感じるまもなく、手の中で私の肉と交じり合っていた鍵が、私の手を触媒に育ち始める。

先ほど感じた鼓動の正体が、手の甲に薄い萌黄の曲線を浮かび上がらせる。

それは、草葉の細字を刻み、怪しく花開くつぼみだった。

手の甲、草葉の文字の中心は脈動を残しながら手を波立たせ、白色から、萌黄、翠、木緑ともいえる色を纏って、生まれてきた。

力強く抜け出る鍵の頭部は白空間を映し出す虚空を孕んだ玉、それをがっしりとつかみ支える腕、宿木が絡みつくような鍵の腕には持つ手が幾重にも蝶の羽のようにつき、鍵先にゆくにつれて、

それは螺旋を模すように身をくねらせ、最終的に完全な姿を現す頃には、何の錠前をあけるのか分からない形状の先が完全に抜け出た。

抜けきった鍵の異形さに圧倒されるまま、自分の目の前を鍵は浮遊した。

そして、私は鍵自身を、いや、鍵の珠玉にはじめて見る、彼女であり

己の会ったことのない部分を見た。

「これは……いえ、この鍵は私なの？」

「察しがいい。察しがいい子は嫌いじゃないね。案外これは……
・なんとやらかもしれないねえ」

彼は鍵束をいつの間にか腰に戻し、白空の大気に座り続けていた。

振動を続けていた空間の安定は、鍵が顕現しつくしたと同時に収まりを見せる。

今思えば、あれが世界が生まれるという胎動のようなものなのかもしれない。

言葉で言い尽くせぬばかりではなんともいえないが、鍵が生まれたことは、そこに一つの世界が生まれたことと等しかったように私は思えたのだ。

鍵を中に浮かせたまま、私はどこにも居ないはずの自分を見ていた。

それは決して見えないところにはないのに、見つけることが難しい。そんな雰囲気を漂わせている。

鍵の不思議さに気を奪われていたが、唐突な変化をもたらした鍵の持ち主の名前さえ、自分は聞いていなかったことにはっと気づい

た。

「あの、いまさらなんだけどあなたってだれなの？ 私の夢の外から来たおにいちゃん」

鍵を持ったままの私を見ながら、彼は降りるしぐさをして、一跳びで私の目の前に降り立った。

そして、ゆるりと袖をたわめつつ私に向かってこう言った。

「私は、あるいは俺は、守人であり躁り人。またヤウヌーツであり、イトヒラキノヌシとも呼ばれる。好きに呼んでくれればいい」

どれもこれも、ちょっと、こむずかしい。

うーん と軽く唸った後、私は彼のこむずかしい名前など考えもせずに、勘でいきなり彼をこう呼んだ。

「シュウラ！なんかそれっぽいもん、だから私にとって、あなたはシュウラ！シュウラに決まりだからね！」

別段驚きもせずには彼は、そうならそれでいいよと造作もなく返すと、手近の扉を開け放った。

消えていたはずのまっさらな空間からいきなりドアノブをつかみ出した、というのが見えているほうとしては正しいかもしれない。すると、眼前には一室の陽だまりのあたる喫茶店があった。

「君がこれから好きなように扉を開けるがいい。鍵はできた。ほかのどの人間のものでもないお前だけの鍵が」

できた鍵でどの扉を開けてもいいといった彼は、私の中にできたのか、はたまたまったく別の空間なのかは分からない喫茶店のテラス

席に座っていた。

シュウラは常にどこか異質だったから、だからこそ好奇心を刺激させられていたのかもしれないと思う。

はっとして扉に駆け寄ったが向こう側は一枚絵と化している。二次元の景色がそこにある。それでも私は彼の要る空間に行こうとしたが、伸ばした手は届くことはなかった。

扉の中の入ることのできない一枚絵、彼の空間はもはや私のものではなくなっていた。

「夢というのはね、人によって定義が異なる。現実からの逃避空間、願望の実現空間、ねじれよじれて人の望みと欲が眠りの中で異界を作る」

笑うようなのを鳴らす音ともに扉の枠が分解をはじめ、こちら側とあちらへの通行ができなくしていた。シュウラはそれにかまいもせずに言葉を続ける。

「だが、稀に、ごくごく稀に、そんなことかけらも望まずに真に別世界の扉をたたく人間がいる。それが私を見ることのできる人間だ」

声音ひとつ変わらない。壊れた木枠の小山の中で、一枚絵はひとつ写真となっていた。

シュウラは手には白い陶器のティーカップをいつしか持っていた。だが、中身が入ってないのだろう。中の白い空間をこちらに向けると離れたカップは、指先でゆらゆらと振られている。

「わたしはなにをえらんだの！！私はいったい何をしてしまったの

「!!?」

答えるはずがないとわかっていてもたたきつけた。彼は問いを浮かせ、私に続ける。

「鍵を取れた人間にもはや選択肢は存在しない。異界を見たのならば、そのすべてを見るがいい。人外魔境、透遠山河、それがお前に課する仕事だ。もっとも私にとっての、にもなるがな」

言うだけ彼はというと、一枚の写真はひらりとひるがえり、物の隙間にすべり落としたように、空間の隙間に落ちた。

Key 1 白い扉 6

かくして、愛華の夢なのか何処なのかわからない異界のたびが始まったのだという。

ただひたすら黙して聞いていた関野は、雑多に書き込んだ自分のメモ用紙に、うそのような夢物語を書いてしまったことを後悔した。

「で、それでそれが今見た景色と、どう繋がる？俺を心底おちよくりたいのか？それとも、いまはなしたことが作り話じゃない。なんていわないよな？この手の夢想話はきいていても埒が明かん」

けれど、俺はうつすらとこのとき何かを感じていた。言葉の裏側には先ほどの夕やけの眩しいオレンジ。自分が認めてはいけない何かがあることを否定していたのだ・・・。

「そうね、でも付き合わない気がないわけじゃない。ならこの扉をくぐった時点で了承したものととるわ。」

唐突に彼女の言葉が低くなった。あわせていた眼の端が緩やかに下がっている。そして、薄い薄い微笑み。それは、ぞっとするほど鮮やかな微笑みだった。

背筋が寒くなるほどの思いをこめられた表情に思わず、関野はボールペンを取り落としていた。

「ちょっとまで。何を、了承したって言う事なんだ。」

落ちたボールペンを拾うため下を向いた関野は、すこし狼狽えた

せいで、さらに右ポケットにつめていた煙草入れも落としてしまった。

落ちた煙草入れを拾い上げると、ポケットに戻すよりも先に手近な窓脇においた。どういうわけか自分に震えがきている。彼も、それは分かっていた。見せたらいけないと、思いとどまった自分はいつもの記者である『関野 幸一』になっていた。

それを見る愛華の顔はまったく崩れない。何かを待ち焦がれているような、そんな顔だっただろう。

「聞きたくなければいくらでも耳をふさいで逃げられた。行きたくなければ私の手を振り払えた。」

指摘するかのような鋭さを帯びた彼女の一言は、関野が考えていた裏の思いをそのまま見透かしていた。

「俺がおびえていたとでも言いたいのか。」

「さもなければ何だって言うの？ いったんここの部屋に入るのをためらっていたのが分からないから？ 変に感じたから？ ならばそれに従えばよかった。あなたは私より少なくとも年をとっているんだから。」

言葉の幽遠が深まり、よりいっそう彼女が大きく感じる。比喻であらわすにしたらそれはあまりに滑稽な光景だろう。だいの大人で社会人生活をしている男が、まだ高校が始まったか始まらないか位の少女に言葉で押さえ込まれている様は。

「おしゃべりも随分と達者になったじゃないか。それが本音かよ。」

ついでで悪いがすこし水をもらうぞ」

言葉を突きつけられた真意がまだ読み取りきれずとも、感情を表に出さないようにするため、関野は彼女の隣の机に置かれた水差しの水を望んだ。

「いいわよ。好きにどうぞ」

言う前に、関野は水差しを持つ手はコップの中に水を注いでいた。半分ほどまで入れた水を一息に飲み込むと、渴いた口の中をぬるい水が通り過ぎ、胃の中にしみた。

やれやれといった表情で彼女がこちらを見ているが、乾いていた口の中が整うと、いつでも愛華の何かに応える為にまた姿勢を正した。

「時に、知っている？」

水を飲み終えた関野に彼女は嘲笑をこぼしていた。

「クマのできている人ってね、よく効くのよ」

彼女はそういうと広げた紙束を直してまとめると、そのまま浅く目を閉じた。そう、閉じただけに見えた。

彼女の目をとじたのを不審に感じ、声を掛けようとしたときだった。関野は周囲の空気の歪みをみた。

空気のゆがみに伴い、頭に何かが「ぐにゅり」と抜けるような鈍い痛み。思わず頭に手をやり、苦鳴をもらした。眩暈を覚えて一瞬机に手をつく。心臓の波打つような脈動、頭にある手は額へと下り

視界をふさいだ。目の端から見える歪みつつある視界は、すぐに回復した。

だが、関野は見た光を否定する為に再度目をつぶった。時計は一時五十を回ったはずなのに、時折見ていた窓の空は青かったはずなのに、あのオレンジ色が関野の目に踊りこんできた。

気づいて、鉄柵に思わず手を強く叩きつけるようにぶつけて表を見ると、夕焼けの景色が彼の眼前に広がっていた。目を強くこすり、何度も頬を叩いたが、目の前の景色に変化はない。

部屋に来る前の同じ光景に関野は声が震えた。

「これは？俺は頭がどうにかしてしまったのか？！いったいなんで、こんな？！！」

思わず叫ぶ、が、声がやけに響いた。病室にしてはあまりに遠くへ飛んでいってしまった。

周囲を見渡せば病室自体もおかしい。形は変わっていない、広くもなっていない。けれども、広い体育館で話すように声が反響する。淡い期待を抱いて扉に向き直ったが、なぜだかわからないが背後の扉は鏡に変容していた。

「落ち着くのは無理でも、現状をひとつ教えてあげる」

慌てふためく様子が分かっていたかのように、彼女の声は落ち着いていた。

自分の胸の辺りが、辺りの異様さに耐え切れずに、きつく押さえつけられている。それでも視線だけはそらさないように関野は胸を

押さえながら、置いたはずの煙草入れのあたりへと手を押さえ直し、彼女を窓際からみていた。

愛華はベッドの上にいるくせにまるで女王が座しているような荘厳な雰囲気のまま話しかけた。

「ここはあたしの夢の狭間。なぜあなたがいるかといえば、あなたも偶然にも彼を見ているらしいから。そして、現実のあなたは私の隣の机で寝ている」

告げられる言葉の面妖さは、凡そ想定外過ぎる事だった。

「うそ、……にきま、ってる」

緊張と警戒が細っていた喉から、やっとその言葉を搾り出させた。関野は目を見開いたまま、自分の窓辺に置いたタバコケースを取ろうとした、だが、それは取れなかった。タバコケースがおいであつたであろう窓は一面のガラス張りの水槽に変容。

「うわっ」

反射的に窓際から飛び退ると、彼女を一度見やり、そして、もう一度窓を見た。飴色と茜色の色彩、そして、その下で風を受けて棚引く幾条もの煙。光の反対側には変わらない工業地帯が広がっている。

何があつたかわからない。何をされた？

顔に出さないようにしても心臓は正直だった。議員を追っかけたとき、賄賂の押収現場を押さえたとき、どの全てでもここまで重い鼓動を関野の心臓は打たなかっただろう。

いつもの落ち着くためのタバコがないまま、関野は愛華と向き会わなければならなかった。

変容してない椅子に腰掛け、深く息をつくとき、もう驚かないといった体で、彼女のまなざしとむき合わせた。たかが十四、六歳の小娘に負けてたまるか、そういう感情のまま関野はまっすぐに彼女を見据えていた。

「俺に、何をした？夢物語の話以前からどうも、変な感じがしていたのは今認める。だが、俺が眠った時には納得いかない。そもそも、ここが夢なら俺は殴れば目が覚める。痛みで目が覚めるという話はあるからな。」

「へえ？痛みをね……なら殴ったら？」

「そういうってことは、痛いって事か。」

「あら、信じるの？私の話なんか夢物語じゃないの？」

「この様な事になった時点で、俺が行く裏の裏をかかれてるからな、ために俺が言うのと反対のことをやってみるという試みさ。」

空気がまた少ししたわんだ。見えない壁が少しだけ狭くなったのを肌で感じる。不気味すぎる感触で、ざわりと自分の産毛が逆立った。試す気はないといえど嘘になるが、すでに試していた。先ほど叩き付けるように鉄格子にぶつかった指はまだじんじんと痛んでいたからだ。

関野は捕えられたという事実を受けとめ、愛華の話を聞く事を続けざる得なくなった。

Key 1 白い扉7

愛華の夢の中だという病室の中で、関野はガラスやら扉やらを叩き割ってでも飛び出したい衝動に駆られながら、彼女の話をメモに取っていた。

「夢の中でとったメモなら、俺のノートにも余計な事を書かなくてすむだろうな」

夢の主は、といえば顔色がいい。どういうわけだか青白い顔だったその頬に、薄桃の赤さが出ているくらいだ。現実よりもこっちの方がいいのだろう。

「そんな事でメモが取れなくなるでも？ 甘いわね。書き続けなさいよ。ここから出るためにね」

愛華の顔色がよくなったというのは言葉にも表れた。先ほどの態度よりも、ずっと気が強くなったようだ。

次第に暮れていくと思われた表のオレンジは未だに明かりをともしたままで、それも気味が悪かった。音が聞こえないことも、余計に不気味だ。

「余計な事も何も言わない方がいいのは分かってるんだが、今まで人の夢の、しかも病室になんか通された事は無くってな。気持ちの整理をつけてただけだ。さ、話しやがれ。とつとどこから出す為にな」

そういった関野へ愛華はうなずき返すと、あの異様な空間に続いているかもしれない此処で、その話を始めた。

「どこまで話したかしら？そうね、いきなり写真みたいになって彼が消えたところからだったわね。」

滑り落ちた空間を見る事はできない。白い空間に一人取り残される形をとった愛華はとあることに気づいた。何もなくなったはずの空間に、足元にぽっかりと穴が開いていたのだ。

その穴は、ちょうどシュウラの写真が吸い込まれた空間の真下だった。

そして、消えたはずのシュウラの声が響いたのも、そこからだった。

「そうそう言い忘れていた。課題一、まずはどこまでも歩き続けろ。そしてそこで何かを起こす事」

水溜りから響いた彼の声に驚きで小さく肩がはねた。あわてて穴の縁に手を着いて覗き込見ながら大声で問いかけた。

「シュウラ。シュウラ！ね、どうということなの？課題って何よ、なにをすればいいのよー」

聞こえた声に逆に問いかけても彼の返信は無かった。言うだけいて電話を切られたような言葉に喉の奥が詰まる。そうして、一人残されたままで、愛華は謎解きを始めなければならなくなった。

穴といってはおかしいかもしれないが、穴というほかあるまい。愛華が覗き込むと、自分の息に穴が震えた。すこし指をつけると、冷たくもぬるくも無い水の感触。穴ではなく水溜りらしい。

透明でありながらにこった白を思わせる重量感のある色、周りの空間と同化する色。一周する円の細い線がここと違うものである印になっている。

「水溜り？ 雨もないし、水もないのに」

何かに気づいたように関野は又、語りに突っ込んだ。

「独り言が多いんだな、やっぱり友達がないからか」

水槽の向こう側の色が流れていく雲にさえぎられ滲む。彼女の怒気もそこに含まれているようだ。

「今のあなたと同じような状態だったから。もっとも、私は当時七歳で、あなたはいま……三十くらいかしら？ だったらどっちが無様かしら？ ねえ」

関野の鬱憤晴らしの発言は、棘付きに倍返しに返された。

「三十路にもいってないぞ俺は。それは、四捨五入したら三十にもなるがまだ二十九歳だ俺は」

思わずそれに言葉を継いだ関野にさらに止めを愛華は加えた。

「なら約三十路男ね。二十九だってほぼ三十じゃない。それに年如きでおたおたする所から見ても、あなたって年齢に随分なこだわりでもあるの？ こういうのあれね、愚直って言うのかしら」

「わかった！わかった！俺が悪かった！三十路だろうがなんだろうがなんでもいい！これ以上この部屋の空気よりもひどい気分になれたら困る」

わかればいいのよ、と、軽く鼻を鳴らすと、愛華は又自分の語りに集中し始めた。年のことに関してはそれほど気にしていないはずだった関野はどうしてだか、胸がズキンとうずいた。

コケにされた事よりも、どうしてなのか年のことで自分がショックを受けている事もまた、衝撃だったと、彼は気づいていなかった。

今にも干上がりそうなそれに、顔をぐっと近づけると色は深みを増した。光はないはずだし、反射する水であるわけもない。

「ああ。そうか」

愛華はその水溜りを見て納得した。どうやらここがスタート地点だという印であるだけかもしれないと。

早速始まった自分の夢と違う空間を歩き続ける課題がこの色のない世界と水溜りもどきのスタート地点だけかと思うとため息もでようものだ。

「なによ。こんな水溜り」

撒き散らせるかどうか分からないそれを、愛華は思いつき踏みつけた。足が薄い水溜りについたら感じるはずだったのだが、足の先からいつきに愛華は前のめりに水溜りの中にはまり込んだ。

顎が水溜りの反対側にぶつかり、ぶつかった反対側の線のふちが緩くたわんだ。仰天し、必死に手を伸ばしたはずだが愛華の手は真上に伸ばしきれず、同じように縁にぶつかり先ほどの空間同様に縁は曖昧な感触を残したままつかむ事ができなかった。

「いやあああああ」

最初に出た絶叫は水の中で、ついで手のぶつかった後に続く残りの腕の先が水に引き込まれる重さのある水音が一緒に聞こえた。

「やああああ！ やああああ！」

声が止まらないまま、水たまりの口が遠くなる。暴れて暴れて息が続かずおぼれると感じたときだった。怖かったはずの水の中で、自分が苦しくない事に涙のたまった目で気づいた。

「あれ？　なんでこう苦しくないの？　どうして私息ができて、それに壁がない？」

水溜りの下にくつトンネルのような闇の空間を想像していた愛華だったが、常識はずれの世界に自分の思考は通用しない事をよりいっそう思い知らされた。

Key 1 白い扉 8

急に視界が広がったというしかなかったろう。彼女が先ほどまでいた白の空間は何も見えない、どこまで広がっているのかも分からないような空間だったが、壁が無いかといえば、きつとどこかに壁があったと思える空間だった。

境界線があるという空間が言い方としては合っていると思う。見えないけれども何処かに一箇所穴の開いたビンの口のような出口、それがその空間だった。

「もし、水溜りの中に落ちずとも、間違いなくそこに足を踏み入れなければならなかった、のか」

水槽の色が濃くなりオレンジ色が遠ざかっていく。魚の泳がない泡だけの水槽が一気に水中の青さを、光を通して伝えてくる。先ほどから変化を重ねるこの部屋は、夢の部屋である事を関野に実感させつつあった。

主の話した内容や、心情によってこの部屋は色彩を鮮やかに変える。水の話をしていたから、水槽の色が濃くなり、オレンジが薄らいだように。

「そうね。初めてだから入り口くらいは示した。そんな感じだと思う。で、あなたはやっぱりおしゃべりの最中に突っ込みを入れるのをやめる事ができないわけ？」

思わず、関野は口元を結んで軽くなった。自分でも分かっているのだがどうにも抑えられないらしい。

「あー……その、なんだ。一種の職業病としてみる事はできないか？」

「なによ、新聞記者長くやっていた性でいちいち気になった事に意見しないと気が済まないとか？あ、凶星なの」

また、さっくりと彼女の言葉に切られた気がする。わざとらしい口調な気がしたのだったきっと気のせいだ。口元の顎鬚を触りながら、弁明になってしまいう言葉を関野は詳述していた。

「こんなになる事のほうが珍しい」

「じゃあ、いつものとおりに話せるように出来ない。って言うの？」

「まともじゃない状況で、まともじゃない相手と、まともとは思えない会話をしていたら、幾ら質問しても足りないし、何にもなしにひたすら聞き続けるのは難しいんだよ」

もう、すこしこちら側の空気に毒されでもしたのか、後半は子供の言い訳のように語調が強くなってしまった。深くため息をつきたいが、余計な空気を吸ってしまって更に自分がおかしくなるようで、関野はそれをせず、息をつくだけにとどめた。

関野の吐き出すままの言葉を聴いていた愛華は、片眉を軽くあげて、それからすこし目を緩めた。

「いいわよ。私もそうだった事忘れていたわ。そうね、あなたが話を聴きやすいほうが私も良いし、ついでに、呼吸するのまで躊躇うくらい落ち着きの無い状態になられても困るわ。そう、だから、多

少の突っ込みはこっちも譲歩してあげる」

あくまで態度は上からだ、多少なりと関野を氣遣ったのだろう。空間が夕焼けの色から、白水色に変わった空間は、次に若芽の萌える緑と春の日差しを含んだ空間に変わった。

部屋の構造が変わってないだけに、なんともアンバランスな状態ではあるが、関野は多少息がしやすくなったのに軽く礼をいうと、愛華はまた言葉をつむぎ始めた。

「エーと……。ああ、そう。だったわ」

落ち込んだ中が水に満たされていた。落ちた空間こそ無限に広がっていたに違いない。

高いところから何も無い高さを感じる空間。落ちてきた上空に目をやると、ぽっかりと丸い円がある。

向こう側もほぼ同じなのだが、距離が近かったからその円も白の世界の月に見えた。抵抗力の少ない水は自分の重さのまま、はるか下に見える滑らかな水底に向かって落ち続けていた。

どこまでも深い沼の御底、胴体をつかんでいた手を離されるように私は踏みしめた。沼底にしかれているのは砂でも泥でもない。やわらかいが沈まない液体というのが一番近いかもしれない。

踏んだところは砂のように浮き上がるが浮き上がったら水と同化してしまう。

ここまで自分で自分の夢として認められない世界で彼の言った試しを私はやり遂げられるだろうか？

不安を残したまま、私は理由もなく「歩き続ける」ということを始めた。

せめぎあい、跳ね回っている好奇心と不安をごまかす虚栄心。目印になるようなものがない、ほの明るい青と白、そして透明という色。夢の中でなかったらとうの昔に肺が水で満たされていただろう。凜としたまでの神聖さを帯びた静けさであるような気がした。それは、一層に私の夢がここにはないとも思わせた。口元から泡がもぐった音で浮上すれば、ここが水中とわかる。

でも、この泡は途切れない。私の肺は一体全体どういう仕組みで動いていたのだろうか？そして、水で満たされているはずの肺からどうして泡がこぼれるのか。

途切れぬ泡を連れて、周囲を再度見渡しても何もない。
ただ一面の沼の水とその底が広がっている。

「何もないこの湖をひたすら歩いてどうさせたいの・・・？シュウラ」

先を教えてくれる彼はいないのをしっけていても上を見上げれば、自分の落ちた水溜りの入り口が金の光を放つ月になっている。

音なく、私は足を踏み出していった。地平線しか見えない荒野。その後ろを誰かがいたことを示す足跡だけが置き去りにされていく。

彼との約束は私の手足におまじないを掛けたようにそれらを動かさし続けた。

どこまでもとは行かなくても行けるだけ、歩けるだけ。そうしているうち、水の中の地平線に一転の黒いしみが見えた。

「あれは？・・・」

時間の感覚のひどく薄いこの中で見つけたそれはまるまる五時間掛けて探し当てた目的物にも見えた。

五時間といえば、大げさかもしれないが、自分の足跡しか出来ない空間で目的物を見つける為に、歩いたり、時々足元の砂を持ち上げて形作ってみたりしながら歩いたのだから、そのくらい経っていてもおかしくない私は思っていた。だが、それも終わる。

見えなかった目標を見つけた気がして、愛華は視界に入ったシミ目指して歩いた。こぼれる泡が量を増し、鍵が呼ぶ声のように静かに心が響きだした。

歩き出してからさらに一時間ほど、ほどなくしてそこに愛華はたどり着いていた。

そこにはただうず高く積まれた白い山があった。遠くから見ればてっぺんがあるのは見えたはずだった、だが、近づいてみたその白い山は思っていたものよりもずっと高く、そして、ごつごつとしていた。手触りはすべらかな灌木、白い木の山だろうか？この木がどこまでも連なっていると最初は思っていた。

枝のない見た目からしてもおかしいと思った私の目に、何かの頭蓋骨らしきものが映るまでは。

そう、それはどこまでもうずたかく積まれた骨の山だったのだ。

叫んだり逃げ惑ったりしなかったのは、骨だと気づいた私の反応としてはその場で最良だっただろう。見たこともない頭蓋骨や、肋骨、足の骨、そして、並んでいる脊髄のような物体。どれもこの世のものではない異常な形だった。

たぶんもう少し年がいていれば、そこからすぐにも離れて逃げ出していたに違いない。

でも、愛華は離れなかった。骨の山をぐるりと十分ほど掛けて一回りし、骨のかけらひとつを手取るなど、この物体の生きているさまに思いをめぐらせていた。

「こんなに大きな骨の生き物がいたなんてね……。ここは絵本で見た海みたいだけど、息もできるし、水の中のように苦しくない。なら、どうしてこの骨はここに山積みになっているのだろうか？」

骨に触りながら彼女はずっとつぶやいた。そのうち、なんだか骨が愛おしく思えてきた。

かつて生きていたであろうこの骨は、今でさえ息を吹き込めば動き出しそうなのだ。手に吸い付く感触の小さな頭蓋骨を愛華はゆっくりと撫で続けていた。

何を思うでもない。ただ撫で続けていくのが心地よかったからだ。と、撫で続けたせいだろう。不意に頭蓋骨が熱を持った気がした。

それは生き物の熱。

鼓動を感じる前の自分の肌によく似た熱。なんだか生きているようだ……。ふと、そう思った愛華はみつめていた骨山から、手元の頭蓋骨に意識を向けた。

骨は押し黙ったままで、当たり前だが自分の触れていたところ以外は冷たい。

しかし、その骨の色の変化に気づいた。とてつもなく小さな色の

変化で、目の前の骨と比較してもわからないくらいだが、かすかに、骨の触れた部分に薄緑色の文様が移っている。

「え？これって・・・・・・・・・・。私が触れたせい？」

自分の手と骨をあわせると、その文様が鍵の文様と一致していることを確かめた。

そう、鍵は自分の中に消えたはずだが、文様はうつすらと刺青のように浮かんだままだった。

誰も答えない。それはわかっている。ならば、この答えを導くためには？愛華は考えたそして、自分の気づいた色の違いをよりよく見ることと答えを導こうとした。

それが正解だったのだろうか？骨は触れたところの色違いに気づいたのを見計らったかのように、色を強めて音もなく四散してしまった。

四散したかけらは、見る間に水に解けて形をなくす。同時にのどを通る水の滑らかさが増した。

触れたことでの確証はない。でも、触って起こったこの変化を愛華は受け入れ始めていた。

そもそも、骨の山といったが、この山にあるのは骨の形をしたものだった。

死のにおいが一切しない、無垢の塊とでもいうべきだろうか。硬い種のような感触が近かったかもしれない。

「触れるのは、一つじゃこれではたりないよね？」

思い立ったように愛華は周囲の骨に触りだした。つかみかかるようにいくつもの骨の面に手を触れさせ感触を楽しみ、そしていくつもの光をあげさせる。

だんだんと骨は山のてっぺんを覗かせ始めていた。光るごとに息が楽になり、緑はあふれる。そして私の足元にはいくつか何かが芽吹き始めていた。

あの鍵を芽吹かせたときのように、螺旋を描く光の線がいくつも頭上に立ち上ぼった。

それがいつしか一本の幹のように太い束となったとき、私の目の前にはひとつの頭蓋骨が残っていた。

最後のひとつ、なんだか今まで見た頭蓋骨よりも威圧感のあるそれは、空になっている目でこちらをじっと見ている。

大きさじゃない、この頭蓋骨自体が山のてっぺんにあった理由も自然とそこで理解できた。

触れるのをためらい、指先が後すこしでためらいがちに引いてしまふ。

背後からは光が明滅の脈動を繰り返す。いつしか白の空間に色があり、そして、私の呼吸に泡はつかなくなっていた。

お互いが見つめあい、幾ばく。言葉と音ともつかぬ発声をしたのは骨だった。

「触れることで私は生まれ、思うことで私はあり、認めることですべてが生まれた。」

骨は言葉を高らかに歌い上げ、草の文様すべてを絡ませながらひとつの器になった。

緩やかに手の中へ落ちると、その器には草の模様がついた取っ手が現れ、次に中から本物の水が溢れ出した。

器の重さはないに等しかったものが次々とあふれる水によってその重さを増して、耐え切れずに地面に置くことにした。

ん？地面？愛華は更なる変化に気がついた。

いつの間にか自分の足回りの色が大地に変わっている。あふれた水がこぼれ流れた先では何かの目が芽吹きだしている。

驚きのまま事態はめまぐるしく成長していた。景色はもはや白ではなく、色が満ちだし自分の鍵と同じ緑色の世界がそこに生れ落ちていた

Key 1 白い扉 9

「第一の鍵の変容はおわったね」

又唐突に声が耳のそばから聞こえた。聞き覚えのある悪戯っぽいこの声は、そう思って振り返った瞬間目の前が真っ暗な水に変わった。

引きずり込まれた、そう気づいたのは右手首をつかむあの手が潜るときに見えたからだ。ふさがっていた視界が開けるの一秒ほど、引きずり出されるように私はその場から、生ぬるい大気の中に吊り上げられた。形容で言っているのではなく、本当に吊り上げられたのだ。

引き込まれたのは横からだったが、出たのは上に向かってというまた、無茶な物理法則。おまけに吊り上げられたら吊り上げられたで、そのまま放り投げられ、青臭いにおいと抵抗の少ない柔らかな草らしい物の上にそのまま落とされたからだ。

ゴホン、と大きくせきをする、胸から下が水浸しになったように感じる。何が起こったのか確認しようにも、目を開けられないほどまぶしいのだ。落ちた場所で座りなおし、目を開けようとしてもまだあけられない。

開こうとするほどに、大気がまぶしいと感じて盛大に目を覆い隠し、腕に水が掛かるのもかまわずに私は咳き込んだ。腕が濡れ、花と紅茶と古びた木の香り。息をするのがこんなに苦しかっただろうか？

げふん

何かをもう一度吐き出した。少し落ち着くと目が光に慣れてきて、シュウラの行ってしまったさきの側に引きずり込まれたのにやっと気づいた。

そして、自分を濡らしている物の正体にも気がついた。扉の反対側に入り息をした瞬間、肺の中で満ちていた水の大気が、こちら側で変化を起こしたのだろう。こちらの大気に水の泡をこぼすという変な状態を目にしている。

咳き込んだら道理で激しく腕が濡れたわけだ。
泡を最初は気にしていたが、周囲を見渡し、シュウラの座っている場所を見て驚いた。

小ぢんまりとしたつくりの喫茶店。表の看板に書いてある字は擦れて読めないが、店外のウッドデッキの上で古びた青銅色のテーブルがおかれ、そこに彼が向かって歩いていくところだった。

はなしかけようとすると、口からまだ水の泡が出るらしく水風船をつぶしたような嫌な声しか出ないので、吸ったり吐いたりをして話せる様になるまでと、周囲の観察を始めた。

シュウラはそんな自分に一瞥をくれると、どこから取り出したのか白地に青薔薇の模様の入った茶器を手にとると、あの空間に入る前に持っていたティーカップに優雅に紅茶を注ぎ始める。そしてこれまた、気づかないうちに出現したと思えないテーブルと同じ作りをした華奢な足の椅子に座って足を組んでいるのだ。

それを見ていれば意見の一つも言いたくなる。おきようとすると、

それを見た彼から声が掛かった。

「まあ、まちなさい。こちらに慣れないまま立ち上がって魚みたいになられても困るし、それを現実に持つていかれても困る」

彼と数時間はなしてない間にどういふ変化があったのか、彼の言葉遣いが若干現代に近づいていた。

「魚になるって。お前それ信じたのか」

「小学生で超常げ、ってねえ。何回言えばいいのよ。夢のこんな世界で、しかも自分の知っているとこ以外なんでしょう？当然何が起こるかもわからない」

そういうと、ぷいっと愛華は横を向くと聞こえるか聞こえないか位の声でこう付け加えた。

「アイツが後々そんなこと無いって言うのをすぐばらしたから、そんなに長く信じて無かったわよ」

怪訝そうな皺をすこし寄せたが、関野はまた彼女が怒り出す前にと、メモ帳にペンを置いていた。

水色の水槽に、すこし黄色の光が入った気もするが、席には分らなかった。愛華はメモ帳に目を落とした関野を見ると、不満げにまた話を続けた。

もちろん……その後すぐに座りなおしたわ。自分に何をされるか分からなかったからね。口から小粒の泡が出て行くのを見ながら、動けないので自分が座っている周りも見てみた。

さながら春の庭、といった風景だった。愛華の座ったすぐそばにはタンポポの花が柔らかに咲いており、そのそばには緑の三つ葉を茂らせているクローバーの絨毯が数箇所芝生のそこかしこで生えそろうい、白い丸々としたかわいらしい花を咲かせている。近くを黄色い蝶が飛んでいき、何処かへと去っていく。

庭のなかの右奥には小さいながら子のテラスにあわせて作った池があり、そこには葦が数本揺れていた。

愛華の近くでもあったその池を、ゆっくりと覗き込むと、思わずその場から座りながら後ずさっていた、池の中には先ほどの器とその景色が写っていたからだ。

シュウラに聞こうとして、目に映った小窓を見て更に言葉に詰まる。

扉がいくつもあったあの最初に訪れた空間がその反対の窓に写り、光が揺らぐと、その窓に映し出されている空間も歪曲して、薄く輝いた。池の中から先ほどの器が水を吐き出し続ける様が揺らぎに映し出され、噴水の音のようにコポコポと響いている。

常に回りが暖かな大気で満たされている小さな喫茶店のテラス席に座ったままの彼に、愛華はやっと泡の少なくなった口から声を漏らしていた。

「ここは、どこ？」

紅茶をすする音だけがこちらにかえった。ソーサーを片手に優雅に紅茶を飲む様はどこか、お金持ちの少年のようで彼が人じゃないことを忘れるようだ。

「ここは、君が作った世界の一つ。この店は僕がそんな君の世界の一部を引き集めて作り出した展望室だ。出される紅茶は時によって違う。ついでに、お菓子も違うといつとこうか？」

「展望室？なんかみるところ？」

「そうだね。見るところだ。早速淹れたての紅茶を飲んでたんだが、いかんせんまだ味が薄い。もー少しだけ長く茶葉に浸からせて置けばよかったな。で、ついでにひとつ」

不敵な笑みを浮かべて飲み終えたカップでこちらを指差す彼をじつと見て、次に来る言葉に嫌な予感を覚えた。

「まだ終わってないよ。少なくとも後ふたつの扉の開門条件を満たさないと君の望みは果たせない。」

シュウラは紅茶をソーサーに置きつつそういった。このとき初めて、私は彼が何らかの私の望みを叶えるということに気づいた。

先ほど放り出された事など、当に忘れていた。望みを叶えてくれる。この言葉の意味を私は浅くしか考えていなかったからだ。望む夢を見る事ができる。勝手にそう思い込んでいた。

それがどうい内容なのかも知らずに無邪気に笑っていた自分を、

今みれば、とてもおろかだったことだろう。

「それじゃ、あなたは夢の中で望みを叶えてくれるの？ね、それって本当なの？」

また消えやしないかという焦りをもちながら、私は彼に尋ねた。もういっぱい注ぎなおす彼はこちらを横目で見ながらうなずいた。

「そうだね、ある意味真実だ。後は自分で体験するしかない。休憩もここまですておこうか。じゃあ、次の扉を今度は君自身で開けてごらん。開け方は扉と自分が教えてくれるはずだ」

振り返ると、今度は赤銅色に金メッキで丸ノブのついたドアがそこに新たに現れていた。

新しいドアに向き直って私は、今度はどう扉を開けるのかを考えた。

後ろではシュウラが見えないが、穏やかに笑っていたことだろう。

この扉はどう開けたら・・・？

深く考える必要はなかった。先ほど触れた骸骨と同じように扉に触れた。手には鍵を示す草葉の文字。扉がきしむ音はしたがまだ開いてくれるほどではない。

何かが足りてないのだ。扉をあこれ触っているうちに私の呼吸はいっしょに泡を出さなくなっていた。隅の模様を嘗めるように見ていたが、それでもわからない。

悩んでいくうちにまた自分の胸が熱くなり、手のひらに違和感を

覚えた。みると、また、あの鍵が現れはじめ、自分の手の甲から頭を覗かせていた。

「そうそう、やっと気づいたね。それが今後必要になるものだ。」

シュウラがそういう前に、私は自分の手から鍵を抜き出した。

作ったときのような肉から何かが出る感触はしないが、それでも、なんだか、自分腕が外気に常にさらされているような、そんな感じを受けた。

鍵を抜き出したまではない。だがしかし、鍵穴がない。

自分が教えてくれる……、シュウラの言葉を思い出しざま、愛華は扉に向かって鍵をつきたてていた。割れるでもなく、鍵は扉の前で先を蔦草のように展開して、幾条もの葉を伸ばし、扉を覆い尽くした。

と、扉の前の蔦草は吸い込まれると、私の手のひらにある文様と同じ模様を刻んで一体になった。

銀線で縁取った線が目にも鮮やかな扉は、錠を開ける硬質な音とともにノブが回され、次の場所への扉が開いていった。

Key 1 白い扉9（後書き）

少々文章不備が合ったので遅くなりますが一章最終章は別で載せようと思います；お待ちいただいた皆様、申し訳ありません。

Key 1 白い扉 開錠10

ふう・・・と、吐く息をきいて、関野は現実に戻された。

「うわっ！」

支えをなくして、前のめりに大きな音を立てて関野は机からずり落ちた。床に口づけする前に手をついて、なんとか前に体を倒した状態から、背筋でぐっと反り返るように上体を起こす。

ズキズキとした頭の痛みとともに感じたのは、息がなぜか軽い事で、下にはメモ帳が背表紙を向けたまままで落ちていた。反応が鈍って、数瞬してからそれを拾い上げる。

それをニヤニヤと愛華が笑った顔で見下ろしていた。

「どうだった？まだ途中までだけど少しは引き込まれてくれた？」

「あ？ここは現実……？」

息の軽い事でまさかとは思ったが、関野は窓を見た。夕日の色を見てだまされた！と思うよりも早く、ガラスの水槽が消えている事と鉄格子が戻っている事で自分の目何度もをこすり、眠気を払う。

表は夕焼けの景色はあるが、廃墟はない。カラスの鳴く声がして、窓辺には関野お気に入りのタバコのケースが置いてあった。

そこにあるいつもが、関野を迎えてくれていた。

「さっきの言葉を気にしているのなら言うておくけど、あの奇妙な夢はこの現実じゃないのは確かよ。もっとも私にはどうでもいいこ

とだけど」

「俺も眠っていたのか……？」

「その顎の無精髭についたよだれで明らかでしょ」

言われたのに反応して袖であごの辺りをこすった。たしかに乾いた線とそれにまだぬれているよだれのあとがあった。これ以上見られてなるものかと、きつく赤くなるまでこする。

「お前、大人にそれを堂々と指摘するな。こっちだってプライドがあるんだぞ。」

「そのプライドを保つために病室から出て、おばちゃん連中のうわさになりたいなら今後は止めないわ。」

単に忠告してくれているだけなのだが、おきてからも彼女の言葉に容赦は無かった。

「俺が悪かった。気遣いありがとうな。」

そういいながら、関野は今見ていたものについて触れられずにいた。『我ながら情けない』とはいえども、あの空間である場所から帰ってこられただけでも、九死に一生を得たような感覚に近い。

今も起きぬけの心臓はあつと言う間にドクドクと跳ね回りだしている。カラスの鳴く声がして、夏の夕暮れの生ぬるい風が吹き込み、続くように響くセミの声。そして、急くように愛用の煙草入れをさつとポケットにしまいこんだ。

夢であつた場所。愛華と同じ名前であるおそらく愛華本人。そしてシュウラと呼ばれる男との話。いくつもの情報が絡み合い、今起きたことを言葉にするのは、頭をどこまで整理するのか、それとも自分が精神病院の通院を必要とするのか。

関野は半ば考えることを否定するように、タバコを手を取った。

「ここ、禁煙。」

「あ？ああ……………」

わかつていたのだろう。愛華は先ほどよりも柔和に微笑んで。こういった。

「いくつもあるのは、初めがいろいろありすぎたから。私もあのころはそうだったわ。ただね、あなたが望んでいる記事を書かせることもできる。今後私の夢話に付き合ってくれるなら、今日は無理だけど、明日、事故の時に何があつて、私がどうだったかを話してあげるわ。」

関野は約束をするのを迷った。先ほどの勘がいつていたのはこのことだった。そして、警告を無視した結果がこの始末。

「事故の事だけ、聞けないのか？」

乾いた喉がひりつくのを覚悟で出した言葉を、彼女は分かっていたように見つめていた。窓からの光が反射されない黒い瞳その目は明瞭に逃げられない。と語りかけてくる。

「確かに、一方的だったしついでに唐突で、理不尽で、横暴だった。

でもね、この部屋へはいるって言うのを選んだ時点で決まったのよ。言ったでしょう？逃げる選択肢は、『あの時出来た』って」

「取材して、来いとしか聞いてなかったから、こんなことになるのは」

まだまだ頭がふらついている、俺個人の判断では返答しかねる。そういった言葉が流れていったが、喉からせり上がってきて、その言葉は引っ込んでしまった。

かわせる言葉が上手く出てこない。まるで子供の言い訳のようだと関野にも分かっていた。そして彼女が強めた言葉が何を意味するのか？関野の返答を聞くまでも無いというように彼女はそれに付け加えた。

「それは今も。って、ついでに言っとくわ」

彼女の言葉を強めたのは、こういうことだった。ここから逃げる事は今でも出来る。何をされても逃げる事はできる。だが彼女が言いたいのはそんな生易しい事ではない。

同じ光景を見た自分が、これが何を意味するのか知らずに、この先暮らしていけるのか？そう、暗に問いかけているのだ。

関野も見ってしまった。

愛華と同じ光景を、愛華の視点で。そして、わずかながら楽しみも兆していた。現実ではないと分かっているけど楽しんでいた事実を突きつけられている。

思考はめぐる。愛華も、眼前で戸惑う男を見て楽しんでた。そして、彼がこちら側に傾くことを期待していた。

なにも話しかけずとも、それがどういうことを招くのかを知っていた。自分と同じように、問う事をやめない人間がこの先の疑問を抱えたままでいられるはずがないと、知っているのだから。

「どの道、おれはもう一度来る事になる」

じつと俯いて考え込んでいた関野は、見ていた愛華の前で、男の、関野幸一の顔を上げた。その顔には戦いを決めた、彼の仮面がつけられている。

「これが、俺がはめられたとしても、行き着くところまで行ってる覚悟だ」

関野は下手を打てばどこに落ちるのか分からない賭けに出ていた。それが陶酔であり、昂ぶりであるかもしれないにしても、彼も、彼女と同じ道を進むことを決めた。

「ここからさき、何があっても俺は事実と今起きていることがなんだから、突き詰めるぞ。それにきっちり答えられる保証がないなら、話をきる。できるか？」

「いいわ。ただ、言い方が変だったたり、例えがおかしかったりしてもきっちり聞いて頂戴？説明はするから」

そういうと、愛華は夢と同じ右手を差し出した。今の関野はその手を見ることができた。

夢と同じ文様。そして彼女の手にある鍵が。

契りの握手、暖かなくせに滑らかだった手を握り返し、その二人の密約は完成した。

「で、俺はこれからどうでたらいいんだ？」

「簡単よ、右に二回、左に一回ガチャガチャすれば出れるわ」

今は開ける気を起こさせない扉だったが、いわれたとおりに回すと、引きずる音とともに扉は開いた。

やっと外に出られた背後で愛華が力なく手を振る様を見届け、関野は帰途についた。

いつもの自宅のアパートで、関野は二箱目のタバコの蓋を開いていた。長引く間の抜けた扇風機の

機械音と、画面がまっさらなままの文章作成の白いページが開きっぱなしだ。首が振れる度に夜になっても生ぬるい空気が自分の撫で付けた髪を吹き散らす。

吸っても吸ってもうまくない、ただ煙だけが行き来する。酒の缶も開けたが酔う様に飲んだはずが逆に熱くなった肌で自分だけがここにいるような冷ややかさに襲われた。

あの異質な空間から吐き出されたのはなぜか。俺は出た瞬間にどうしてああも熱くなりながら、内面では冷静でいられたのか。なぜだった。

そして、机の上に放り出したメモ帳を見下ろした。シャープペンをとって、そこにまた、愛華の話を書くと、滑らかに筆が運んだ。

夢でなぞったメモ書きが、こちらで寝ていて書けているはずはないのに、ペンをとって書き込むごとにどうして書き込めていくのか？数行書き込んだところで、又ペンを放り出す。

雑然とした自分の部屋にいらつきを覚えて、またそばにあった原稿用紙の成りそこないを丸めて背後に放り投げる。

「ははは……………。何だってんだ」

背後にたまった丸紙を軽く追いやって、窓辺に置いておいた蚊取り線香の火に当てて一気に燃やす。灰になった紙が線香の灰置きにたまり、小さな山が出来ていた。

関野は窓の外に見えている河川敷の鉄道橋に向かって、飲んだばかりの中身の残る缶を投げつけた。届くはずもない缶は土手に当たったのか、草にぶつかる柔らかい音と酒のこぼれる液体の音がしてそれとともに転がる音がする。

「約束か。守れる自身のない約束なんざするものじゃない。見得を切ってしまった以上、つづけるしかないのも事実だがな」

そういうと、もう一缶を開け、関野は豪快に飲み下していった。

今日の出会い、愛華と呼ばれるアレに、出会ってしまった事が間違いないなんて信じたくなかったから。あの約束をしたのも自分ではないようだった。まだ回っていられる歯車がゆがんでいるように感じ

た。回り続けてくれれば良いのにと、それを関野は願った。

これが、自分の現実と異常との接点を作り出したきっかけになってしまったとは思いたくはなかった。

Key 1 白い扉 開錠10（後書き）

第一章しあがりました。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。続々第二章なんですが、一章の不備が無いか見直しながら書き込んでいくので、遅くなる少々ページが少なくなるかもしれません。

それでも良いからと、待っていてくださる方は、数日ほどお時間をください。その後第二章を乗せたいと思います。

Key 2 流転の門1

「兎に角だ！ 今後もお前がし通せる限り聞きつくして来い。これ以上言い合う必要もないだろう。さっさと戻れ！ この記事を仕上げ終わるまでは元の部署に戻す気はないからな！ ボーナスが多少出るだけありがたいだろう」

実真東新聞支社某所、昼前にもならない時間は慌しくデスク周りが動き、人の行き来も激しい。今から取材にとんでいくものや、構わずに耳に鉛筆を載せ、唸る形で眼の縁に隈を色濃く残しているものもいる。

そんな中、編集長室から響いた叱責かはたまた叱咤か、どちらにも取れるような声に近くにいたものは耳をそばだてていた。渦中の人物である関野はげんなりとした顔でその大声を受けている。

あの出会いから一週間。頭が冷えてくるごとに後悔の二文字ばかりが浮かんでくる。

あの日の戻った次の日から、自分の本分に戻るべくデスクワークの残っていた記事に手をつけて、加筆修正とをこなしながら編集長から見つからぬように逃げ回っていた。もう自分がかかわりたくない半分、見つからずに済んでしまえばあの事件から離れられるのではないかという、僅かな願いだった。

しかし自宅ならまだしも、秘密裏に進められる作業にも限りがある。仮眠室の一部や資料室などを移動して進めていたが、とうとう廊下で編集長に見つかり、件の病室に入れたか否かを根掘り葉掘り聞かれ先ほどの顛末につながるのが今だった。

無論、あの記憶に残っている不思議体験を話せるわけもない。部屋に入れてもらい、今後の記事について話を受けられると聞いただけであの喜びようだ。仕舞いには、

「お前の声が気に入ったのか?! ああ! 顔かも知れんな! 無精髭そって精悍になったほうが良いから今後は剃っていった方が良いでしょう」

とまで言われる羽目になり、編集長が持っていた新品の剃刀まで渡された。あの時その場でそれを捨てなかった自分の我慢を褒めたい。

「これをまとめたら、戻す。その約束は守る。ささ、いつてこいよ!。必要な事あったら俺にも通せ」

「わかりました。まとめときたい資料もありますので、そちらも一緒に持って被害者の方へ午後言ってきます」

「おう!! たのんだぞ」

背中を叩かれながら部屋を後にすると、部屋から出てきた自分の顔を見ている連中がさっと目線をそらした。見たくもないが、中には仕切り板に貼り付けた付箋紙を何度も確認するように、こちらをちらちらと伺う奴もいる。

視線も痛いし、鬱陶しいのですぐさま部屋を出て行き、この時間すいているはずの喫煙者用の休憩室に向かった。

予想通りに人はあまりいない。パイプ椅子を乱暴に引っ張るとどっかりと腰を掛け、机の上に突っ伏した。

「どうした？ 関野」

朝の出勤と副編集長の報告を終えたばかりのそんな関野に背後から話しかける人懐っこい声があった。声をかけた人物は、そういうと後ろを通り過ぎて彼の前にある椅子を引くと腰掛けた。

机に軽い振動があり、すこし目をあげるとコーヒーの匂いと、白い紙コップ。皺の少しよった青い縞柄のワイシャツが目についた。聞き覚えのある声に、関野がさらに視線をあげると、自分よりもしっかりと開いた明るい落ち葉色の目とすこし小さめの鼻をもつ同期がいた。

垂れ目な所は人が良さそうで、左頬にある黒子と軽くてボリュウムのある髪を持っていた。髪の毛は短く切ってあるせいで、色々な方向に跳ねている。

同じ記者をやっている千ヶ原だった。彼が話しかけても反応は鈍く、寝ているわけでもないのにいつにも増して気だるいまま、関野は返した。

「ああ……。千ヶ原か、別に。副編集長の面を拝みついでに給料のボーナスちつとばかし上げてもらって、ついでに激励の言葉をもらって継続する取材の命を受けただけだ」

ひょうと、軽く口笛を鳴らした千ヶ原 誠司というこの男、関野より二つ年下の同期なのだが、入社時、空気が似ているからということを一いきなり関野に言い渡し、「仲良くなれそうだな」と無理やり握手をしたなんともまっすぐで飾るところの無い男だった。

千ヶ原の一方的な気に入り宣言を受けた後も、関野は会社で変わ

らずに過ごしてはいたが、部署の違いあっても気軽に話しかける彼に気をいつしか許していた。今でも、休みがあうなら呑みに行く同僚だった。

「なんだよ、別にいいじゃないか。給料はいったのなら、いくらでも今後は俺におごれるな」

彼も、関野を探していた一人だった。数日ほどあいた出社をいぶかしんで彼を探し回ったがやはり見つからず、心配していたところに編集長のところから戻ってきたらしいという話を聞いて、ここに来たのだった。

なんだなんだと、肩を叩きながら特別手当^{ボーナス}と聞いて、これ幸いと飲みに誘おうとした千ヶ原を、関野はやはり気だるそうに見ている。ふうっと息をつくと、伏したまま彼の重いくぐもった返答があった。

「おごってもいいが、俺の愚痴を聞いてもらう事になるぞ、飛び切り女々しい愚痴だ」

「？何だ、本当になにかあったのか？」

関野の疲れた様子に肩をたたいていた手を千ヶ原は止めた。顔を覗き込むが、関野は思わず目をそらす。それもまた変だった。

「なあ？関野。いったいどういう取材受けてんだ。政治の裏金受け渡し、面会を記事に仕立て上げるとか散々危険な事やってきたお前にはみえないぞ。」

「……………。なあ、お前もいったのか？」

「あ？何の事だ」

曇天の瞳で関野は千ヶ原に質問をした。

あれから一週間はたつというのに冴え冴えと記憶に残っている愛華との出来事を、熱に浮かされた、正気じゃなかったという言葉で片付けたかった。タバコはうまいと感じるようになったし、酒も酔えるようにはなった。

だが、釈然としない気持ちも残っている。どうして、自分なのかと。

「その、三ヶ月前にあった高速での事故。ほら、十一台もの玉突き衝突事故を起こしたって言う『きじおろし来地風街道の惨事』知っているよな」

聞いたときは訝る様だったが、胸のボールペンをいじりながら千ヶ原は目を瞑ると、ああ、とうなずいた。

「知ってはいる。で、それがどう？ん？まてまてまて、まさかおまえ、あの生き残りの取材まだ行かされてなかったのか？！　そうか、それで納得いったよ」

「そういうことだ。……、で、どこがどう納得いったんだ。」

「そりゃ、その。うまい具合に少しでも話が出来たから、そこから記事を膨らませたとか。いや、悪い意味じゃなくて、ちっとは話せたんだろ？一時期は『扉の君』とまで言わせた女の子とさ」

「扉の君だあ？」

思わず関野は半身を起こした。愛華の事を調べる気にもならなか

ったので、別の記事に専念していたが、どうやら、自分が興味をそられなかった分野ごとで裏があるらしい。千ヶ原が机に置いていたコーヒーを奪って飲み下して目をきっちり開きなおす。

「おい、起きたら起きたでひどいな。俺のちょうどいい温度に冷ました一品飲みやがって」

「悪い、コロンビアぐらい入れなおすし、後で飲み放題につれてってやるから。その扉の君について話を聞かせてくれ」

コーヒーを奪われたときは少しかり腹も立ったが、千ヶ原も関野がそこまで聞いてくるならばと、椅子に座りなおし少しかり前のめりになったまま、小声で関野と話し始めた。

「なんだ？知らないのか。まあ、分野も違うし、俺もそっち方面は担当したの数回だから微妙だったけどもなあ。関野がそこまで怪奇事件の一つに首突っ込むなんざめずらしいな」

「怪奇事件だと？ 扉の君の話じゃなかったのか？」

声が大きかったのだろう、言った途端にきよろきよると辺りを見回すと、すぐに千ヶ原が口元に手をやるのを見て、関野も前のめりになって改めて小声にして話を次いだ。こちらも言い知れぬ雰囲気だったが、愛華の時に比べればまだ現実に近い分だけ、非現実に溺れはしない安心感がある。

「だから、その名前がたったのは事件のあと、誰一人として扉を通さずに追っ払ったっていうので扉の君と呼ばれたときいている、けど、問題はそこじゃない」

何かを千ヶ原も思い出しているのだろう。顔が少し赤くなり、思いつくのも忌々しそうに見えた。おそらく、彼も扉の前での問答で何かあったのだろうか？頭を二度三度振って「違う違う」といつてから、彼は話し出した。

「あー……。あの時は本当に奇怪な事件だったんだよ。その玉突き、重軽傷者合わせて十二名、死者は七名に及ぶ大惨事だった。雨天という悪環境がもたらした偶然の中ではかなりの大事故で、スリップによる対向車からの衝突、らしき事が原因」

関野は曖昧な千ヶ原の物言いに、さらに身を乗り出して聞き入る体制をとった。

「その奇怪な事についていえばな、亡くなった運転手に聞いたとしてもわからん事ばかりだ。その事故、負傷者がいない事自体がおかしい理由は知っているよな？」

「ああ、それぐらいなら知っている。前方から突っ込んだ車両は大破。相手はタンクにガソリン満タンの給油トラック。ついで火花による引火で車両に火が移った。で、爆発」

「そうだ。本来なら助かるはずだった人間まで巻き込んで死傷者が膨れ上がったのはそれが原因だ。ところが、たった一人無傷とまではいかないが、骨折だけでやけどを負いもしなかった被害者がいる。それが、お前さんが担当する事になった人間だ」

千ヶ原自身も曖昧な中で思い出した記憶にあまり自信がない物言いだっただが、そのまま関野が彼を見ているので続けた。

「あの事故は本当にひどかった。現場の車の半数が引火した車の火

を受けて、衝突によって起こったガソリンの被害から二次、三次と災害が広がった。そして、ここが一つ目の奇怪な出来事。

そのトラック運転手は、爆発に巻き込まれて真っ先に死んだのだが、おかしいことに目を見開いて死んでいた。燃え盛る火炎の中で、だ。

千ヶ原の言葉が起きた事故の凄絶さを語るより、関野は事実にとつとする。半分まで開けた残りのコーヒーも飲みきって、考えたくないという言葉を喉の奥に流し込む。想像してはいたが、それ以上に自分が余り興味を持ちたくない部類の事件だった。

しかし、彼女の裏に迫るには事件のことも調べねばその仔細がわからないだろう。

飲み干した紙杯に力を込めて潰すと、背後のゴミ箱に見もせず放って、関野は叉腕を組みなおした。

「目を見開いたまま？ 何でそんなこと分かるんだ？ その……、いたくはないが目玉なんて柔らかい物が熱で残っているのがありえないだろ。破裂して蒸発してそうな」

「話を聞いとけよ。ガソリンの爆発もろに食らって本来なら燃えているはずの場所まで吹き飛んでいるのが普通なのだがな、そこは偶然だろうって思いたくはないが、塩化なんちゃら？ 運転手が常備していたアイスパッドが弾けたんだと、事故の衝撃でな」

「化学物質ってことか？ その、塩化とか何とかっていうのは」

あまり思い出しではないようだが、彼が悩んでいるところから見てそんな物質だろう。それに千ヶ原もうなずきながら返す。

「そうだ、でな、あ——。訊く所によるとそいつが持っていたかき氷も一緒にぶちまけられたそうさ。で、それが原因で一部が低温の状態を引き起こしたらしい。で、足首や背面は炭化していたり肉が見れないほどの状態になっていたらしいが、頭部に引っかけたせいだろうな。目玉は茹で玉になっていたが無事だったそうさ」

「ほんっとうに想像したくはない現場だな」

関野も、事故現場の取材に行ったことがないわけではない。だが、ここまでひどい現場とは遭遇した事はなかった。あの日の天候は雨天、それでもなお燃え盛る火災はその舌で命をもぎ取って言ったに違いない。千ヶ原も、事故について思い出して身震いしていた。

「お前なんかまだ良いじゃないか。俺はその頃他に空いている奴がいないからって言う理由で、現場から回ってきた写真見ちまったんだぜ。うーうーあ。思い出したくも無いが、この話にはあの写真もつき物だからなあ」

「どんな写真だよ？」

「見たら丸一日は飯が食えなくなる奴」

千ヶ原の言葉に、また自分の体温が下がった気がした。

Key2 流転の門1（後書き）

第二章は関野さんの職場から開始。

千ヶ原はちなみに部署が落ち着くまえは事件ごとを担当したりと色々なところを回ってました。

Key2 流転の門2

聞かたびに事件の悲惨さの具合が上がっていく。詳細詳しく知っているような千ヶ原のいう写真を見たら、現場の生々しさまで感じるかもしれないだろう。事故の現場説明だけでも胃の中から苦いものが込みあげてくる感覚を思い出してしまった。

苦虫を噛み潰した関野のそんな表情に、それにもかまわないように千ヶ原は話を続ける。

「ついで二つ目、その骨折だけですんだ奇跡の患者は、どういうわけか車外に放り出されていた。しかもずいぶんご丁寧に爆発の被害が一番薄いところに、だ。被害を一番受けた車に乗っていたはずなのにな」

『奇跡の患者』。口の中で反芻したが、これについては事件の報道記事にも載っていた愛華にとってあまりよくないことも思い出す。

「それは、俺も知っている。自動車のドアが外れてそこからシートベルトをつけていなかった彼女が飛ばされたという話だろ。だが」

関野は暗い事実を知っていたが、口に出しては言えない。その事故の死亡者の中で遺体が一番ひどい状態だったのが愛華の両親たちだった。

「そうだなあ。お前が今担当する羽目になったその子、両親についてはあまりに陰惨としか言いようが無かった。彼女も知ってはいるだろうけど、事故の記事としては事欠かないほどの悲劇的展開だ。こぞって新聞だけじゃなくて週刊誌もネタにしたらしい」

頷いている千ヶ原の顔にも不快感が滲んでいる。いくら記事にするのが仕事とはいえ、『人の不幸が蜜の味』となるまでの外道には落ちたくない、千ヶ原はよく口癖のように言っていた。そんな彼からしても、記事に仕立てねばならなくなれば、行かされるのがこの仕事の常だった。

「まあ、おいおいその話については俺も思うところがあるから、お前のほうが落ち着いたらで良いから相談にも乗ってくれ」

事件の事でしんみりとしてしまった空気を散らすように、千ヶ原は頭の上で関野の煙草の煙ごと空気追いやる動作をしてから、最後の点についての話を始めた。

「最後の三つ目、こいつが怪奇事件といわれて言われている元になったともいえる事柄だ。生き残った人々は車からすべて引きずり出された時、『なぜ引きずり出すんだ?』という内容のことを全ての人間がいったそうだ。」

関野は自分の息が大きく飲み込まれ、喉が大きく動くのを感じた。付いていた肘が白いテーブルとの摩擦音を立てて擦れた場所が薄く熱を持つ。目を覚ましているはずだよな、と関野は改めて組み込んだ腕の内側をつねった。疼痛を感じつつ、自分の前にいる千ヶ原の顔を見ながら自分がここにいるはずだと深く思わせる。

そうでもしなければ、また病院の空気が床下から湧き出してきそうだった。上手く回らない言葉を、もう乾いてしまった唇をぬらして関野はその口を開いた。

「どうして、そんなことが起こった。事故の悲惨さを一番にわかっているのは彼らだろ。火が近くに迫っているというのに。」

険を増した関野の顔に千ヶ原はそのまま、と軽く手を立てた。

「そうさ、事故の起こったことを、誰の目にも明らかな事故を認識できてなかったんだよ。もし、近くで通る車があのに無かったら、あの中にいた人々は何が起きたかを分からないまま死んでいただろう。当人たちは誰もが口を揃えてそういつている。」

「精神鑑定は？心理的な傷があって記憶喪失とかそういう類のことは？」

関野に宿った色を千ヶ原も見取ったのだろう。少し待て、と関野を待たせると、新たにコロンビアを入れなおして自分の傍らに置いた。冷めるまで時間がかかるであろうそれを口に少しだけ含ませ、目元を軽く指でつまみ関野に新たに向かい合った。

「関野、さっきよりもいつもの顔に戻っているな。戦う男の顔ってやつ。そういう顔つきなら話しやすいつてもものだ。全員が最多で三回の鑑定を受けている。事故の衝撃を理解しているものと、まったく知らないものどれも事故が起こったこと理解しきつてないものがほとんどだった。で、そこで扉の君だけは違った。彼女が『奇跡の』と呼ばれるのは現時点で、意識を持っていたからさ。」

冷め切る前に話しきってしまうかのように千ヶ原の口調は後半早口だった。自分でも滑らかに煙草に手が伸びているのに、関野は火をつけてから気が付いた。事件の概要だけなら知っていたが、こんな事だとは知らなかった。彼女と話していたのがどういふことなのか、やっと一端を掴めた気もする話である。煙草をすうのが早くなる気もしたが、そのまま千ヶ原に、目で進めるように促した。

「その意識っていうのが真実だって言うのはどこまで本当だったの

かも気になるな。彼女の精神鑑定は？」

「同じく最多で三回ほど行われたが、異常を感じる言動はあっても、多少の心理的支障はある以外はほぼ現場の状況と一致。何故逃げられたかについては、車から出られたの一言。ついで、言いたくない。真相に迫るべく数多の専門医、心理相談員、警察、誰にも話をしたそうだがな。」

「あ？ 扉の君伝説はどうしたんだよ。出てこないっていうのはどこに行った。」

関野が突っ込むと、苦笑した顔で千ヶ原は自らを指した。

「それは、俺たち新聞記者の間で通じる名前だってことだよ。マスコミ関連は基本警察の見解からしか情報を得てないのが実情だ」

言いながら、なぜか千ヶ原はあたりをきよろきよろと見回しだすと、耳朵の辺りをきつく握るような動作をした。どことなくせわしない雰囲気も漂わせてくる。何か言いたそうだが言い出したくない、そんな形で口が開いたかと思うと、思いつき引き結んでをすう度繰り返していた。

「何かいいたいこともあるのか、千ヶ原。それとも話し辛いつて言うなら別に話さなくても良いぞ」

「いやな、そんな話したいことじゃないって言うのは。違うというか。お前だって話したくないことじゃないのか」

「ああ？ 何がだよ。俺にも共通で話したくないことなんてあったか」

関野はまるで分からないという調子で、煙草をくわえたまま千ヶ原に聞き返した。そんな関野の問い返しにも、やはり千ヶ原は陸に上がった魚のように口の開け閉めを繰り返しているばかりだ。

数分、そんな状態が続いたが意を決したように千ヶ原が聞き返しに答えた。

「なら、率直に聞かせてもらうぞ。お前どうやって彼女のところにに入れてもらったんだ？ 菓子か、弱みか、同級生でも呼んだのか？ それともお前の顔が、あ、いやそれは無いな」

「彼女も結構言いたい放題言ってくれたが、お前もよくよく考えてみれば遠慮が無いんだよな、千ヶ原。俺は数回押し問答して。それが彼女の回答に当てはまりでもしたのか、それで入れてもらったんだ、お前が考えているよう」

「んなんだとおおおお」

答え途中に千ヶ原から絶叫に近い大声が飛んだ。その声に、近場を歩いていた記者仲間や、事務若い女性が驚いてこちらを振り返ったり、角からこちらをのぞいている。関野は思わず煙草を口から落としそうになって、手で煙草ごと口周りを押さえた。火傷しかけたが、机の上に灰が落ちただけで本体は落とさずにすんだ。

危なく下のカーペットに取り落としそうになった関野と、周囲の人々に何度も頭を下げつつ千ヶ原は小声で言った。

「そんなもんだけですんだのかよ。ほかの奴らがどんな目にあったと思ってやがる。怒らせるだけならいいが、下手したら事情聴取沙汰になった奴までいたって言うのに」

その言葉に関野も目を見開いた。愛華に関していい思い出がないのは自分だけだと思っていたが、どうやら人がそれだけ裂かれたのはやはり彼女の病氣や病院対応、それだけじゃなくあの性格も原因だったらしい。

「ほ、ほんとうなのか、それは。俺はそういった話を聞いて無くてな」

そういう関野に、千ヶ原は自重めいた笑いを含んで喫煙室の天井を見上げながら、関野と同じように煙草に火をつけた。魚の症状はもはや出てないが、軽く肩が震えているのと眉の間が狭まり、その様は堪え切れない怒りを語っているようでもあった。

「かくいう俺は扉の前で三時間。粘ったがそれに対する言葉は最初の『約束じゃない』の一言だけ。質問を続けて、時には黙り、被害者の好みだっていう菓子類のつめ合わせ五千円相当を持っていたんだが、ああ、思い出すのも忌々しい！ あいつは何したと思う？ 扉の前で菓子を持っている俺の事を『いやああ！ 私の服を破らないで！ 変態！』と言いやがった。おかげで事務所からすっ飛んできたナースに警察呼ばれかけるわ、モップで背中打たれるわ」

そこまで言って、千ヶ原は打たれたのであろう背中をとんとんと叩いて見せた。変質者扱いされる羽目になるとは……、自分がいかに好待遇で、彼女に迎えられていたのかという事だ。そうなった理由は今思い出したくは無いが。

「で、そのまま帰ってくる羽目になったのか。警察は呼ばれずにすんだのか？」

「呼ばれはしないけどな。ほとぼりが冷める前で俺はまだ事件中ご

ろだったからそういう待遇になったらしい。後でもそういう事が起きたらしいのを別の社のやつから聞いたけどな。だが、問題はそこじゃない！俺が持っていた菓子をあの野郎、いつの間に扉を開けたのか分からない素早さで奪いやがったんだ。今思い出しても頭に血が上りそうになる。あの菓子を食いやがって。俺も楽しみにしていたのに。」

悔しそうな溜息をつく千ヶ原に思わず噴出しそうになる。堪えかけわずかに煙が鼻から漏れて、自分の前で揺れて消えた。愛華なら今千ヶ原が言ったことくらい難なくやってのけそうだな。

「たかが菓子くらい、情報仕入れるために俺だってそれくらいのことはする時だってある。事件初期で警察を呼ぶっていうことが起こったのに俺はおどろいたがな。」

口元が引きつっている関野を睨みながら持っていたまだ長い煙草を銀皿に突っ込むと、ちよつと冷めたコロンビアを飲み、千ヶ原は口を少し尖らせた。

「くそ、「フォレスト・ルーベンス」だぞ。あの銘菓、『フォレルベ』！バームクーヘンが絶品なんだぞ。関野、菓子嫌いじゃないならお前だって一度食ってみればいい。絶対に俺の悔しさがわかるはずだ。」

「わかった、わかった。脱線はそこまでにしといてくれ。それで、結局彼女は何一つ語ることなく現在に至っているという事でいいのか？」

軽くなったはずの空気がまた少しのしかかってきた。どうやらあの部屋の前に立った記者の数は関野の想像を超えるところであるら

しい。軽口を叩いていた千ヶ原もそれには黙りこくってしまった。

「ああ、そうだな。まだお前以外にはそこまでかたっている奴はいないだろうな。新聞仲間ではあの怪奇事件を取り扱う事さえ嫌う連中が多くなっている。俺たち実真東のそこから毎日々、早駆、地両千、果ては唯事新聞（ゆじしん）とかいう宗教関連の新聞社までもだ」

自社以外に千ヶ原があげたのはライバル社である二社と、新規立ち上げの一社。いずれも記事に関しては余念が無いまでに情報を仕立てる。だが、それ以外に、あの情報追及には遠慮の文字が無いと言われた唯事新報までもこの事件を嫌いだしているという事実には驚かされた。千ヶ原の話を聞いているうちにどんどん自分がかけ離れた事柄に引きずり込まれているのが分かってしまい、関野はすでに三本目になる煙草に手をつけていた。

「ああ、悪い。そろそろ俺も行かなきゃならない。仕上げ作業に掛かっているのが一件あってな。又なんか合ったら俺のそこにも話をつなげてくれよ？ 多少だが知っている限りの事は手伝う」

千ヶ原は、そういつつ吸いかけの煙草を銀色の吸殻いれに突っ込み関野のそばを離れた。

後に残ったのは関野が吸っている煙草の煙と、不明瞭な背景ばかりだった。

Key 2 流転の門3

二度目の病院への足を運ぶ事になる時、関野は仮病をでっち上げてでも帰りたいかった。あの状態が嫌いなだけであって、実のところ愛華が悪いわけではない。あの空気、どうも納得がいかないが病院以外の空気が自分を囲むのが耐え難い。

一週間前に訪れたときと同じナースが受付に立っていて、こちらを見てからそそくさとどこかに行ったのにも気に入らなかった。

少し薄汚れている床を踏みながら歩いていくと、愛華の病棟からかすかに声が聞こえた。階段手前で関野が立ち止まると、その声はやんでいたが上階でエレベーターに入る男が見えた。どうやらその出で立ちから同じ同業者らしい。扉が閉まる前に聞こえた言葉は、

「あの糞女、忌々しい。――」

怒りと恨みを含んだ低い呟きだった。

その後はこもってしまった音で聞き取れなかったが、どうやら愛華に扉前で駄目だし、絶対的な拒絶を食らったのだろう。見覚えのある帽子に関野は思い出すようにつぶやいていた。

「ああ、確か。……塚本？瀬本だったか？」

どっかの荒事ですれ違っただけの記憶だったが、あの色鮮やかなキャスケットは覚えがあった。後は言動がすさまじく下卑た男だというくらいだ。

ハッとした、もしやつが愛華の病室に先に来ていたのだとしたのならば？関野が煙草を取り出そうとする動作をしながら、愛華を思い出してしまい胸ポケットの手前で、持ってきていた右手を下ろし

た。

「何てことを。俺は数段底意地の悪くなった彼女、いや、悪魔を相手にしなくちゃならんのか。」

彼女に会うだけで気持ちどころから体温まで下がりそうになる中、あの病室の前に関野は立っていた。

いつものあの日差し、そして靴の底から水が染み入るような冷たい空気。取っ手を回して入っていいのかと悩んでいたところ、向こう側から一週間前と変わらない、錆付いた音を立たせて扉が開いた。

喉仏のあたりが嫌な音を立ててなる。彼女の機嫌は予想通り悪かった。

「で、何で俺がきた事が分かった？ 扉は確かノックしてなかったはずなのだが。」

少し声が上ずらせて、関野は愛華に声をかけた。少しばかりあがっている毗が関野をじっと見据えたが、無精ひげが残る関野の顔を見た愛華は硬さの取れた笑みを返した。

「ノックしてなかったんじゃないくて、迷ってたんでしょ。思い切りの悪い人影なんてあなたぐらいよ。ついでに、その前に来ていたあいつなら遠慮なく扉をがちやつかせるしね。」

はき捨てるように行ったのは、先ほどの新聞記者の事だろう。鼻にしわがよっているところから見るに、彼女でもあまりいい記憶のある相手ではないらしい。

「あー、苦手なのか？」

「ん？ああ、そうね。苦手というか、うっとうしい天然電波ラジオが歩いてきたという風に思うわ。思うようにしているというべきかしら。」

肩を少し浮かせていった愛華の顔は口元だけ笑っている凶悪な笑顔。何をしたのかは分からないが、どうやら相当怒らせたらしい。

「どこの記者なんだ？」

「聞いてどうするの？」

なぜか口をついて出た言葉にちよっと、口ごもりながら関野は続ける。

「あーと、そんな状態で話して欲しくないという俺の個人的な要望だな。どこの記者か分かれれば、多少対策ぐらい取れるようにしてやる。もっとも、対処療法的なことしか教えられんが」

窓辺の光が病室の床に延びているのが分かる。愛華は言葉を発さないまま、関野の手を引いて病室に入ってしまった。そのときにかまれた手首にやわらかい力がかかった気がしたが、顔を見ることはできなかったので関野は気のせいと思う事にして、その後に従ったのだった。

あいも変わらず殺風景だった部屋は、いつの間にかつけられていた可愛いらしい金魚型の風鈴が風に揺られて軽やかに歌っていた。そして、クーラーがついていないのに愛華の部屋は風の通りが良いらしく、いつも病院の湿っぽい空気と、表から香ってくる公園の木々のおいさが混ざりあった日の光のおいがした。

「いらっしやい？っていうのも二度目ね。なんだかあなた以外をこの部屋に入れるときは基本しゃべりたくなくて黙っているから、時々自分がしゃべれなくなってるんじゃないかって思うわ」

「喋りたくなくって、喋れなくなっていると思うってか。それはなにと都合が良いな。自分がそう思っているから『喋れない』っていうのは、言い訳に近いだろ。実際俺と話している間だけ多弁って言うのみな」

そういった関野に、愛華は凶悪な顔でにっこりと微笑む。この微笑に背筋が又冷氣におそわれた。

「あら、いうわね？でも実際話しているのを知っているのはナースたちもよ。心理的外傷がすこし緩和されているから、貴方の事は歓迎したいって言っていたわね。そんなところで、その元になった人間があたしを傷つけたとしたら？ねえ？関野幸一さん」

ああ、と関野は極寒の眼差しに晒された。やはり機嫌が悪いのは変わっていない。まくし立てるような発言に加えて、一転して自分を突き落とせる状態を作り出すところなど悪辣極まりない。

本当に自分はこの先彼女の記事を書き続けることが出来るのだろうか、と、切実に安危の境が気になってくるところだ。途方にくれている関野を見て気が晴れたのだろう、愛華は寝台の上に乗し、足だけもぐりこませるといつでも話が出来るようにしていた。

「まあ、少し突いた位でそんな顔ばかりされても困るわ。約束の話、とつと始めましょうか」

「で、その話を聞いてから俺の記事の話になるのか、それとも反対か？どっちだ」

逡巡したよう頬杖をついた愛華は、「私」と一言ですませる。それを聞いて、今度は関野が深々と溜息をついた。

「おい待て。俺がこの前の約束に応じたのは事件の話を聞かせてもらえるからと言う事だったんだぞ。その約束を反故にする気なのか」

もちろん彼は話を聞くという約束を自分なりに守る気だった。だが、彼女は守ってくれるかどうかさえ分からない。関野の問いにも愛華はまったく動じる様子見せずに、ついた頬杖の位置を何度か直しながら仕方ないというような調子で言った

「反故にする気なんてないわよ。だけど、私の話が先になったぐらいで文句言わないで頂戴。それにねえ」

「なんだよ、この上まだ約束事を増やすつもりなのか」

彼女の事だからろくでもない条件を更に増やすのではと関野は声を荒げた。

しかし、それに応える愛華の声はなぜか小さかった。

「違う。私が優先にして欲しいっていうのはあるけどね、まだ波が激しいのよ。好不調の。この前のあのあと、薬が無かったから困ったんだからね」

「あのあと？」

関野が鸚鵡返しに聞き返すと、彼が部屋で飲んだ水差しとコップを愛華はあごで示した。けれど、それだけでは納得がいかない。何の薬が係わっているのだろうかと思案したところでハタと、気づい

た。気づいたと同時に、驚きと怒りが芽生えて出す仮説に行き着く。

「俺の推測だが。愛華、お前水差しの中に何の薬を入れてやがった」

そう、もしも薬が入っていたら、それが精神安定剤のようなものだとしたら、考えてみれば関野も気づいていたはずだった。誰とも知れぬ病室で、幾ら前日徹夜をしていたとはいえ、いきなり寝るのだっておかしい。こんな形であるときの眠った理由が分かるとは思っても見なかったが、そういう関野に対しても愛華は声音も変わらずにしゃあしゃあと言つてのけた。

「人が用意しといた水差しの水の中身を確認せずに飲むほうが悪いでしょ。あれは、飲み薬が飲み辛いから私がお医者さんに確認とつてから飲むようにしといた安定剤入りの水なの。おかげで、あの後自分が飲んだと思われて次の薬まで結構しんどい時もあったのよ」

「しんどいかどうかはともかくとしてもだ、言えよ！ 薬が入っているの一言ぐらい」

「自分で許可をもらって飲んで、寝落ちた人の台詞にしては図々しいわよ！ まあ、それを利用してもらったのはあるけど、その結果に導いたのはあなたじゃない。どうなのよ、それは否定できるの？」

愛華は、途中から語調が萎えたものの、関野の言葉を強烈に打ち返した。納得が言っていないとはいえ、愛華の言葉も事実、そして関野の言葉も事実。双方が拮抗したようににらみ合う。どちらかが折れるまで、その姿勢は崩れる事はなさそうにも見えたが、先に姿勢が崩れたのは愛華のほうだった。腿から先を覆っていた布団の上に前屈をするように、前のめりに崩れる。

Key 2 流転の門 4

「なんだよ。いまさら病氣ぶってるんじゃない。いや、なんだ、本当に具合が悪いのか？」

関野も多少血が上っていたが、愛華の威勢が今日は少し違っていた。前のめりになったままで投げ出された手は以前あったときよりも白かった。仮病ではないかと勘ぐりながらも関野が近づくと、それに気づいたように頭が上がり、愛華の目線とかち合った。

「言ったでしょう。今、波が激しいんだって。文字通りそれに左右されるから、私が話したくないから話さないわけじゃないのよ。私からの話を聞いてもらって、それで聞いてもらったことに対する安心とか、そういう類のものが出来るから後のことまで話せるの」

前かがみのままで顔だけ上げてこちらと話していたが、愛華は大きく息を吸うとぐっと布団に腕を突っ張るようにして顔を上げた。

「こんな無様すぎる姿晒して悪いけど、早速話を聞いてくれる？きついから」

愛華の顔は辛さを押し殺しながらも不敵に笑っている。自分を無様と揶揄したのも半分は本気でそう思っているからなのだろうか。病人という言葉を使っても彼女は、自分の駆け引きの材料に素振りを見せるが、具合の悪い様を見せ付ける事はしなかった。

愛華はもちろん、駆け引きの場でそういう手札を使う事はあったが、自分の具合が悪い状態を誰かに知られる事は嫌だった。それが彼女の矜持だから、今自分がもてる数少ないものだったのだから。
プライド

実際に同情されるのは真っ平ごめんだった。それだから、次の関野の言葉は思い切り彼女の地雷を踏んでしまう事となる。

「辛くは無いのか？ 日を改めて話すほうがいいようにも見えるが」

「今言ったことちゃんと聞いていたの？ 早く話をして、私が楽になったら貴方に話すって言っているでしょ！ 話をして、楽になったら話が出来るからそれまで待ってって言っているのよ。約束破る事になったら何でも逆にこっちが言う事聞いてやるわ。いいっ？！」

「しーっ。わかったよ、そう怒るなって。俺が話をちゃんと聴かなかったのが悪い。そうだな。お前の声で看護師が来たらそれこそ話が出来なくなるだろうが！」

思わず口元に指を置いてあわてて愛華の言葉を制した。怒りの表情のまま、ついと横を向いてしまった愛華をなだめる様に言葉をかけて、やっとの事で不機嫌煮まで戻した。しかし、愛華のそんな怒声の内情を知らない関野にとっては、何がなんだか分からないまま、話を聞かされることとなったのだった。

「ふうー。いいわ。じゃあ、話し始めるわよ」

「今回はあの部屋に行く必要が無いのか？ 俺はそれならそれで嬉しいんだが。前回は結果としてあの状態で話すことになったけど、薬の力を借りて俺が眠らないと話はきけないのか？」

不機嫌な愛華は手を遊ばせながら、怪訝な顔で関野を見つめ返した。

「必要ないわよ。あの時は偶然ああったけど、本来はどっちでもいいのよ。どのみちアレを体験してもらうのが早いかなだけだったし。行きたいって言うなら、安定剤を今回は予備の分があるから。今の聞いてそれでも飲む？」

「出来るなら、あの部屋はよっぽどのことがない限り回避したい。未だに信じたくないけど、本当じゃないともいえないところなんだが、アレを現実と決めてしまうと何か大切なものをなくしそうな気がするよ」

そういうって持っていた青いボールペンで頭を掻く関野の安心して緩んだ表情を、話してである彼女はなんともいえぬ表情で見つめていると、ゆっくりと夢語りをはじめたのだった。

開いた扉の先がどこだったのか、それを考える暇があったら教えてもらいたい。愛華の踏み出した先は、足先に当たる芝生がさわさわと 足の裏をくすぐる草原？ いや、丘陵地帯だった。

背後を振り返ってみるとやはりすでに扉自体が存在していない。

「いったいどこからこちらを見てるんだろうなあ？」

ぼやきと呟きとも取れぬ声に、耳元でシュウラの風のように通る声が過ぎ去った。

「どこからでも。今回もここをどこまでも進んでいくことだ。」

驚いて耳に手をやったがやはり彼の姿なぞかけらもない。左右を見渡せば同じ丘陵地帯がなだらかに上へと続いている。見上げる先空が見えているし、その先が見えなくてもそう大きくない丘は歩きやすそうではあった。

とかく、また、歩くしかない。

先ほどの世界と比較すれば、水の中じゃないし時折体をなでる風も吹くどこか穏やかな世界だ。ただ、ずっとひたすらに丘が続いている以外は。

歩くべくして歩かされているのか。それとも歩いていく事で何かが始まるのだろうか？愛華の謎の答えを導き出せるのは大方の事情を知っているであろうシュウラと、この先に何かがあるか自分で見る以外にはない。

青々とした風の中をどこまでも進んでいく。心地よすぎて夢なのを忘れるくらい清涼としているここは、自分の中にある何かを引き出してくる。郷愁か？と問えば違う。ではなんだろうか、唯心地よいというだけでこんなにも透き通る感情が持てるものだろうか。

気づけば歩いている事を忘れそうになった。

「あ？ 何で歩いていたんだっけ。」

軽くまぶたを開けてもう一度見ると、丘の上まで歩ききっていた。そして、丘の先に見えているのはさらに連なる緑の大海。その中でまばらな胡麻粒が転々としている。

その転々とした何かは動いているらしくて、こちらの歩くスピードよりも早かったり、時に立ち止まったりを繰り返しながら、一定のところからあまりはなれずにいた。

「草原にゴマ粒か。なんとも形容しがたい光景だろうな。そんなでっかい胡麻が転がってれば。」

席に座ったまま茶化す関野に、愛華は少しつぶやいて関野にいった。

「ああ、説明して欲しいなら言いなさいって言ったじゃない。胡麻粒は比喩。実際に動いていたのは人間よ。」

思わず持っていた缶を少しへこませてしまった。やはり只では話
は進まないらしい。

関野のその反応をみて、したりといった顔で愛華は笑った。

「ええ、そうよ。人だったわ。」

実際に近づくまで愛華はまたひたすら歩く羽目になったらしいが、
近づく事はできなかった。

草原は思っていたよりもずっと広がっていて、果てがない。胡麻
粒のところにとどり着くまでの距離感も狂わされていたらしい。

現実の時間の概念が適用されないこの夢の中では、時間の感覚を
求める事自体が馬鹿らしい事だった。

やっと小さな歩幅で遭遇する事ができたそこにみたのはいくつも
の人、らしき物体だった。

人らしきといったのは理由がある。彼らは確かに人なのだが、形
は人でありながらどうみても影のように薄くなっている人もいると
いう。まるで昨今見たシュウラと重なるようでもあった。

「あなたも、ここに連れてこられたの？」

自分よりも背の高い人に話しかけるのは怖い。それでも誰かいる
ことは愛華にとっての安心でもあった。話しかけて一分ほど、声が
小さかったのだろうか、彼らしき人影は何を告げる事もなく愛華の
横をすり抜けていった。

「え？」

彼の目を少し離れたところから見ても、見えてないわけではないはずだった。彼は何かを探しているからだ。ただ、口は動いても言葉は聞こえない。そしてかわらずにどこかを見ている。

反応は何一つないまま、彼はみるまに透けていきそして草に溶けた。もちろん驚いた愛華は消えた草に手を付いて探しだす。だが、男性が草になったのか、それとも草が男性を飲み込んだか、はたまた草のさらに下の地面に降りていったのか。愛華は分からずに首をひねった。

「どこにいったの？なんで草になんか」

見終わった後から背後で音がする。そして、何故だか自分の右腕に鳥肌が立った。すぐに風を伴って振り返ると、思ったとおり彼はまたこちらに歩いていた。消えた場所から土の中でも移動したのだろうか？そうこうしているうちにまた、彼は目の前を通り過ぎていく。

何を見ているのか、そして何でまた行ったりきたりを繰り返しているのか。愛華はその表情だけでも見ようと必死に爪先立ちになった。まだ背の低い愛華にとって彼の顔を覗き込む事はちよつと無理があったからだ。爪先立ちになった愛華の横をすり抜ける際、彼も何かを感じたのだろうか。顔がこちらを……。

「————ひうつ」

口の端から笛が鳴った。彼の顔を見た、いや、いつてみれば何かとして見られたのだ。男は笑っていた。それはもう満面の笑みで。細く細くつりあがった口唇、顔の端には長い間笑っていたのからな

のだろうか、刻まれたしわが小さく震えている。

「あ、の、なんでもないです」

返した言葉に反応はない。男はまた先ほどなぞった道を、引きずる足取りで歩いていった。

その姿を見送りながら、愛華は恐怖を感じた。最初に赤の他人が笑ってこちらを見つめている恐怖。続いて湧き上がってきた恐怖は理解できないものだった。なぜそう感じたのか、胸元にナイフがペタリと張り付くような冷たい恐怖。小さな音が自分の歯の音だと気づいても、とまらないまま彼女は男を見ていた。そして、また目の前で男は消えた。

Key 2 流転の門5

咳き込む音がその時話をさえぎった。ペンを走らせていた関野は、筆を止めて少し青くなっていた彼女の顔を見つつ、質問をした。

「消える男ね。で、そいつは正体が分かったのか？」

初めて出てきたシュウラ以外の人物だったが、普通の人間ではなかったらしい男について、愛華に答えを促した。日差しが入っているところから陰になっている愛華の場所では分かりにくかったが、みればだんだん青白くなっていくようにも見える。

「第二関門が終わる前に、シュウラが教えてくれたわよ」

咳き込んでいた喉をさすり、声の震えを抑えるように喉元に手を当てていたが、愛華の声は震えていた。色が変わった顔と息苦しさに呼吸がすこし荒くなっている。男の話になってから彼女の様子は悪くなっていく一方だ。話を聞いている関野にもその苦しさは伝わっていた。

「どうした？ 思い出したくない事なのか、そいつは」

「ええ、あの関門が越えられなかったら、私も彼らと同じ目にあっていたから。あれは、思い出したくも無いこととは言い難いものだけど、気分が悪くはなるわね。話すとすこしだけ」

喉に手を当てたまま、愛華は言い切った。押さえている喉元の指先がすこし白いことから、強く自分の喉を押さえているのだろう。息を止めやしないかと心配になり、関野は思わず椅子から対上がっ

た。

「そんな風に自分の首を絞めるな。息が出来なくなったら話も出来ないぞ」

「わかってるわ。でもね、押さえていないと息がとまりそうで苦しいの。大丈夫」

愛華がそれをとめると、自分の喉からゆっくりと手を引き剥がした。引き剥がすときにも力を緩めなかったのか、喉元にはうっすらと薄紅の爪がなぞった掻き傷が残った。

病室の一線に弦を張るような細い緊張が関野にも伝わり、外を雲が走っていったのか、部屋に一時の影を落とす。

「そのまま、それは俺が聞いてもいい事なのか？」

落ちた影が走り去るのを待って、関野は愛華にたずねていた。

「聞いてもらわないと話にならないっていたら？ まだあと1つ試練の話が残っているのにここで私が止めたら。あなたも私の事件の真相を聞けないわよ」

引き剥がして互いを押さえ込んでいた手をゆっくりと下ろしながら、彼女の声は元に戻っていった。

震えなどでとめられるものか。彼女の雰囲気がそう語っている。自分の体は震えているにも拘らず。関野は彼女のそんな姿を見て、頬のあたりを掻いていたところ、時計を見てから愛華を見ずに言った。

「んー。なら俺が少し休憩を取るぞ。今日は夢の中じゃないしな。」

「はあ？ まってよまだ話せるって言っているじゃないちよつと」

関野はそうとうと振り返りもせず席を立て、ドアをガチャガチャと開けて病室からさっさと出て行ってしまった。振り返りもしなかった彼の背を、まだ収まらない震えを抱くようにして、愛華は自らを暖めた。

「なによ。冷血漢。」

震えている声に反応する人がいるのでもないのに、どうしてかつぶやいてしまっていた。白い部屋がまた自分を圧迫しているのを感じながら、自分を暖める事だけに意識を向ける。いつもよりも震えが収まりづらいのを腹立たしいと思いながら、指が白から赤になっても愛華は握り続けた。

「ほれ、お前も休憩だ。」

集中していたはずの意識が別の振動で破れる。その前に誰かの声が降った気がした。何かシートに重いものが沈んだ気配に震えの収まらないまま抱え込んでいた頭ごと体を起こすと、ベッドの足先に汁粉とかかれた小豆色の缶が転がっている。

「何で汁粉？」

汁粉の缶に愛華は質問していた。嫌いではないが甘ったるすぎるそれをじつと見ていると、隣から声が降った。

「ココアとかポタージュが売り切れていたからな。お茶系はお前の好み分からないから、とりあえず汁粉にしてみた。」

続くコーヒー缶の蓋を開ける音とともに、先ほど部屋を出て行っ
たはずの関野がこともなげにいすに座りなおしていた。戻る時のド
アの音が耳に入らないほど自分が憔悴していたのだろう。ブラック
コーヒーを飲みながら関野はお前も飲めと、缶を振って勧めている。

「一瞬言葉が出なかったわよ。」

汁粉を持ってくる関野の感性にか早業にか、愛華は何にか言葉を
置く事はしなかったが、足の先に落ちている缶に手を伸ばしてとる
と、飲むでもなく胸に当てるように抱いた。飲むより先に、自分の
体以外のぬくもりが欲しかった。

暑さをはらんだ表の空気でさえ自分には冷たい。誰か生きている、
今ここにあるという証拠の熱だけが、ぬくもりを自分に思い出させ
てくれる。

愛華の震えは渡された季節感のない缶のぬくもりの中で、ゆっく
りと収まっていく。缶のぬくもりのおかげだけではなさそうだが、
それを気にするとなにやら負けた気分になるようで、何事でもない
ように愛華も習って缶を開けた。

開いた飲み口から長い間飲んでなかった汁粉のにおいを嗅いで、
そつと口をつけるとまだ少し熱くて、喉に残る甘味は、通り過ぎた
愛華の舌先に軽いやけどを残した。

「何かあったか？戻ったら余計に震えているようだったが？」

「発作みたいなものが起きただけよ。それにしても、夏場の病院で
しかも入院中の女子の患者に汁粉持ってくるあなたの感性が素敵だ
わ」

悟られまいと愛華が嫌味ったらしく言ってみると、案の定関野は『可愛げが無い』と、目線をはずした。

「へーへ。俺は女の相手なんておふくろぐらいで充分だと思っている男なんぞね。飲みたくなければ飲まなければいいだろ」

休ませるつもりで缶を置いてやったんだが、と関野は内ではやいていた。やっぱり曲者である認識を変えないほうがいいのだろう。何事もなかったかのように汁粉をちびちびと飲む彼女は、何を考えているのかやはり分からない。自分の言葉をずらした気もしないではないが、愛華にも含むところはまだあるのだろう。それほど仲良くなっていない相手に突っ込まれたくない領域もあるはずだ。

関野は汁粉を飲む彼女を見ながら、本来の目的である事件の話についてまだ切り出せていない事に気が付いた。

「おい、休みにこれを訊くのは野暮かもしれないが、事件の話について触れても大丈夫か？ 夢の話でできなくなったなら何か別の話をするって言うのもありだろう。少しばかり話してくれないか？」

愛華はその問いかけに、軽く肩をひそめた。その瞳は関野から目線をはずさずに、じっとこちらを見ている。

「無理。なのか？ それとも」

「少しくらいならいいわ。だけど、事件が起こる前からの話でもいいかしら。思い出しながらこっちも話すけど、直接事件の事について話すのはね」

濁した言葉からは、やはり事件の事も辛いという感情が伝わってくる。愛華が話す気になった事だけでもいい兆候だと自分に言い聞

かせ、硬い笑顔で関野は返した。

「ああ、いいさ。少しでも話してくれるならありがたい。進展がないと俺も会社から文句が来るからな」

記者である自分と被害者である愛華との関係は、彼もわかっている。けれども、目の前の患者に対して同情を感じないかといえば、そうでもない。相手がどんな状態であっても情報を聞き出してこそが自分の職業なのだ。言った言葉とは裏腹に、関野は別の言い方があったと思い、自分のライターを右手で握りかえしていた。ライターの握られる音を聞きながら、その相手である彼女は汁粉を途中にして隣にある机にそっと置くと、夢の話よりも、切れの悪いかたちで事件について語った。

「確か、そうね。あの日は両親と旅行から帰ってくるところだった。」

伏せるでもない瞳は、彼女にとってはもう遠い過去に向けられていた。ひどく霞がかかったように過去を見ている愛華は、自分の右腕をそっと手のひらで叩き、過去を言葉に出そうとしている。

「あの日の前、すこしだけ家族で揉め事があったのよ」

「揉め事？　　たちって聞いてもいいのか」

たいした事じゃない。というように鷹揚に彼女はうなずくと、そばにある汁粉をもう一度手に取り含んでさらに続ける。

「本当にたいした事じゃなかったわ。たかだか、帰る順を遅らせて近場の美術館と併設している菖蒲と杜若あやめ かきつばたを見に行きたい。そんな話

だったのよ。」

彼女の語る花は五月に咲く花で、少し開いていた窓から来る鳥のさえずり、セミの声。前に来ていたときには感じなかった表の音は愛華の話し声にそっと重なり、あの事件から流れた時間を感じさせた。

「母はね、そこまで回ったら帰る時間が遅くなると、猛反対していたわ。父と私は乗り気でね。その晩は……そうね、明日も帰るって言うのがあったせいかもしれないですね、すぐに眠ってしまったわ」

「寝てしまったのなら、睡眠不足とかはなかった、ということではないのか？　しかし、父親が運転していたはずだろう。事故は対向車が突っ込んできたにしてもだ」

「対向車が突っ込んできただけじゃなかったと、私は思っているわ」

はつきりと愛華はそういいきった。事故の燃え盛っている車体を思い出したかのような恐怖を含んだ声で、それは彼女の身の内で燃え盛っている。みれば、又すこし震えが走っている。でも、いったい何を知っているのだろうか？

「対向車が突っ込んできたわけじゃなかったって言うのは引つかかる。事件の話をすこしは聞いてきていたが、警察の見解とも違うみたいだ」

「そういうなら、そうでしょうね。警察の見解ではそうとしか見えないでしょうしね」

どこまでも含んだ物の言い方は、あらゆる方位になぞを張り巡ら

せているようだ。彼女が知っている事故の原因は、それ以上に知ってはいけない何かを警告しているようにも関野は聞こえた。

「本当に、お前は何を知っている？ 辛いだけじゃなくってなんというかな、お前が何か事件は別の事が原因という言い方がどうも引かかる」

窓を向いていた愛華の顔が又こちらに戻ってきた。部屋に入ったときと同じ、あの自信に満ち溢れた表情の半分、そしてその半分はうかがい知れない感情だった。あえて言うなら、悲しい？ 何かに対して悲しがつているような、そんな表情だ。

「そうね。今話しているのもだけど、やっぱり事故の事を話すのはすこしきついわね。もう少し話を加えるなら、あの旅館の事ぐらかしらね」

「旅館？そこになにかあるって言うのか？」

「ふふっ。どうかしら、案外私のことだから貴方をからかっているだけかもしれないわよ」

そう言いながら目を浅く閉じる彼女は、関野の目にもあまり話を続けられる状態には見えなかった。やはり、精神のほうにも負担がきているのだろう。

「その、なんだ。やっぱり苦しいんだろうな。もうあれから数ヶ月経っているが、両親の事は？」

「聞いているわ」

愛華の返答は速やかだった。先ほどまで見せていた瞳の温もりが冷えていくような冷たい無表情の顔、まだ、そこに触れる事を許さないのを如実に物語っている。

「即死、だったのがせめてもの救いだってね。って言われたから」

「な?! そのまま告げるような奴が…: ああ、そうか」

思わず声を荒げた関野は、自分の言葉に気づき渋面を作った。そう、先ほどの毎日々新聞の口汚い男は、たまたま関野が見かけたかったわけではない。彼は時間帯がすこしずれていたなら、扉の前で遭遇していたかもしれない男だった。

入る前に愛華がいていた、男に対する悪態ももしかしたらと関野は思うと、やりきれない思いになってくる。

「俺の業界の奴らじゃ、そうまでして情報を吐かせようとする奴だっていたな」

「そうみたいね。中には事故被害者の親族連れてきて泣き落としとか、さらにどうしようも出来ない事をする人もいたわ」

多種多様な探りの手がいくつも彼女に伸びていたのだろう。一時はテレビ番組の出演依頼まで飛び交ったというほどだ。だが、彼女がそれを許さなかった。いや、拒絶したから番組自体は存在しなかった。

それでも、情報を求める手は休むまもなく次から次へと彼女に対して網や釣り針を張り巡らしていたに違いない。

布団の上で座っていた愛華だったが、やおらそこから立ち上がると靴下のまま窓辺へと歩み寄る。唐突過ぎる愛華の行動に、関野も

それを見ているしかなかった。

愛華はそう言ったあとで、いじくっていた髪まとめのゴムを両方とも乱暴にはずした。緩く編んでいただけの髪は開けていた窓から、吹き込む夏の風にあおられてすこし舞い上がると、肩からすこし下に収まった。

「だけど、私は何も出来ない」

髪を解いた愛華の面差しは縛っているときよりも幾分か大人に見える。知っているからこそ、そうとしかいえないと彼女は語った。

「事故で被害者にならなかった人間がいるなら、分かるわ。少なくとも被害にあったあたしだってそうよ！被害にあわなかった人間に何かしら言う権利はあるかもしれない。でも」

声がしおれ、風に揺れる髪の隙間から彼女の目が潤んだのが見えた。どこに言うでもない。何処かに言えるものでもない彼女の本音がそこにあった。

「なのに、どうしてこんなに攻められなくちゃいけないのよ」

誰にもいえないから、それは出来ないから。何処へとも無く呟くしかない。愛華はじつと見えているはずの窓の外を目に写すだけだった。

「お前さんも、人間だったんだなあ。……ふう」

何も言えずにそれを見ていた関野だったが、穏やかに流れていた風が止まり、彼女の髪が顔を覆ったのをみて、一步、窓辺へ踏み出した。そのまま、歩みを止めずに愛華のそばによると彼女のベッ

ドの脇に立つ。急に陰った日差しと背後の気配に驚いて、愛華が顔を向けると、静穏な面持ちの関野が、愛華を見下ろしていた。触れるでもなく、何を言うでもない。何もいえないからこそ、そこにいることしかできない。

「一週間前に、あんな事があったせいで多少は身構えていたんだ。だがね、そうやって強烈に感情を出しているほうが年相応に見えるし、何よりも、お前さんのためにも良いと俺は思う。」

そういう関野の顔を、すこしだけつりあがった目で言葉無く愛華は見つめていた。何も返答が無いのを見ながら、関野は続ける。

「俺にはわからない。何がどうか、そうだな、記事のネタにお前を労わる素振りをしているのかもしれないと、思うときもある。けどな、そういうことだとしたって、その場その場で思っただけ出来る事しかやってないからな。結局何がしたいのかはその場の感情が一番なんだよ」

そういった関野を何の感慨もなさげに愛華はじっと見ている。まだすこしつりあがった目は関野を見るばかりだったが、言い過ぎたのだろうか、関野が声をかけようとして、やっとその唇が開いた。

「その場の感情が一番ね。だったら今一番の感情はお茶が飲みたい。あまったるーいのおかげで喉がひりついてしゃべりづらいのよ」

どうして、どうしてこうも自分が慰めようとしたり、励まそうとしたりする事をこの少女はぶち壊すのだろうか。いいことではないにしろ、正直なところを話したはずだと思っていた関野は、ピシッと何かがヒビといった音を聞いた気がした

Key 2 流転の門6

愛華が又すこし中断してから話し始めるといことなので、先ほど甘すぎるといわれた汁粉の代わりに緑茶を買いに部屋を後にし、ナースステーションの反対側にある自販機の前に立ったときだった。

「どうやってあの部屋に入りやがった」

背後から朝のだみ声が呼びかけてきた。小銭入れを探っていた手をポケットに突っ込んだまま、後ろを振り返るとあのキャスケットの男が立っていた。あざとく、油断のならないような雰囲気、男は、部屋に入る前に階段で見かけた男だった。

先に飲み物を買おうと又自販機を向きなおし、関野が何かを言ううとする前に男の唇が先に動いていた。

「無視、かよ。まあいいがな。もう一回聞けど、どうやってあの糞生意気な仮病患者の部屋に入りやがった」

「別に、彼女が入れてくれただけだ」

横柄かつ粗暴な言い回しに、関野も言葉が硬くならざるを得ない。愛華が喻えていった電波ラジオという言い回しもこの口調と乱暴さからきているものだろう。なるほど、まさしく波長の合っていないラジオのようにやかましい。

答えた関野が、取り出し口からお茶の缶を取り出す前に、男は先に取り出し口に手をつまむと、缶を奪い取った。

「あれが？ツハ、嘘付け。何をやってもいれようとしないうの冷血女がどうして部屋にお前みたいな奴を入れるんだよ。それとも何か、顔も見ないアイツを言葉巧みに誑たらしこんだのか？　そのほうが説得力あるなあ。そういや、前にも一回会ったことあるよなあ？俺が間違いないかなければな」

「あるかもしれないな。一度見たことのある帽子をかぶっている」

男はそのまま奪い取った缶の蓋を開けるとそれを美味そうに飲む。あまりに粗暴なさまをみるに、こいつはどうやら同じ新聞記者としてみるのも嫌になる部類に傾いている男らしい。

「へえー。俺の帽子を覚えていてくれるとはお前見所あるな。この年代ものの帽子に目が行くやつは、目利きと相場が決まっている。いいぜ、俺は毎日々新聞ので、塚本 将一。何とでも呼んでくれ。で、ついでにお前が手に入れた情報もお裾分けしてもらえたら万々歳さ」

「俺は実真東新聞のものだ。関野幸一。生憎とまだそれほど情報は得てないので渡すものは無いな」

名乗りはしたが、ひくりと、相手の笑顔が引きつった。関野も無表情に徹した顔でそれに答える。飲みきってもいない缶をゴミ箱に捨てると、塚本と名乗った男は、関野のにじり寄った。身長差はあまりないが若干相手のほうが背が高い。ナースセンターを隠すように立ちふさがった塚本のおかげで、関野は視界をさえぎられた。

背後は窓で目の前には塚本、何をする気だと、にらみ合いとなつたときだった。足元の激痛に思わず下を見ると奴の足が、自分のつま先を踏んづけていた。

「足癖の悪い奴だな。だから入れてもらえなかったんじゃないか？
患者に怪我をさせかねないからな」

関野は踏みつけられたの痛みに耐えながら、出来るだけ穏便に悪態をついてやった。あいつがどういう奴かは知らないが、騒ぎ立ててもいいことにはなるまい。

塚本もそれが目的なのだろう、更に力をこめると見えないように胸元の辺りをつかみ、引き寄せると、関野にひくくつぶやいた。

「言っている。お前が何を知っているか知らないが、俺より後から来て、勝手に気に入られて部屋に入り、ついでに情報まで手に入れるなんて納得がいかない？　俺が探した情報も流してやるから意見交換がしたいって、言ってるだけなんだがなあ？　ええ」

「そっちこそな。意見交換がしたいって？　つつう。そう言うのならもう少しまともな意見交換の場でも作ったらどうだ？　ここから見たら不審人物丸出しだぞ」

互いに引く気のない状態が続いていたが、睨み付けていた塚本が大きく舌打ちをすると、足をどかして下がった。離れたとはいっても、睨み付けているのには変わらない。愛華とは違う種類の毒を含んだ目がこつちをじっと見据えている。

「なら、意見交換の場でも今度設けてやろうか？　関野って言ったか今度俺に会ったときには必ず吐いてもらうぞ。ついでだ、その缶をいただいた札にいい事を言ってやろう」

そういうと、塚本の目線は関野の胸元に移った。メモ帳を見ているようだ。

「そいつに何か書いてあるんだろうが、あいつの言う事何ぞ、全て嘘っぱちだ。信じると馬鹿しかみねえよ」

何を答えるでもなく鈍い熱で痛みを教えるつま先のまま、関野は振り返りもせずその場を歩き去ろうとした。また背後で大きな舌打ちが聞こえ、同様に乱暴な足音がエレベーターに向かって遠ざかっていった。

「っゝゝ」

奴が行ったのを足音と扉の閉まる音を聞いてから、関野は足先を右足でこすった。革靴なんて上等なものを履いてないが、移動するのに見栄のする方がいいので合皮の履き慣らした靴を履いていたのがアダとなった。長年も酷使も相成って、靴の先はうすく口を開けている。

駄目になった靴先を見ながら、これからさらに面倒な付き合いが増える予感はあるのだろうと、関野は大きく溜息をついたのだった。

Key 2 流転の門7

飲まれてしまったぶんのお茶を買いなおして病室をあけて戻るまでの間、関野の踏まれたつま先はジンジンと痛んだ。塚本と名乗ったあの男の対策も、愛華以上に考えねばなるまい。

しかめっ面で病室に戻ってきた関野へ一瞥をくれた愛華は、興味無さげに彼の持っている新しいペットボトルのお茶に向かって手を差し出した。

「おかえりなさい。で、お茶」

「ほらよ。ついでに礼ぐらい言ったらどうだ」

ベッドに放ったお茶を布団に落ちる前に愛華は受け取ると、面倒そうに「ありがと」とだけ言った。色々と思うところもあるが、いつ又彼女の具合が悪くなるかと思うと関野は強く出る事はできなかった。

彼女にしてもそれが分かっているに決まっている。色が戻ったとはいえまだ赤みが戻ったわけではないその頬に出来る笑窪がそう、関野に言っている気がしてならなかった。

気がした、そうみえる、それだけでは彼女に問い詰める事はできない。なんとも人の扱いを心得ているものだと思えるのを通り越して、感心さえ覚える。

関野は放ったお茶を飲むのを見届けてから、また緑の椅子に座りなおしていた。

「で、すこしは気分が静まったか」

「多少はね。えーと、たしか旅館の話までしたのよね」

「そうだな、そこまでだった。でも、話せるのか？　また気分が悪くなったりするようだったら医者に来てもらって俺は退散したほうが良いだろう」

「確かに気分は悪くなりやすいわよ。話せないほどじゃないだけよ。あー。でも、旅館にもしかしたら事件の鍵になりそうな話は転がっている　かも、しれないわね。私がわからないところで」

愛華は後半わざと言い淀んだのかわからないが、それらしい事だけを香らせた。彼女の本音はまたも、あの仮面の微笑みの内側にしまいこまれてしまったのだろうか。頭をまた乱暴に手櫛でかきあげると、関野は何事も無かったかのように振舞うぐらいしか出来なかった。

「そうか。なら俺もあとでその旅館とやらを当たってみるさ。で、事件の話はそれっきりか。それとも夢の話にもっていききたいのか」

「あら、分かっているじゃない。後者よ」

「これ以上事件の話がしたくないからか？」

問いかげに愛華は大きく首を振ってそれを否定する。そうして、自分をやわらかく指差した。

「違うわ。事件についての手がかりあげたからまずそっちを調べて欲しいの。それと、さっきの話の続きが引っかかっているだろうか

ら」

腹の探りあいには慣れているはずの関野がこうして指をさされただけで、内側を小さく震えが走る事など、まず無いだろう。その真意が欠片でも本人に含まれていたとしても、表に出す事はしない。

だが、何故彼女は心の内戸の隙間から、それを引きずり出す事ができるのだろうか。そうやって、隙間に入り込んだ彼女の手が自分の内側を撫でていくようだった。

昼を回った日差しがまたオレンジ色を含んでいるのを、目の錯覚にしたくて、関野は目を思い切りつぶった。なんどもその上から目をこすっておそろおそろ開けると、病室の色は変わってないが、空気がまたもや、あの怪奇空間につながったのを肌が感じていた。粟立つ肌がまた自分が彼女に飲まれたことを告げる敗北宣言のようだった。

「ふふふふ。いいわね、又半分貴方から踏み込んでくれたなんて」

「踏み込むだと、目をつぶっただけであの空間に行くって言うのか。ありえないだろう。今回は薬も飲んでないんだぞ」

そう言っている関野の隣を白い光がかけて行った。人工灯の明かりに思わず目を走らせると、表をゆったりと飛行船の影が横切っていた。ただし、現実の空ではなくだ。

向こう側の空間と現実世界の空間が入り混じるそれは、前回の空間に並ぶほど気色の悪い空気を作り出していた。

「分かってないわね——、貴方も。この空間を認めたからあの状態

で現実と夢の半分がこちらに見える状態になったのよ」

愛華の言葉が示す事実、それは否定しているはずの世界をすでに半分は自分が信じているという無意識を肯定する言葉だ。奥歯を音立ててかみ締める関野に対してもやはり愛華は微笑を崩さない。そして、彼もその微笑が何を示しているのかの片鱗をつかみ始めていた。

飛行船が通り過ぎていったあとはまた、オレンジの夕日が、ゆらゆら陽炎が揺れるように部屋の中で踊っている。

「俺は、それに関してはまだ認めない。お前が仕組んだという事だけ考えておく。いずれそれ以外のことも全て納得済みでこれが何なのかをお前に正体ごと突きつけてやる」

言い切った関野に、愛華の口元の月は細く細く開いていた。言い知れない扉の入り口の鍵は、いつも彼女が握っている。自分の引き込んだ相手を満足そうに見つめ、愛華は先ほどの消える男の話を始めたのだった

「随分と大きく出た発言が最後まで言えると良いわね？消える男の話からでいいかしら。」

もちろん消えるって言うのにも理由があるわ。覚えている限りで言っているし、彼の言葉から推測でしかいえないのがなんとも事実性に欠けてはいるけど、あの人は、夢の中で夢を見ているのよ。」

「夢の中で夢を見るか、今の俺みたいな場合に使いそうな言葉だな」

「違う。これとアレを一緒にしないで、あんな性質の悪いものとは又違うんだから」

関野の発言に愛華は怒った。理由がどうしてなのか分からないが、関野が思っているよりも、あの变てこ世界は複雑なものであるらしい。空色とオレンジの色が混ざり合い、そこが薄紫となぜか緑色の蛍光色が生まれている。感情の起伏が多数見られる今日だからなのか、色もさまざまに変化していた。昂ぶるままに、彼女は話を続ける。

Key2 流転の門7（後書き）

愛華ちゃんの夢世界にまたもや引きずり込まれていきます。

少々今回話が短い氣もしますので、すこしがんばって今日中で第8話分を追加で書き込めたらと考えています。

Key 2 流転の門 8

何度も往復している丘での現象は、男だけではないのに気づいたのはすぐだった。差し込まれた恐怖に何度と無く、生唾を飲み込んでいた。視界にいくつかの人影が、同じように足元の地面に吸い込まれては、消える。

人型の人々は表情がうかがい知れないものの方が多い。かろうじて女性のような柔らかな曲線を描いているもの。単純な人間の影型になってしまって、表情だけが顔に浮かんでいるもの。どれも笑っているように口元が歪んでおり、恐怖が晴れずに愛華はさわさわと吹く緑の風にも恐ろしさを覚えた。

「いや、いやいやいや。これ何?! 何なの何なのよ?!」

丘の上を自分の絶叫だけが通り過ぎていき、またあの男性の影が草に飲み込まれていくだけだった。

その人々に触れないように走り出す。後ろを振り返りたくなくて、必死に走った。背後から誰も追いかけては来ないが、それも余計に怖い。

散々走っているうちに目の前が緑になった。続くように顔に当たる柔らかい草の感触。走るのにはかり先走った足は自分が思うよりももつれていたらしい。転んだ目の前に広がる緑に更に絶叫した。

「やだ! やだあああ! 飲み込まないで」

「君はいい線は行くのに、どうして落ち着きが足りないかな」

その声はまたもや、思いがけないところから聞こえた。半泣きになってまだぼやける視界で、愛華はここに一番詳しいであろう声の主を探していた。そしてまた、異様な形で知っている彼の姿を見ることとなった。

緑の丘の続いているはずの場所に一箇所、やたら色彩豊かな瞳が開いている。驚いて尻餅をついた格好のまま後ずさり、坂になった部分から転がりかけて横腹を草の上にしたたかに打ちつけた。痛くは無いにしてもとてもみっともない格好だったのだろう。瞳が笑うほどだったのだから。

「はは。だから、もう少し落ち着きを持てと僕は言ってるんだ。まさか君が名前をつけた相手のことも忘れたのか？」

瞳から又別のお茶の香りが自分の鼻に香る。馴染み深い緑茶の匂いで、愛華はすこし落ち着きを取り戻すと、瞳にむかってにじり寄った。無論、瞳の正体は、シュウラが開いてこちらをのぞいている窓のひとつだと分かったからだ。

「いきなり、そんな出方をされたってわからないもん。変な人っていうか変な幽霊見たいばかりだし。こっち見ないんだよ、あの動いているの」

瞳形をした窓の内側でシュウラの姿がはっきり見えると、彼がお茶を今度は深草色をし、寂びた湯のみで啜っているのが分かる。

背景の春爛漫だった庭はあれから僅かしか立っていないはずなのに、別の庭に変わってしまったようだった。草花の絨毯で飾られていた大地は苔むした岩が置かれた焦げ茶色の大地に、瞳の隙間に見える池は葦が立ち並んでいたはずなのに、睡蓮がぷかりぷかりとい

くつも浮かんでいる。シュウラよりもその背景に気を取られていた注意を、茶を啜っている本人が自分へむけさせた。

「庭をそんなに気にしても仕方ないだろう。僕が気に入った形で庭を変えてるんだから定まった季節や、時期の花を揃える事は造作も無い。で、幽霊って言うのは、落伍者たちのことかな？」

「ラクゴ者って？　えと、それはクイズの間違った人のことなのかしら」

「正解。だけど間違えたのはクイズじゃないがね」

何を間違えたのかを言う前に、シュウラは懐かしむような目で消えては現れ、現れてはまた草地に消える昔は別人だったのであろう、彼らを見ている。シュウラを見ている愛華にも、疑問附とまた先ほど感じた得体の知れない恐怖がわいてきた。落伍者と、あっさりと言いつつしたシュウラには感情が籠もっているようには見えなかったのだ。何を間違えたかを知ることの方が愛華は怖かった。

「何故あんなになったか、知ったらもっと君が変わりそうだから言っておこうか？」

「いい。言わなくていいわ。こわいもん。でも……」

言わなくていいと言った端から、口ごもってしまう愛華をシュウラは笑いもせずに見ている。愛華も、どうしても彼が話してくれるようには思わず、口ごもったが、聞かないでいるほうがもっと怖い目にあうという漠然とした予感で完全に否定しきれずにいた。

「聞きたくないというなら、もっと強い否定をしな。出ないと僕は

とことん親切だから、君を助けるさまざまな答えを用意してしまう」

まさかと思う言葉は、一番出るはずが無いと持っている人物の口からの発言から飛び出した。鍵の束を渡したときも、その後の水中探索でも手を出さなかった奴の発言とは思えない。

窓がぱちりと瞬きをしたのも、その発言に比べれば小さい事だった。自分の柔らかい頬を軽くつまんだが、彼のお茶を飲む姿勢は変わらないのに、どうしてだか一足飛びでこちら側に足を踏み入れてきそうな目前に気配を感じる。

「何も言わないでもいいさ。だけど、君より深く僕は君を知っている。時間が関係ないことを分かっているとうれしいんだけどね」

そういうと、シュウラは腰につけている鍵束をヒラと掴みあげると大きくふった。その動作が何を意味するか分からないが音がこちらに波打つ振動となってぶつかってくる。

リイイイン

甲高い鈴振る様な音は耳を貫いて、丘の全土に響き渡っただろう。何が起こったのかはすぐに分かった。瞳の反対側が何かを映し出して始めていた。シュウラの反対側に、いや、窓に写る自分の姿のようにもう一人男が何かをしている絵が写りだしたのだ。

後ろを振り返れば、ぱちちりともうひとつの目が真後ろの空間に開いていた。瞳の中で、シュウラとは違う人間が何かをしている。

「さっきの男の人？」

只笑っているだけの幽霊だった男、いやもっと顔も輪郭もその存

在が明瞭に映し出された壮年の男性。瞳の中で彼は森林浴を楽しんでいる。そばには美しい女性がついて、ゆっくりゆっくり彼の額をなでている。母親にしては年若い女性で、この絵でシュウラが何を言いたいのかが分からない。

「まだ、まだだよ。彼がまだ歩いている途中だからその絵になるんだよ。そろそろ、また消えるはずだ」

愛華の疑問を汲んだシュウラの声は嬉々としており、何がそれほどうれしいのか分からない。画面には変わらずに睦まじくともに寝転んでいる男女の姿が映るばかりだ。

愛華がそれに飽きて振り返ろうとしたときだった、画面に変化があった。女性の手が何故だろう、男の額を撫でていた手が止まったのだ。だんだんとそうして女性の髪がかの男性の頭を包んでいく。男は至福の表情を浮かべたまま気づいていない。女の髪が隙間無く彼を包み込んでからだった、男は突然消え去ってしまったのだ。

手品でもなければ、何処かに落ちたわけでもない。彼は髪に包まれて忽然と姿を消したのだ。

「何が起こったかは、まだ君に体験してもらおう順序が早いからあの状態にしてもらった。だけどね、彼はあの空間とこの空間を眠っている間ずっと行き来している。とだけ、言っておこうか」

「夢の中で、夢を見ているの？」

「いや、夢の中で夢が見られたらどんなにいいだろうね。アレを見るくらいならね。夢じゃない。あれは夢なんて代物じゃないんだよ。夢の中の眠り、『連眠』というかな」

「れんみんだと、それはどう書くんだ」

不可解な単語に関野は思わず反応した。

途中登場したシユウウの存在から、部屋がまたブルーに染まりだし、今や部屋はアクリウムの色彩に変わりだした。水草のように時折揺れる緑の光がまた風に吹かれたようになびいて、自分の頬にも風が触れていく。

半分踏み入れた状態がどういう状態なのか、考えたくもないが、おそらくは『夢うつつ』に近いものだと思われる。見えているものは今ある部屋と、愛華の夢のハザマだと言う空間の色なのだろう。病室が全体白で統一されているおかげで、色が表の空のようにどぎつい色になっていないのありがたい。

質問には前ならすぐに返答を返していた愛華だったが、れんみんという単語については、その単語が忌まわしいものであるかのよう

に、吐き捨てるように言った。

「連なる眠り。漢字で書くとそうなると思う。思っているのよりももっとひどいわよ」

「そうは思えないけどな。ずーっと疲れて眠っていて、夢を見ない眠りはあるだろうか」

夢なんて疲れすぎていれば見る暇なんてないくらい深くに落ちる事はできる。むしろ夢の無い眠りが多いに決まっているのだ。軽く言った関野だったが、愛華はこわばった表情でとても流して話せるような空気にはならなかった。

「いったでしょ、気分が悪くなる話だって。連眠はね、私にとって

はとっても恐ろしい事よ」

アクアリウムの青はそういった愛華に同調して、ゆっくりとスカイブルーに近い透明な青から海原に漕ぎ出す紺へと深く落ちていく。

瞳の女性の髪にかくれた男が消えてからも、女性はあの体制を崩す事はなかった。そうしているうちに、また男はそこに忽然と現れ、また髪の毛が大きく動いて眠る男を瞳に晒した。

何が起っているのかわからないが、歩いている彼とそこで寝ている彼が何故同じなのだろうか？

疑問符が消えないままの愛華を、愛しげにシュウラは見ている。追っていた湯飲みが盆の上に置かれてからシュウラの説明は再開した。

「夢の中で夢を見るはずなのに、夢を見ていると本人は思っていない。夢の更に下、本来彼が見たい夢を見ることが出来ず、見ていると思えば、また別のところに移される。まるで無限に落下するようにね」

「覚えて、ないの？ あの人ずっとあそこで眠っているわ。でも、あそこで歩いている人も眠っている人と同じなんでしょう？」

「そうだ。でもね、この光景は本人には絶対目に入らない。なぜならその『のぞき窓』から見たように彼は眠っている。眠っている人間にとってはどこも闇と変わらない。意識がどこに落ちているのか僕は知らないし、興味も無いけどね。彼の夢はあの森のはずだった。だけど、彼は落伍した」

落伍したという言葉が、それまで疑問符を浮かべていた愛華の胸

元に、彼女が彼らを見て感じたときと同じナイフの腹の冷たさを感じさせた。半分気づいたのに、シュウラも気づくと、笑いながらつぶけた。

「そう、君は何を言いたいのかを感じるのが本当に早いね。落伍。文字通り落伍者だ。ここは関門、試練は超える為に存在するが、それを超えられるかどうかは本人しだいだ。君だけじゃなく、僕に気づいた彼らは同じ道を行きたいという者もいた」

シュウラの説明はだんだんと瞼の落ちていく、男の瞳の映像と同様に声音を落として言った。

瞼が落ちていく間も愛華は自分の目をそらせなかった。そう、もしも自分がこの関門を抜けられなければ、あそこか、はたまたどこかで彼女は自分が夢の中でずっと闇と夢以外のなにかを見続けることを約束されているからだ

Key2 流転の門8（後書き）

夢語りの段になると筆の進みが一気に伸びる気がしますね；

書き易いというか、なんといいますか；リアルに存在してないからこそ描写するのがすっごく楽しいから力があるといえますか。

とかく、夢語りのときの筆すすみの具合はとっても早いです（笑

Key 2 流転の門9

「いいね、本当に物分かりがいい子だ。夢を見るのに見えない事が
どういうことなのかを分かっているのがまたいい。そう、影響は徐
々に徐々に自分を蝕むのだよ」

「怖がらせないでよ！ どうやったらここから出られるのよ。あんな風になりたくない。何が起きているのかを分からないまま夢で闇を見るなんていやよ」

夢の闇がどういうものか、それは自身が夢を見ているはずというまやかしにとられ続ける事だ。連眠は夢でもなお、自分が見えなくなる。おそらく、己の形さえいつしか分からなくなってしまいうだろう。

「……連眠の恐ろしさが、俺には分かりかねるな。俺は夢なんぞ見ないほうだし、見ていても覚えてないんだが」

関野には、愛華が何故それほど怯えるのかが分からなかった。夢は夢、覚えているのかどうかも曖昧だから夢なのではないのだろうか。それを覚えていないというだけで、どうしてそれほど恐ろしい事になるのだろうか？ 過去の愛華よろしく疑問符を浮かべている関野を、ぎょっとした彼女はより多く、噛み砕いてそれを説明する必要があることに気づいた。

「分かってないみたいだから、より、詳しく言うわよ。たとえば、あなたは夢を見ている。寝ていてみるはずで、起きてから覚えている夢でもよ。当然、そこには寝ているって言う事実があって、

だから夢を見ているということがある。」

そういうと、身振り手振りをしつつ、自分が持っている用紙を何枚か引っ張り出して、単純な棒人間と、いくつかの丸を描いて見せた。人が一人眠っている絵は布団がついでに書かれているので、どうやら夜に寝ている人らしい。

もう一人の人は、眠る人の頭上の噴出しで、立っているところから察するに夢の中の人物なのだろう。しかし、これが何だというのだろうか、余計にこんがらがってきて、眉が寄ってくる関野に、愛華はシャープペンシルを指し棒代わりに、軽い音を立てて夢の人物を指し示した。

「でも、もしもその夢が無いものだとしたら？ 無論覚えてないから、影響が無いように見えるかもしれない。だけどね、貴方が寝ている間にその存在を自分で証明するのは何？ 眠っているという認識の事実よ」

「そりゃ、周りにいる人間がいらないから俺が寝ているって考えればいいだけじゃないか」

「違う。寝ているという事を認識するのに暗闇、夢、何でもいいから記憶のとんだ時間という空白がいるの。だから眠ったって言う事を認識できるのでしょ」

どこか論理が飛躍をしているようだが、眠っている間は確かに暗闇か、夢を見ているかをしてそこから覚める事によって朝だとか、昼間だとかを認識しているのかもしれない。あまり納得しがたい事だが、それでもしぶしぶ頷くと、愛華はそんな関野に更に説明を続けた。

「ところが、よ。その夢であるという認識をする空白さえ取り上げられたら、どうなると思う？」

「空白を取り上げられるだと？ まっるで意味が分からんぞ」

「瞼を閉じた瞬間光が入るのよ。朝の」

やはり分からない。起きるなんていうのはそんなものじゃないのだろうか？ 怪訝そうな顔ばかりする関野に、イライラした調子で愛華は説明が無駄かもしれないと大きく溜息をついた。

「だからね、眠っているはずなのに目を閉じたら朝がきているのよ。夢の中で眠る、眠りの眠りが引き起こすのは、今の生きている状態であるはずの空白の時間さえなくなるの。夜の闇で何時間寝た。短時間でも眠った。そういう感覚が一切なくなるって言っているの」

その説明で、やっと関野も連眠の意味を理解しだした。そう、自分が生きている時間が飛ばされるという事なのだろう。眠っている時間といえども、自分が生きている時間だ、そこに安らぎや、夢のような活劇があったりする。

だが、目を閉じたとたん朝になったら？ 眠ったはずなのに眠ったと思えず、眠りを欲しても時間が飛ぶ、その空白を感じる暇さえなかったら？

関野はつかれきってどことも分からずに眠り、意識が飛んで気づいたら朝だったという経験はある。だが、時間の認識が飛ぶような場面に遭遇した事はない。そういうときにも、空白の闇があったからだ。

やっと、連眠についての認識が出来たらしい関野を、愛華は頬に手を当てて面白くも無さげに見ていた。

「相変わらず物分かりの悪い人よね。私と違って」

「連眠見たいな経験はしたことが無い。分からない事を分かれと言うほうが難題だろうが。まあ、でも恐ろしいって言うのは、お前は関門のときに気づいたのか？ この説明を」

はなしを聞く限りでは、愛華の子供の頃という事なので今より更に若いともなれば、いったいくつになるのか。椅子の背もたれに顎を乗せるような格好になって、関野はぐったりと外海の部屋で力を抜いた。

「私は説明よりも、感覚で分かったの」

ディープブルーになりつつある部屋の中で、愛華もその色を楽しむように髪に指を絡ませていた。水中から見上げるような形をとる鮮明な色のダンスは、部屋をどんどん海の沖合いへ流すように深い青へと変えつつある。

形の定まらない人間の様なモノ、それは愛華が気づいた『連眠』という罰だったという。

自分もこうなるかもしれないと思うことで、それは余計に妄信するように自分に固着しつつあった。顔色が青くなっているであろう愛華を面白げに見ていたシュウラだったが、不思議そうに口元が緩められると手がこちら側に伸びてきていた。それに気づかず余計に混乱する彼女に、手は差し伸べられた。

トブン　石が池に落ちるような音がして、愛華の頭を何かがゆっくりとなぜていた。軽い感触のそれが何なのかみれば、シュウラがゆっくりと手だけで、こちら側の自分の頭をなぜているのだ。

「ねえ、いっただろ。僕は親切なんだよ。今回の鍵の保持者は今まで導いた人間よりもずっと、きれいな色の鍵を持っていた。手助けぐらいしかしないが、君は僕に気に入られている。それは誇るべき事だ」

頭を撫でる彼の手は幼子をあやすようだが、やはり何処か違うところを見ている。それでも、愛華は自分を慈しんでくれるように頭を撫でてくれる彼にすぎるしかなかった。たとえそれが、自分ではないところを見ていたとしても。

「誇るよりも、ここから、次のところへあたし、いきたい。とまりたくないの。止まって何にも無い事になんかしたくないの」

シュウラは、その言葉を待っていたかのように、愛華がそういうと撫でる手をぴたりと止めると、また同じ水音を立てて、瞳の向こう側に手を戻した。そうして湯飲みを片手で握ると、茶をひとすりしてから愛華を指差して言った。

「何度でも言おうか、僕はね、結構親切なんだよ。君が行くべきなのは最初に示した。だけど、もう一度だけ言おうか。今回は、どこまでも、『進む』事だ。あとは進むをどう君が考えるかにも掛かっている」

シュウラは言葉通りに、手助けのつもりであろう助言を与えると、開いていた瞳の空間をぱちりと閉ざしてまた消え去ってしまった。

後に残る草原の風は、愛華の顔に冷ややかに当たっていくばかりだった。

Key 2 流転の門10

いきなり現れたかとおもうと、いきなり消える。そして新たな謎だけがまた残されていた。取り残された心情をより強く表すように風がいつそう激しくなり、髪はあおられて絡まりながらなびく。

望むものが何なのか彼の期待が何なのか、期待にこたえるよりも、ここから出る望みが愛華に残された光だった。

丘を渡るどこにも扉は見えない。男の夢を写した瞳の窓が消えた向こうで、永い夢を見続ける人々は壊れたテープのように何度も何度も、人生が擦り切れるまでその夢にとらわれるのだろう。

その丘の向こう側で繰り返される落伍者達に、自分を重ねる事を無意識にしていたのかもしれない。

さつと踵かかとを返すと、愛華は立ち上がっていた。そうしてまた丘に向かつて歩き出したのだ。

「私は、ここから出てやる」

独り言だとしても、宣言は丘を越えてきた緑の風に立ち向かった彼女の心を表した。

切り替えが早いだろうがなんだろうが、シュウラのくれた言葉が確かなら進むしかない。足元で踏まれた草が巻き上げる風で鼻腔に新鮮な香りをもたらししていく。

見た目はたとえ果てが無いくらい広がり続ける丘だとしても、進むことが出来る。そう思いながら歩みを止めず彼女は二つ目の丘に登りだしていた。

「シュウラは進むを強く言っていた？　進む事がどう考えるのかによって変わるのは、何が変わるのかしら」

そう、シュウラは『進む』という言葉をやけに語気を強めていていた。それがどうしたといわれればそれまでだが、彼が進むという言葉をどう解釈するかによって変わるということが、最大の謎のヒントなのだろう。歩きながら考えて、進むべきところがここに存在するのか、という疑問が大きくなる。

風は心地よいけれど、あの映像を見てからではまやかしで、まがましい存在にしか感じられない。

再度別の丘の上まで上りきって立ち止まった。前方のどの丘も緑一色で、風が吹くたびに揺られて緑の海原の波が大きくうねる以外は何処も変わりが無いようにしか見えない。

強いて言えば、丘の傾斜が少しずつ上へ上へ傾いている気がする。くると後ろを振り返ると、やはり、胡麻粒くらいの大きさになって点のように見える人々が右往左往している姿しかない。その大きさが胡麻から芥子粒の大きさに変わったくらいの差異しかないなかった。

この場で座りたくは無いが、進むべき目標が無いのに進めという言葉が分からない。

仕方なしに、丘の頂上で風に吹かれながらじっと考えてみた。進むのは、単純に丘を何処までも歩いていけというものとはまた違うだろう。最初の関門も似たり寄ったりだったが、あれはあの骨の山に突き当たる事を前提に言われたのではないかと思う。だが、今回の進めはシュウラが第一関門で言った進めと大きく違う。

辺りを見回して、そしてあの水の空間と同じに突き当たるかもしれない場所を探すことが違う気がする。ここは何より、あの人がいるところから自分の夢とはかなり違うところのはずだからだ。

「ここで質問しないの？」

メモを取る関野に愛華からの質問が掛かった。書いていれば多少はおかしい事は分かるが、それが愛華の話ではおかしい話に聞こえてこない。いや、あまりにも突拍子が無いので何処がおかしいかの線引きがしづらいのだ。

「どこに質問する要素があったよ。お前が考えているところ以外でどう質問するべきだって言うのでもあったのか」

「質問して欲しいときに質問できない記者はどうなのよ。あなたね、今私が話していたというか、空間の話でおかしいと思わなかったの」

「どこが。全部おかしくてわけがわからんよ説明してもらえんなら説明してくれ、俺の固い頭でも分かるように翻訳してだ」

そんな態度に、愛華は心底呆れた。新聞記者の癖にと色々となじってもよかったのだが、わざと大きく咳払いをして、気持ちを落ち着けて再度説明を始めた。

「私が、このとき気づいたのは夢のはずなのに他人がどうして入っているのかってところよ。私もあの異常状態が当然だと思っていただけね、私の夢じゃない別の空間にしても、どうしてそこに私

以外の人物がいるのよ」

「あ、なるほどな。そりゃ確かにそうだな。お前さんの夢から別の夢にいったはずなのに他人がいるっていうのがおかしいな。夢なら別の人の夢に紛れ込む事もできないはずだ」

やっと気づいたか。とばかりに愛華は大きく頷いた。

「で、それについての答えを私がといたところの話に移るわよ」

「あ？ 説明なしなのかよ」

「貴方を見ていると、あの当時の私みたいでね。分からないから聞こうとするけど、肝心なところは聞かないのよ。だから話で聞いたほうが今日はいいと思うわよ」

小馬鹿にしたような口ぶりになってしまったが、愛華はすこしばかり関野の困惑が分かっていた。過去にも自分に起こった突然の謎かけと、それを解かなければならない状況は今の彼の心境にも等しいところがあるだろう。記者としてきて、不本意ながら自分の相手をする事になり、そして今こうして私の話にはまってくれている。

「わからないのはね、よくもわるくも道があるわ」

「？ 何のことかさっぱり分からん。頼むから説明をするなら分かりやすくしてくれよ。現在進行で今ありえない状態に身を置いている俺の身にもなってくれ」

愛華の眩きは話に出てくるシュウラのように謎含みで、夢の話をするたびにその彼に近くなった彼女を見ている錯覚が起こりそうだ

った。

関野は煙草の箱を先ほどから出し入れしてはいるが吸えないのが余計にもどかしかった。そんな状態でも彼女の話と謎は続いていく、そして、それを自分は許していた。

夢がつながっている。彼女はそう感じたそうだ。

芥子粒大の彼らを、そして今ここにいる自分を、何かが繋げている。おそらくはシュウラなのだろう。門を作ることのできた人間があそこで落伍者としているならばという仮定でしかないが。

それら全てを含む夢なのかそうでない場所なのか、曖昧は自分の内側から出来ているのだろうかとまた、未知と想像の手が自分に迫りつつある。

想像だけで何も出来ていない自分を振り払う為に、愛華はまた新たに歩き出した。考える、歩く、その繰り返しがいつまでも続くかもしれない。その想像もしたし、いつか自分がここに取り込まれ落伍者になるのではないか、その恐ろしさから、止まっても休む事はできなかった。

丘はいっしか登るほどに高さを増していく。徐々に登るそれを見ているはずなのに目には鮮やかな緑しか入らない、思考が自分の視界の前でちらつき、息苦しい。

更に高くに登るころには酩酊したように緑の世界に酔っていた。心地よかった風は今や冷たい。のぼりに登ったせいで足の裏は草で

ところどころ切れて血がすこしにじんでいる。

がくんと膝が折れたことで立ち止まらなければ、まだ更に上を目指していただろう。夢の中のはずの自分は、膝が折れて考えに夢中になっていた時間が切れると同時に、痛みは今に立ち返った。

「い、タイ。登るしかなくて、進むしかなく、あれ？　どうして、登るの？　私は何でこんなに登っているの？　いや、進めといわれたから」

止まって痛み至今已戻っても、言葉がやまない。考えが止まらないというべきだろうか。息苦しくて、そして足がだるい。足裏に滲んだ血に草が入り込んで痛い。感情と思考の煮込み鍋の状態は、一気に自分の頭を沸騰させた。

「？あああああああああ———」

喉から漏れていた言葉を自分の大声が吹き飛ばした。口からほとばしる喉が割れるような絶叫。

いつまでも続くかに思われた絶叫は息が続かなくて尻すぼみにかすれていった。それでも叫ぼうとして、自分の息をもう一度吸いなおして声を何処までも広がる丘へ木霊させた。

幾度かの木霊がすんだ頃、自分の喉が枯れて声も出なくなった。声が出なくなつてやっと、自分が寝転びながら声をあげていたことに気づく。草が口の中に入って青臭い味がひりついた喉に張り付いて痛みに咳き込んだ。

怖さが、辛さが、憤りが、そして祈りが、愛華の中で入り混じりそして、絶叫のあとで消え去った。

消え去った、いや、自分の感覚が戻ったからそれらがその感覚に追い越された、そんな状態だった。

それは、初めて歩みだした一步だったのかもしれない。歩いていたはずなのに歩いていなかった。草の痛み、自分の足の疲れ、それらが今はじめて感じられたのだ。

いま、もう一度立ち上がったとき自分の足は疲れと痛みで支える事が辛いほどだった。それでも、立ち上がった痛みは今まで考えていた思考のどれよりも鮮明に自分をここに存在させた。

新たに立ち上がって見た丘での冷たい風、そして丘に香おっていた郷愁のにおい、光だと思っていた何もかもが自分の認識を置き換えている。

丘はまるでハーブのような爽やかさを含んだ夏の香りを放っていた。そして、風はやんでいた。呆氣にとられるほど目の前の丘は別の世界に変わってしまったのだ。緑にたなびいていた海は薄い茶と深緑、そして青を混ぜて作られたような色合いの草たちが伸び放題に伸びている。

丘のてっぺんで見下ろしていたあのいくつもあった果ての無い丘は、目前で大きく開けた草原地帯を開いていた。そうしてうっすらとした夜明けが自分へと光の束を投げかけてくれているのだ。

世界が、開いた。言葉で表すならそうとしかいえない。枯れた喉は戻らないが、痛みはむしろ新鮮だった。

「は、これ、は　　あに。夜があける？」

（『進む』という事だ。君が、それをどう考えるかという事だ。）
シュウラの言葉が、どうしてか自分にまたささやいた気がした。考えすぎて吹き飛んでいた思考が、自分の中の進むという言葉を何かに変えていた。言葉を、答えを、自分は知らずに呟いていた。

「進む、私の『進む』は、世界を
開く。」

明けきった世界は、産声を上げているように美しかった。そして、私自身の産声もそれに含まれているような気がした。

Key 2 流転の門11

愛華が勢いのままに話した夢の話は、今の病室の海原を一新して青から夜明けの紫と紅の交じり合う白へ変えていた。でも、それはどうでもよかった。語り部、そういえばいいのだろうか、自分の世界へ彼女は目の前にいる関野を引きずりこんでいた。

途中から無意識で煙草を加えていた、そう、関野が途中から色彩の変化に気づくことも無いほど集中した夢の話でもあった。余韻が残る最後の言葉の響きに、関野は重なるように愛華へ問いかけていた。

「進む、世界を開くか。なら、進むことがまた世界を作る事になったのか、その進むという解釈なら」

自分が発した言葉はなんとも間が抜けていた。分かってはいるのだが、声がまともじゃない。惚けたわけではないはずなのに、話にまたも引きずり込まれていた。その上、話に飲み込まれすぎたからなのか話しに聞き入るあまり、その情景を浮かべようとまでしていたのだ。関野は言ったあとで何度と無く唇を湿らせるように浅く噛んではその先の出ない言葉が続けようとした。

「少なくとも、私はそうじゃないと思うわ」

惚けている関野よりも、愛華は話が架橋に入るほどに生氣を取り戻したように顔色が元に戻っていた。いまは頬に紅を差したように薄赤く色づいている。世界のくだりでは周囲からエネルギーを吸い取るように勢いついていた。まだ残った熱のままに彼女は続ける。

「世界を開くというのは、私が見出した『進む』よ。もしかしたら人の数だけ別のルートがあるかもしれない。あとは、進むというのがなんなのか、貴方がそろそろ自分も気づいて欲しいところだわね。私は説明しているし」

「それは、世界が開いたって言う解釈が別にも存在するって言う事か？　だが、それは……解釈が広すぎるのでは」

「まだ、わかってくれない？　私は話したって言ったわよ。そして文字通り話の中に世界が開いたという意味に通じるところがある。今度来るときのそれは宿題にでもしようかね。ふふ」

関野は、教師を気取った言い方をした愛華にまだ何といって言い分からない。物言いはたしかに嫌味が多かったり、見下している口調なのだが、語るべきところは出来るだけ彼女なりに話そうとしてくれているのだ。

早朝の海原に変わった部屋で互いに、何かを掴み取ろうとしている二人は、お互いの思惑のすれ違いに気づいてはいない。まだ生ぬるい空気は表の音を遮断したまま、その一人と語り部の少女とを覆っていた。

どちらともお互いが話の余韻が冷めないまま、話が進まないのを良しとしなかったのは朝日の中で目をつぶった愛華のほうだった。

「そのあと、どう第二関門が終わったかを話して無かったわね。まあ、どう出られたかだけだから単純な話よ」

そういうと、現実世界かそれとも夢の狭間から流れ込む風にか、大きく風鈴が揺られて澄んだ音を立てた。

感動している、心が震えるというって言うのが例えではなく本当に感じたのがそのときだった。

自分が見た世界が開いた事に、愛華は立ち尽くすばかりだった。高鳴る内側にある血流が、噴出すように地についた足にまで駆け巡る。声を出してから数十秒はそのまま固まっていた。

すると、開かれた世界は己に呼応して大きく旋風を吹きつけ、自分全てを包み込む。まだ足元で滲んだ痛みと掠れるほど叫んだ喉とが、残る中で受け取る旋風は熱を帯びた太陽からの息吹のようだ。

「ほあ　息がしづらい。足も痛いし、でも来られた。ここに来られた」

口から息が忙しく行き来しているのも心地よい。あの丘ばかりの空間には感じられなかった、全てがめぐり駆けぬけて行き去る感覚が愛華の内でもより深い変化を起こし始めていた。

この世界に来る前に刻んだ腕の草の文様がまた新たに伸びた。蔓ばかりだったそれに、蕾みがつく文様が現れたのだ。圧倒されていた愛華がそれに気づいたのは、自分の腕が熱くなるからだとは正反對に少しずつ熱を失い、風を食むような手ごたえの無い流れが起こっていたからだ。

気づいた蕾は腕の内側の蔦に絡まると、そこで大きく膨らみ蔦模様を取り込みながらそこで新しく花を咲かせる準備を始めたように見えた。絡み合いながらその花は固いつぼみをしっかりと支える台座が出来ると、腕の中で鍵が鳴くのは違う、土鈴を鳴らすような暖かな音を立てて腕の中央に収まった。

「私の腕の中で、何がまた始まったの。この草模様も嫌いじゃない

けど、まるで腕に落書きがいっぱいされたみたいじゃない」

新しく作られた文様に目を奪われたが動きが収まってみると腕にある模様が陳腐に見えてきてしまい、消せないか試しにこすってみる。腕に蛍光色の刺青を施したかに見えるその文様を消す事は、もちろん出来なかった。

何度もこすりながら消えないのがわかると、またあの朝日に見入ってしまったていた。終わりの無い丘もここほどではないが、変わってしまった今だから言えることもある。あれは、卵の殻のようなものだったのかもしれない。きっかけがなければいつまでもいつまでも変わらない。内側に押し入るためのきっかけが何だったのかは、丘から抜け出した今の愛華にはわからなかった。

抜け出た感動は今の状態をもっともっと欲しがり、草がさざめく音と風が吹き渡る音ばかりが響くこの光景をずっと見ていたかった。

と、風の音が急に乱れた気がした。耳に聞こえた風音は吹くばかりで大きく延びる音だったが、それに混じって甲高い音が聞こえた気がする。

浸りきっていた感傷から周囲の異変に身構えた。体がこわばりながら、周りの状態を探ろうと気配を周囲にめぐらせていく。

終わりになったかどうか、幾ら突発続きだとは言えどもそれが確かじゃないうちは気を許してはいけないという事ぐらい、いい加減覚えるものだ。吹きつける風に目が乾いて涙が浮かんでくるが、多少滲んだ視界の目をこすって涙をぬぐい、音の正体を知った。

自分が登っている丘の裾野あたり、草の中にまぎれるように焦げ茶色と青緑の装飾を施された胴の取っ手のついた扉が立っている。

「出口でいいのよね。出口、じゃないと困るもん」

あれだけ感動していた心地が扉の存在に気づいたただけですこし薄められた気がする。足の裏がまだ痛いのに注意しながら、ゆっくりとその扉へと歩きよっていった。

裾野まで来ると、その扉が大人の身長よりも高い作りをしているのに、開けるのかどうかという不安がよぎった。頭よりも上の位置にある取っ手をつかめそうに無いのも余計に不安になる。

「何より、シュウラが出てこない事が怖いわ」

そう、前回だったら終わったときにはシュウラがああ喫茶店に引きずり出してくれたが、今回はそれが無い。腕の文様が変わったときにも、実は変わったことに驚いた裏で彼が引っ張り出すのではなにかという期待があった。けれどシュウラはこないし、変容は終わってしまい何をするでもない、更に進まなければならぬかとも思っていた。

古びた木のおいと杉と腐葉土のような甘い香りがする扉は愛華の前で反対側から開きもしなければ、誰かが呼ぶ気配も無い。

「うあー、正しいの？　これが正しいのかしら。鍵で開く扉だといけど」

そういうと、愛華は自分の変容した腕の手を戸惑いながら、そつと手をつけようとしたときだった。

手の平が鈴を鳴らしたのだ。

鈴の正体はもちろん手の中に吸い込まれた鍵。手の内側から鍵の

頭がのぞき、扉に触れると鍵の触れた場所で取っ手の鍵穴部分が下に向かって大きくずり落ちた。木の上を乾いた音が響きながら滑り落ちた鍵穴は、鍵の頭が触れたところで止まると、言われるまでもないように、大きく指し口を開いた。

「便利、というか何ですべておとすのか、鍵穴が私の位置に元からついているって言う事ってないのかしら」

これくらいのおかしい事に慣れた自分にも何か言いたくなかったが、鍵穴が出来たことを考えるとそれに構うより鍵をここに差し入れることのほうが必要だろう。どちらでもなく頭だけしか出ていない鍵の状態が嫌だった愛華は、手の平から出た鍵を右手で思い切り引っ張った。

「でるなら、全部でなさいよっ」

自分の中に埋まった鍵にそう言いながら引っ張り出すと、鍵はすこし抵抗しながら自分の腕の長さよりすこし長いところまで引っ張ってやっと抜き出された。

引き出された鍵は第一関門の前に見たときよりもすこし育っていた。腕に支えられた玉がすこしだけ丘の色を取り込んでビー玉のようになりめく。

引き出された鍵を右手で掴みなおして、大きく開かれた鍵穴に向かって差し入れると、回転するまでもなく鍵穴からガチンと錠が外れる音が響き、扉は関門に入った時の扉と同じく蔦の模様が巻きついていき、全てがそれに覆われたときゆっくりと目の前で開いていたのだった。

Key 2 流転の門12

しとしとと振る雨音が扉に入った愛華の頬にかかった。生まれた世界から戻ってきた庭園の色は枯山水の図で、平たく言ってしまうと和風庭園に変わっていた。

ウッドデッキと店の作りは変わっていないのでそれがなんともミスマッチだが、彼が湯のみに急須で緑茶を新たに注ぎなおす様子もそうだった。シュウラはお茶を注ぎつつ、愛華が戻ってきたことを楽しそうに迎え入れる。

「やっと来たね。僕が来ないからわざと扉を開かないかと思ったよ。むしろそうだったのかな。ともあれ、第二関門の突破を心から祝わせてもらおう。おめでとう、開門者愛華」

扉が開くまえから気づいているとは思ったが、あの細い眼差しは向けられると胸の内側をつままれるようだ。愛華は扉にはまだ入っていないかったが、ゆっくりと足を踏み出した。しかし、中に入ることが出来ずに踏んだそばから足を引っ込める。

「あたたたっ」

踏み込んだ扉の向こう側の足の下には大小さまざまな砂利が置いてあり、シュウラのところに行き着くまでが拷問のようにつくりになっていた。

それもそのはずだ、扉が出来ているところはその枯山水の図の外側に近い位置にある榎の幼木の幹に出来た扉だった。庭園からすこし外れているこの位置の整地は出来ているが、愛華にとっては意地

悪く敷かれたこの砂利は悪路でしかない。

「シュウラ、あのさ。この石の作りはわざとなのかしら。どう考え
ても私の足じゃ通る前に痛くてここからそっちに移れないのだけど」

疲労と痛みで足元の石を踏みつけてまでそちらにイける気力は、
今は愛華にはなく、この庭園の作り主である彼に何とかしてもらい
かない。不満げな愛華の物言いに再度こちらを見ると、シュウラは
注ぎ終わった湯飲みから別の真新しい桜色の湯のみにも継ぎ足して
いるところだった。

「そうだねえ。君がやっと渡ってこられるくらいの砂利のつもりだ
ったんだが、まだ痛かったか。いいさ、もう一回踏み出してみな」

彼の急須の蓋を押さえていた右手がこちらに向けられると、右手
がこちらに向いたまま半回転した。それだけなのだが、下の砂利は
両側によけて、並んだ玉砂利がシュウラへと向かう道筋を作ってい
る。

ことを済ますのには何でも彼の手一つですむらしいのも差別のよ
うな気がする。石に涼やかに落ちる雨音は玉砂利の道を冷たくして
いて、切れた足裏に沁みる石と水の冷たさはやつともどった彼の庭
を感じた。踏みしめながらこちらに向かう道中で、彼は何処からか
もう一席の椅子を用意していた。

庭の中ほどに歩いてきていた私に一礼をすると、椅子をこちらに引
いて、歓迎のつもりらしく帽子まで脱いだ。

戻った私に対しての歓迎だとは分かって、心では素直に歓迎で
きない。自分があの空間から出られたのは、彼の助言もあったから
だし諦めなかったからかもしれない。でも、彼の言った落伍者達を

作り出したのも彼だ。

疑念を抱く私を彼は知ってか知らずか、礼をもう一度して、頭を下げたままこちらにと手で示す。

「どうした。何か気になることでもあるなら、少しそれを解く手助けをしましょう。思ったとおりにあなたは抜けられた。だから僕は歓迎の意を示している。ささ、貴方のお茶もあるし次の関門に行くまでに休まないとね」

「次の関門があるのは覚えているわ。でも、私はそこに座ってもいいのか分からないの。私に何の資格が出来たのか分からなくなりそうなもの」

そう、あの関門の世界を開いた結果此処に来る事が出来たのはわかる。だが、具体的な変化は腕の文様以外で何が変わったのか分からないのだ。

ウッドデッキの階段にまで来ていた愛華の足はそこで止まってしまふ。世界を開いたはずなのに、なんでか此処まで来られた自分に納得がいかない。

「資格は出来ていますよ。その紋に然り、そして次の関門で確実に分かるでしょうね。資格が何なのか。資格については僕が言うまでもない。あの関門の人々についても聞きたいのでしょうか。ならその足も疲労も治さなければね」

そういうと、シュウラは関門の中で自分に触れたのと同じ手で、途惑っている愛華の手を優しく取り、椅子の前まで導くと座らせた。

座るのに抵抗したかったが、足や自分の体力は否定しない。軽く自重で沈むだけのクッションと包み込むまるやかな背もたれは座っただけで、力が抜けてしまう。

「ハフ——。気持ちいい。ふつかふかであつたかだね」

柔らかな椅子に懷柔された愛華の声は緊張が取れて、背もたれにぐいぐいと寄りかかる様は暖を求める小動物にも似ていた。

その様にシュウラも自分の席に戻ると、彼も座りなおしてそつと、テーブルの上に置いてある湯飲みをこちらに勧めた。

「疲れを癒してくれるものだからね。ま、こちらも飲みな。気分も落ち着かせてくれるだろう」

「そう言うなら遠慮なく。んっ。あ——、あつたかくって気持ちいい」

一口含んだお茶の絶妙な温度にまた気持ちが緩められる。緑茶緑茶と思っていたが香りがあの丘の香りだったのも気にならないほどだ。一口で勢いをましてあつという間に二口三口とお茶を飲み込んで、湯飲みが空になっても最後の一滴まで飲もうとして、空になった湯飲みを上に向けて飲んだ。

「さて、どうかな？　のどの具合も足の具合もそのお茶のおかげでよくなっているはずだよ」

お茶をよこしてくれたシュウラは淹れたお茶が飲まれてから自分も口をつけながら愛華に尋ねた。彼は美味しそうに飲む愛華とは対照的に一口一口を上品に飲んでおり、それもまた愛華と同じに美味

しくお茶を飲んでるのがわかる飲み方だった。

空になった湯飲みを腿の上に持ったままおろして、足の裏をひっくり返してみると、シュウラが言ったとおり足の裏はかさぶたの後もないくらいにまっさらになっている。足の指を動かしても痛くもなんとも無い。

ついで、枯れて呼吸のたびに痛かった喉とその奥は、引っかかる音もなく元と同じ声を出せるようになっていた。疲労は全てではないが第一関門が終わったときと同じくらいまで消えており、椅子から飛び降りて駆け回れるだけの体力は回復していた。

「おお。痛くないし疲れも取れたし、喉も声が変わじゃない」

「そうさ、このお茶は只のお茶じゃないね。夢のお茶だからこそ効果だね」

微笑を絶やさないシュウラは喜ぶ愛華の手元の湯のみをこちらに取ると、継ぎ足すようにまた新しくお茶を入れた。

お茶がまた飲めるのは嬉しいが、回復した愛華には考える余裕が出来た。お茶をとりたいのを我慢しながら、愛華は先ほど言っていた答えを得る為に茶の熱が立っている湯気越しにシュウラに謎の疑問をぶつけた。

「シュウラ」

「はい、鍵人さん何かな？」

「あれ、あ、そうか名前で呼ばれてなかったものね。愛華、私は愛

華、アイってよばれるの」

「わかりました、じゃあアイ。落伍者について聞きたいみたいだね」
「うん。落伍者、あの人たちはあれで、いつまでもあそこにいるの？
それとも、あそこで幸せなの？」

あの空間で一人抜け出してしまった自分が後ろめたい。出られたの
事実はあるとしてもそれは抜け切れないだろう。シュウラはそういつ
て心配する愛華をじっとみていたが、落伍者の話にはそれほど大き
く関心を持っていないのか、微笑んだままだった。

「彼らは、あそこが幸せだと思ったからあそこで止まってしまった。
夢であるからという心地で踏み入ったのは君と同じだろうな。幸せ
か、どうかは聞かれても答えきれないな。彼らの夢を見ただろう？
あのまま寝続けていることを選んだ。そうしてあの丘を歩きなが
ら幾らも行かないうちに立ち返る。夢の夢におちて、それでもそこ
から抜けられない。選択したのが彼らだから、僕はそれを助けられ
ない。だから放っているわけでもないのだけだね。彼らも抜ける
方法はあるけどそれに気づくまでがながい、かな」

「じゃあ、いつかはその夢から覚めることも出来るの？」

愛華はシュウラの答えに僅かながら望みがあることを知って心が
軽くなるのを感じた。シュウラもそれを感じたのだろう。大きく頷
いてみせて愛華の質問に更に応える。

「現実世界では夢を見ている間の夢は空白さえない状態だ。それを
抜けるのはとても辛い。意識が消える瞬間を味わうのは君には体験
したことが無いからわからないだろうが。そう、だな目を開いたら

現実。そういう状態なだけだ。君ももう少ししたら理解できるよ、その意味を言葉だけじゃなく、考えでね」

穏やかに語っていたシュウラは、誰かに呼ばれたように上を見上げた。続いて愛華も見上げると、テラスに降り注いでいた雨が雲の切れ間で止んで、日の光が降り注いでいるところだった。

お日様が降り注ぐ事を知っていたように上を見上げていたシュウラは、日の光を受けて瞳が輝いている。眩しい輝きにも彼は動じないようで、お日様の光を更にじっと見つめていた。

「きれいだ。此処にもそれが出たという事は、次の関門が出来るのも近いという事か。その前にいったん君を解放しないと」

日差しを受けながら彼はまた何かを起こすような発言をすると、椅子から立ち上がり愛華の隣に立った。

「シュウラ、もう、関門に行かないといけないの？」

「いや、違うよアイ。君が関門を越えたところだし、まだ向こう側が出来ていない。だから、力が回復しきっていない君を向こうにやりたくは無い。だから、一旦目覚めてもらうのさ。朝が来るからね」

シュウラがそういうと、椅子が前に向かって緩く傾斜した。後ろを見ればシュウラがその手で椅子の背を倒しているではないか。傾斜した先は白い光ばかりで、質問する前に愛華は夢から現実の布団の中に落とされたという。

Key 2 流転の門13 開錠

「何だって、こんなに黙って付き合ってるんだろなあ。俺は」

喫煙できる部屋が病院には無いので、一回の玄関口までわざわざ来て、関野は煙草をふかしていた。一回目の訪問に比べればまだ煙草の味がするだけ精神状態に悪影響が及ぼされていないのが、好ましい事実なのか分からなくなりそうだった。

「愛華の影響かね、こうも深読みするのは」

あんな話の後でもあるが、自分が思っているよりも、相手の話の内容は何だか感じなところだけぼやかしている気がするのだ。それは愛華が聞いているシュウラの話しでもそうだし、愛華自身が何かを曲げて言っているのも感じられる。

話を単純に聞くだけでも事件の事と無関係ではない節を臭わせたのは、おそらく何らかの形で俺がそれを調べる事を考えてだろう。

「煙草が消毒薬くさくなりそうだな、この調子で長い間話をきくことになるようなら。……ちっ、調べない事には先に進ませない気は分かるが」

煙草の吸えなかった反動と肺の空気の入れ替えをするように関野は二本目を新たに吸い出した。煙草がうまくなかったこの前は、嫌な事だがあの部屋の空気のせいかもしれないと思われる。半分狭間にいた状態だった今の方が煙草の味が甘い^{うま}のだ。

まだ三時半、もう三時半、長く話している気はしないのだが部屋

から出たときの看護師たちの反応が、今朝廊下で逃げられた看護師から何か噂が広まっている事が見え見えすぎて、煙草の味が感じられなくなるよりもそちらの噂の方が今は嫌な気分になる。

見ている分には恐らく、心を許した唯一の男性イコール年上のあしながおじさんか、愛する乙女のために長時間居座る記者で恋人立候補者というところかもしれない。

と、そこまで考えてから自分がとんでもない考えをしていることに気づいて、関野は思わず煙草がまだのこっているのに灰皿に突っ込んでしまった。

「おお、あああ。っ、俺は何やってるんだよ。一体全体」

潰した煙草は水の張ってある銀皿で煙だけ残してあっけなく消えてしまった。おまけに、今吸ったのが最後の一本だったから煙草を買いに表に出る気も失せ、奥歯に物が挟まったもどかしい気分のまま彼女の部屋に戻ることにした。

扉を再度開けてはいる部屋は午前中から窓があけてあったおかげもあって夏の熱気がすこし籠っている。涼しさもこの時間くらいになつてくると部屋から出て行ってしまうのだろう。愛華は戻ってきた関野を横目に、新たに絵を描いているところだった。

「あら、部屋からそくさと出て行った割に随分早いね。今私のほうは手が離せないのに」

「見てわかるさ。何だ、あの地図に書き加えてもしているのか。それとも別の地図でも書いているのかよ」

そう言った関野に愛華は微笑んでいた顔を真顔に戻すと、じつと顔を見つめた。また何か言いたげな顔だったが、皮肉か毒舌でも飛び出すのだろうと構えていると、口にしたのは意外な言葉だった。

「もう、馬鹿にしないのね。前回会ったときみたいに地図の事否定されるかと思ったわよ」

そう言うと、彼女はまたシャープペンシルをスケッチブックに走らせている。気になって関野が上から覗き込むと、書かれているのは不可思議な形をした杖のような物体だった。だが、上に書かれている玉があったり宿り木の様に絡み合っているのは恐らく彼女が話していた扉を開く鍵を書いているのだろう。

関野が始めてみたその形は、彼女が言っていた通りに木々を模して作られたかのようなであった。

「まだ、信じたくは無いが現実起こりえないことが起こっているのは見ているからな。話の内容は正直言えば半分疑っているし、見えただけでもないから何ともいえんよ」

「でも、最初るときよりも変な感じにはなっていないじゃない」

愛華も自分の変化を知っているようだ。違和感が無いわけじゃないが、今日で二話の関門になるそれを聞かされていた関野は、終わった後の現実へ引き戻される意識を感じていた。引き潮に乗るように意識があつた狭間から滑り落ちた感触があつた。

「言わなくても分かるのかよ。お前もそうだったとかそういう理由か」

「あたり、あそこから帰ってくるときは最初のうちは風邪引いたか
と思ったわよ。気持ち悪いわ、船酔いしたみたいに平衡感覚おかし
くなったわ」

鍵の絵を途中まで仕上げてスケッチブックを音を立てて閉じると、
愛華はそう言った。彼女が話し終えてから、また顔色がよくなった
ように見えるのは午後の日の光で白い肌がすこし色づいて見えるだ
けだろう。

それから特にこれということも無いと思い、関野は扉のそばに立
っていたが、愛華へ別れを告げて取材の準備に戻ることにした。

「そうだ、俺は戻るが、一週間ほど日が開いてからまた来るぞ。お
前さんが行った旅館の件を調べてくる事にする」

言い残して帰ろうとする関野は、肩に皺が寄った上着を乗せると
メモ帳を取り出して日付の確認をしようとした。

「旅館の件、何かしら出るかもしれないけど保障は出来ないわよ。
私に関することだけど、事件に係わっているのは一部だけだと思う」

ペンを口にくわえてページを探していた関野に、愛華はついでの
ようにそう付け加えた。加えていたペンを外し、降りかけた関野は
右に反転して、まだ何か言いたげな彼女に尋ねた。

「一部でも何でも、お前がそこに何かあると言ったんだろう。調べ
てくるのに期間はいるし、その間会えなくなるのは仕方ない。何な
ら携帯の番号とアドレスでも残しておくぞ」

「ありがたいわね、でも番号だけでいいわ。携帯今もって無いのよ

私。両親死んでから、ここにいるのも親戚のお情けとか保険のおかげだからそれ以上にお金を使う事もできなくてね。今は携帯も解約しているの」

白くて無機質な部屋は、そう言った理由だったのだろう。必要な物以外はいらないという事だ。愛華の病状を詳しくは知っていないが、もう一度医者かその親戚とやらの話を聞いてみる必要があるかと思いつながら、メモ帳に走り書きで番号を書き留めると、破いた一ページを愛華に渡す。

「携帯が無いんじゃないのか。こちらからの連絡は病院通してか。それとも連絡しないほうがいいのか」

「こつちから連絡する以外はしなくていいわよ。貴方からの連絡でこれ以上看護士達の噂を煽りたくも無いわ。聞いたら聞いたで馬鹿みたいな噂だけどね、聞いたく？」

「いや、遠慮しておく。俺も考えないようにしてる噂だろうし、変な目の正体を知ったらここに来る気がなくなりそうだ」

「違う。と、愛華は小さく笑った。渡した紙をひらひらと振る姿を見納めに、関野は病室を後にした。」

それから数日後、記事の素材としては十分ではないにしても、話を編集長は喜んだ。やはり話が出来ただけでも大いなる成果であるらしい。早速、被害者から情報を得るためという名目で彼女が泊まっていたという宿近辺の取材へと発つ事を告げても、一言で許可が下

りたほどだ。

事故のあった来地^{きじおろし}風峠を愛車で通っていく際、峠の途中には供養塔と、花束の塊が置かれているのが見えた。夏の日差しで花束は乾いて色あせているが、毎日誰かしらが来てくれているのかもしれない。供養塔のそばの線香は、まだ煙が立ち上っている。

車はスピードを落とさずその横を駆け抜けていった。ラジオが流れる車内は、クーラー嫌いの関野のため全開で窓が開け放たれており、隣に座る暑がりの千ヶ原にとっては、生ぬるい風だけでは辛抱堪らんと言った体^{てい}だった。

「事故の犠牲者……、か。それはそうとどうしてお前がついて来るんだ千ヶ原？ 男二人で旅館なんぞ俺は泊まる気はない」

道中何度も繰り返した質問だったが、これで五度目になる質問を千ヶ原にしていた。どういうわけか、関野の車でしかも愛華が泊まったという旅館にも一緒に泊まる羽目になったその理由に納得がない。

峠の途中カーブにハンドルを投げやりに傾けてぐいっと大回りに通ると、だれきった千ヶ原がパタパタと雑誌を団扇代わりに扇ぎながらいった。

「俺だって健全だ。だけど、来地風事件の経緯が分かるかもしれないんだろ？ だったら行かないわけじゃないか。しかも、俺の新聞社の知り合いがそのネタの持ち主とくれば。

そのついでに俺も地方の情勢を聞いてこられる、一石二鳥に何か文句あるか」

言いたくはないが、反論するところは多々ある。確かに地方の道路建設の件で取材に行けと言われた千ヶ原の言い分は、分かりはするのだ。だからといって経費削減を盾に自分と同乗して同じ方面に向かい、ついでに宿が一緒になるとは。

その『宿が』というところには納得がいかない。男と同じ部屋で寝るとするのは、学生時代に飲み会のあとに雑魚寝とか合宿でという事があったので気にはしないが、わざわざ五十三キロほど離れた山にどうして泊まるのかと言うことだ。

「千ヶ原。お前あの道路建設の件は俺が行く旅館からかなり離れていたはずだぞ。それにお前の行く道路建設のところは俺の車に乗っていくよりも、電車が通っている観光地にも近いところだ。一緒に行く理由が分からない。いくらつるんでいるのが楽しいとか、愛華の件に係わりたいたいと言っても、ちょっとばかり変じゃないか」

そう、今回の道路建設の記事に関してもおかしかった。県内での事を中心に取り上げていた千ヶ原の記事からはすこしかけ離れている記事だからだ。道中の暑さで緩くなるよりもぴっちりと閉ざされているその返答、彼の口はなぜか堅い気がする。

「ああ、だろうなあ。おかしいのは分かってるんだがよー」

そういう千ヶ原は運転している関野の横顔を見ている。何を言うでもなく、又車のエンジン音と窓からの風鳴りが音を作るだけの言葉の沈黙が訪れる。

「おい、いい加減にしろよ。ほんっとうに俺は理由が知りたい。変な心配されているみたいで気味が悪いんだよ。今のお前は」

曖昧なばかりの言葉を返す千ヶ原に、とうとう関野自身が焦れた。峠の途中に空いている停車エリアに車を乱暴に止めると、ギアを乱暴に上げて千ヶ原を睨んだ。愛華だけじゃなく友人にまで言葉を含まれるのもう沢山だった。千ヶ原が銜えていたもう火が消えた煙草を乱暴に外に放り出すと、千ヶ原の言葉を待った。

勝手に煙草を捨てられた割には、どういうわけか千ヶ原は冷静で、関野の苛立った態度さえも見越しているようだ。新しい煙草をつけるでもなく関野に怒鳴るわけでもなく、千ヶ原はしばらく訪れた静寂にまぶたを落としていたが、やっと関野に話をしだした。

「心配ではあるのかどうか、俺もわからねえよ」

そういいながらも、彼自身もどういったらいいか迷っているようだ。煙草を火もつけずにくわえて、だるさとそして困惑したような目で関野を見ている。

「その、なんだ。お前がまた被害者の部屋から帰ってきてからか。言い表せないんだが、お前がどっか変なんだよ。最初にお前とあの事件の話をしてからか？　だ――。」

そう言い切ると、千ヶ原は煙草に安手のライターで火をつけると、浅く煙を吐いた。

「おまえなあ、そりゃ多少はあの子に振り回されもしてるんだが」

「良いから聞け。なんかあるのは俺にだって分かる。だからな、もしそうならいつでも俺が力になる。だから何かがある前に俺を頼れ」

関野にそういうと、千ヶ原は乱暴に自分の顔に雑誌を載せると、

席を後ろへと大きく倒した。これ以上は何かしら言う気もないらしい。何をそれほど心配しているのかと、釈然としないまま停止エリアから離れる為にウィンカーを叩くようにつけると、ハンドルを回して山間の道を走り始めた。

千ヶ原との言い合いから三十分ほどで、目的地の旅館にはついた。構えはきれいだが、老舗の旅館らしくてとところで薄くなった壁面が趣を感じさせる。

部屋に荷物を置き、千ヶ原が別件の取材に向かってから関野は旅館の人々に取材を始めた。

手始めに、カウンターの受付に話を聞いたが個人的な情報なのとなあなあに済まされてしまう。続くように旅館を歩きながら、仲居の一人と話をすることが出来た。

「失礼します。数ヶ月ほど前の事件の事について伺いたいのですが、よろしいでしょうか。お手間は取らせませんかから」

「お客様、記者の方ですか。あいすみませんが、こちらでも女将からあの事件の事は口止めされているので話せないですよ。うちの評判落とす事になりかねませんから」

「評判を落とす？　なにかこちらであつたのでしょうか？」

「あ、いいえ。忙しいので失礼させていただきます」

関野に突っ込まれた仲居はシーズン中もあつてか、そそくさと退散してしまった。愛華の言ったとおり何かこちらにあるかもしれないが、旅館も客商売だ、叩いてほりが出るようでは人が離れてしまう。スリッパの音をつれて歩き回る事数十分。尋ねた仲居、料理

人、清掃係にいたるまでいい話は出てこなかった。女将に口止めされていたり、その事件はいつの頃だった？と言いつ出すものまで出てくる。

三ヶ月前の重大事故の割には、旅館の人々はい関せずの姿勢の人間ばかりだった。露天のある廊下を歩いているところで、関野は呼び止められた。

「もし、貴方ですか。私どもの旅館で来地風の事件の事を伺いに来ている記者の方というのは」

上品な声に廊下の角をみると、そこから藤色の着物を着た女性が歩いてくるところだった。

「ええ、そうです。こちらでのことも取材させていただきたく。女将ですか？」

関野がそう聞くと、壮年の女性はゆっくりと頷いた。そうして、女将は手近な広間まで関野を呼ぶと、事件の事についての話を短く切り出した。

「事件は、もう三ヶ月も前になります。うちの旅館はかわりが無い事は報道もされましたし、これ以上聞かれても困ります」

「事件の事についてもそうなのですが、被害者の方がこちらで過ごされたことは周知だと思います。こちらでその時何か会ったのかだけお聞かせいただければ十分です。ああ、気になるようでしたら名刺を渡します。こちらで確認を取っていただいて構いません。旅館の評判を落とすのではなく、事件の真相を探す事が今回の目的なので」

関野がすらすらと喋るのを、顔を伏せたまま聞いていた女将だったが、返答は

「どういわれても、こちらには係わりはございません。これ以上尋ねられるようでしたら営業妨害として訴えさせていただきます」

すげなく答えを返すだけだった。意思を伝えるだけ伝えると、女将は関野が引き止める前に本館にむかって歩いていってしまい、これ以上この旅館では収穫をすることは出来なくなってしまった。

「ふー」。なんかあるらしい気もするけど、肝心のところで勘が違っているのかもしれないなあ。これじゃ」

頭を大きく掻くと、溜息交じりに部屋に戻ることにした。歩き回っていた彼を見ている仲居達は通るたびに足早に立ち去ってしまう。本当に情報が出てこない。

旅館には滞在中はまともな応答がしてもらえないだろうと、関野は周辺での情報が取れないかを聞いて回る事にした。

季節は夏、日よけに上に乗せていたハンカチぐらいでは日差しは防ぎきれない。冷房の効いたホテルから出た温度差で、一気に汗が噴出して、シャツが体に張り付いた。

「あーくそつ。ここになんかあると思ったのになあ」

「何があるんじゃない？ にいさん」

いきなり横から声が飛んできた。反射的に横を振り向くが誰もい

ない。くいくいと、裾が引つ張られて下に目線を向けると、曲がった背で小さな剪定バサミを腰のベルトにつけた老人がそこにいた。

「じいさん、脅かすなよ。俺が探している情報。事故のときに来た家族の事だよ」

「あああ、可愛い女の子がおった家族かあ。気の毒な事になったの。やっぱりあれか、まだ、頭の方かなんか悪いのか？ あんときもなんかいっとったからなあ」

老人はそういいながらまた旅館のそばにある植木にはさみを入れ始めた。旅館の外に出てからの事件について知る人物の登場で、気持ちかはやりながら、メモ帳とボールペンを取り出すと、軽快なはさみの音を背景に、関野は老人が知っている家族についてゆつくりと聞きだすことにした。

「その、じいさん。可愛い女の子って、何か言っていたのかい？ 出来るなら何言っていたのか知りたいんだが」

老人は枝をぱちぱちと切るばかりで、言葉ではない間延びした音を出すばかりだったが、ひらひらと後ろでに左手を動かしつつ、こういった。

「最近煙草も値上がりしているな、にいさん。兄さんの持ってる煙草がどんな味をしとるのかね」

老人の動き続ける手のひらに自分のポケットから出した煙草数本を、おしつけると、おうおうと老人は頷いてはさみを休ませずにぼそぼそと話した。

「ありがたや、最近の奴はどうにも高くてな。あとでじっくりすわ

させてもらうさね。

あー、そうだったなあ。確か、雨がまだやんどらんときだったなあ、露天の近くの松が伸ばし放題だったんで、それをきる事になってな。

たまたま、んむ、たまたまでね。女湯の近くだったんよ、その松が。刈り込んでいる音もしとるし、音を聞きもすれば、お客さんもすぐいっちまうとおもっとったんだが。

なんやらぶつぶつぶつ話す声が聞こえてな、そいで気になってな、ちつとばかり枝を切る音を少なくしたのよ。

まあ、あんまり聞こえはせんかったが、最後にその女子の声が、いやな、どなったからよーっくきこえたのよ。

『私はもうそんな気は無いわ、もう嫌なのよ!!』って言う怒鳴り声がしたのさ。その声がその日のうちに出てくお客なんで見送ったのを覚えとるなあ。で、もう一本くれんかの」

「……………ああ、あと五本くらいはやるよ、じいさん。あんたのおかげで思っているよりも早く帰れることができそうだ。まだ、他に情報はないか？ あるなら教えてくれ」

老人から得た情報は、愛華の情報ではさして価値が無いかもしれないが、関野には愛華の話す内容の手がかりになる万金の価値ある話だった。だが、旅館の住人から聞きだせるのもこの老人からだけかもしれない。しゃわしゃわとセミが鳴き、日差しをさえぎる植木の手入れが続けつつ、老人は関野から煙草を受け取ると、また、切

れ切れに話を漏らした。

「にいさん、ありがたいなあ。こんな老人の与太話を聞いてくれるとな。」

周りの人間にも、あんまり聞かれん話しなのによ。

あーとな、あああ、ちつとばかりまてよ。んー。あー、そうだそうだ、俺も女子の声を聞きはしたんだが、そのあとがおかしくてなあ。

風邪ぎみだったし、植木の手入れしながらきいっとたんで聞き違いだとも思うがな。

そんなときもうひとり、確かに誰か男の声もした気がしたんだが。男湯にはいりに来る客はおらんかったし、水音もせんから不思議だったんでよくよくおぼえとるよ。

同じ旅館の爺にもきいたんだが、そんな若そうな男は泊まっとらんかった」

老人はそうまでいうと、「後はないでな」と言い残して、植木の間から庭のほうへ向かっていってしまった。

書きとめたメモ帳をしばらく関野は見ていたが、セミの声と道路から昇っていく陽炎の中で、老人の言った後の茂みの前で動かずにとっていた。言葉が足りない。愛華がここで話していたのはそういう気がないとは何だろうか。

そして、最後の老人が話していた言葉も気になった。精神疾患を

抱えているとされている愛華の話をしていけば、こういうところでその兆候が出始めていた。それだけで済まされていただろう。だが関野は違う。愛華の話をきいているので彼女にも疾患以外でそれなりのわけがある。もう嫌だというのが何に掛かっているのか、そんな気が無いというのは、一体何のことなのか。

どちらも同じ事を否定しているように聞こえる発言は、愛華が何かをすることを拒絶しているのを意味している。憶測は出来ないが、おそらく現実とは関わりが無いかもしれないあの世界についてだろうか？ 男というのが誰なのか気になるが、愛華の話し相手になった人物はいるのかもしれない。

愛華の言った事件に係わる一部を確かに手に入れる事が出来た気はした。けれども、取っ掛かりを得たのはいいが、この先が何処へ上っていくのだろうか？

あたる日差しの暑さの反面で、日陰の中で手招いている謎があの病室より冷えた気配を放っている。頭のハンカチで首筋に流れ落ちる汗は、ふき取ってもふきとっても関野の意思ではとまらなかった。

Key2 流転の門13 開錠（後書き）

第二章がおわりましたー。複線をそこそこばら撒いて切れてしまった感がありますが、三章で半分くらいは回収できたらと考えております；

続く三章ではどんな展開になるのか、まだ7pとばして3p程しか書いておりませんが、準備が出来次第あげていきますので楽しみにしてください。

Key3 紐鎖の岐路（ちゅうさのきろ） 1

ヒグラシの声が夜風に乗って響いてくる時間、夕方になっても関野は部屋の机でメモを見直していた。昨今、とはいっても数時間前のことになるがあの庭師の老人から聞きだした事で仮定を考えていたのだ。

メモ帳では小さかったので新たに大学ノートを使い今分かっている出来事を大まかにまとめてみた。ひとつは、この事件について全てを知っているのが愛華であるということ。

雑多の情報が細かく続いて、事件自体がおかしいという千ヶ原、過去記事の裏の見解。どれをとってもそれが関野に関わりがあったかを考えていた。

シャーペンの頭をカチカチと鳴らしては戻してみるが、煙草を吸おうが溜息をつこうが記憶の中でも、メモ帳でもそれらしい事件に係わった跡が無いのだ。

偶然だったとはいえ、愛華の取材に係わることになったのは納得する。だが、何故愛華が自分を選んだのか、変な映像をどうして見ることができたのか、口元にペンを当ててから病院に一度足を運ぶべきかという項目に斜線を引いた。

「頭がおかしかったらまともな生活が出来るかってんだ」

また今日だけで煙草一箱を吸いつぶしてしまった。それほどヘビースモーカーじゃなかった彼にしてみれば、最近の煙草の量は自分でもいささか異常だとは思っていた。けれども、吸わなきゃってなんぞいられない。

何度目かの旅館のコーヒーを飲み干すと再度書き散らしたノートとメモ帳の単語に目をやった。

思い当たるのは、扉から出てきた愛華からはなれた言葉くらいだろう。それは、『やはりアイツは嘘つきね』という言葉だ。アイツとは誰か？　ここでパツと浮かぶのがシュウラという少年だが、夢の中で会ったという登場人物でしかも愛華が話しているだけしか存在し得ない人物だ。

庭の方からはもう剪定する音は聞こえてこないが昼間に会ったあの老人が言っていた言葉も気になる。

事故のあった出立の日、風呂場で聞こえたという愛華の声は、そんな気はない、そして嫌だ。これだけでは何が何だか分からない。今の時点では愛華がこの時から精神的に疾患を起こしていたという話の裏づけの補助程度にしかならないだろう。

だが、それだけではどうにも引っかかる。僅か二回ほどだが彼女と数時間は話している関野には、話し方におかしい点は見られず、夢を語っているという以外は叫んだり狂気に囚われたような動作を見受けられなかった。

メモの項目にもこれは書き写した。だったら、何がこの事件でかわりを持っているのだろうか？　真実味の無い情報と裏の取れない会話ばかりがそこにあふれているのを見て、部屋で考えていた時間も無駄に思えてくるようだった。

シャープペンシルを机に置き、もう喉にも入らないコーヒーを洗面所へ捨てに行くと、聞きなれた携帯のメロディと振動が数回鳴りだした。あの音楽は千ヶ原だ。

コップを置き去りにしてハンガーにかけていた上着のポケットを探ると、千ヶ原の文字が白く輝いた。

「はい、関野だが」

携帯を開いて耳元に当てると、昼間より明るくなった千ヶ原の声が水音とともに聞こえてくる。

「もし、俺だ。やっと終わったぜー。まだお役所さんのところから聞いてきた情報だけだな。胡散臭いほどじゃないがどっち着かずなところがある言い方で手間取っちゃったよ。んで、いまバスに乗ってそっち向かってるわ。乗ったのが遅かったせいで一駅前のバスになっちゃまってさ。頼むから迎え来てくれないか」

「えらく元気だな。おれにもその元気が欲しいよ。ったく、何処までいきやいいんだ」

迎えの催促の電話だが、関野は少々気乗りしなかった。いつもならひとつ返事で行って連れて来るだけでいいのだが、それさえ今の頭では億劫に感じる。

「加のじ？あー、加の路っていうところだ。そっからだったら二キロくらいだよ。元気ねーなら、いい店バスのおっちゃんが教えてくれたから夕飯そこで食おうぜ。元気ないなら飯食って部屋戻ってから愚痴れよ」

電話向こうで千ヶ原が苦笑している顔が浮かんだ。じゃあな、という言葉ですぐにも彼は電話を切ってしまったが恐らく彼も自分の具合の悪さを電話越しで感じ取ったらしい。向こうも疲れてないわけじゃないだろうにと、関野は思った。携帯をそのままポケットに突っ込んで上着を羽織ると鍵を片手に部屋から出る為に財布とハンカチをズボンに突っ込んで、部屋の鍵をさがした。

散乱した机のメモ帳と大学ノートの紙をかき分けつつ、細長いル
ームナンバーキーを搜したが、転がりでてくるのは消しゴム滓やら
残っていたシャープペン、赤ボールペンと関係の無いものばかりだ。

「あつれ。俺鍵は机の上に置いといた筈だったんだが、どっか持っ
てったか、いや、部屋の外に出たのは爺さんから話を聞いて戻っ
てから出てないし。んー？」

鍵は目のつくところに置いておくのだがと、机の上を更に崩した
が鍵が出てこない。金庫や上着を再度探したが見つからない。と、
洗面所のほうから硬貨を落とすような軽い音がした。

「あ、そうかそういや戻ってすぐに水引つかぶったんだっけか」

汗を落としに行ったそのときに取り落としてもしたのだろう、千
ヶ原の事だからバスを降りる前ぐらいによこした電話に違いないと
思うと、急がないとまた催促の電話が掛かってきそうだ。

音のした洗面所を見ると、鍵が洗面台の中に落ちていた。先ほど
置いたコーヒーマグのカップがその隣に置いてある。

カップを置いたときに視界に入らなかったのが気になるが、すぐ
に鍵を取ると部屋からでるべく襖に手をかけて入り口に向かおうと
したときだった。

肩を撫でられるような寒気が走った。何故か分からないが虫が這
うようなそんな気味の悪い感覚が右肩からして思わず庭を見やった、
すでに暗くなった庭と石灯籠に灯された電気の明かりが白く煌々と
しており、どこから飛んできたか羽虫や蛾がその周りを飛び回っ
ている。

感じた悪寒はその一瞬だけだったが、消えたわけじゃない。まだ誰かが見ている、そう感じて関野は背後の洗面台も振り返った。もちろん、鏡に自分が映っている他に誰が写るわけでもない。ひどく驚いて挑みかかるような目の男が立っているだけだ。

「気の、気のせいだと思いたいもんだ。怪談やらなんとか言う話は愛華の話だけでいっばいだって言うのに」

そういうと、悪寒が残る部屋から関野は靴を突っかけるように履いて、千ヶ原を迎えに行くべく廊下を音高く踏みつけて部屋の電灯をつけたまま後にした。

散々に散らばったメモや紙が網戸から吹く風で重なって音を立てる以外、誰もいない部屋では音はしない。

その時、吹いた風にメモのページが大きくめくられた。幾つかのページごとめくられたそれは、関野が彼女の鍵についての思考を書いたページで止まると、ノートの上で目に付くような形になった。

誰もいないはずの部屋のそと、庭灯籠の一つに虫の集まりが悪い灯籠があるばかり。ちいさく震えたその灯籠の明かりがまた元に戻ると、虫たちはその灯籠にも光を求めてやっと集まりだしたのだった。

Key3 紐鎖の岐路2

旅館から持ってきた現地観光地図を片手に車を走らせて数分、日が沈んだのもあってか道は空いていて思っていたよりも早く千ヶ原のいう『加の路』バス停まではすぐだった。観光地からずれたところにあるここいらから更に外れたところであるこのバス停は作りはもちろんのこと、停留所の看板までが木製で古びた観を呈している。

車の明かりで虫たちが飛び交い、傍の川原からは蛙達の合唱が響いていた。幾らか鍵を探して時間を食ったとはいえ、そんなに遅くならないはずなので、停留所付近まで車を寄せてやると、奥まった椅子のところから千ヶ原が手を振り回しながら出てきた。

車が止まるのを待ちかねたように鍵の掛かったままのドアを引っ張って窓ガラスを叩き、関野があわててドアを開けてやると数秒でドアの開閉をしつつ自分の体を乗り込ませてきた。表のライトですこし顔が見えたが、どうやら川原の虫共が餌に狂喜乱舞していたところだったらしい。

頬に二箇所、首の辺りに一箇所と赤く膨れて、刺された痕が痒そうだった。

「たすかったあ。思ったより早かったから少なくともすんだよ。サンキュ、関野。ついでで悪いけど痒み止め無いか？ 蛎がよにもやられたらしくて」

腕の出る服を着ていた千ヶ原はずいと刺された箇所を見せると、確かに、二センチ以上は腫れてるいであろう膨らみがあった。

「場所が悪かったな。そのダッシュボードの中見てくれ。多分キンカンか、クルヒ辺りが入っていたはずだぞ」

関野がそういうと大急ぎでダッシュボードを千ヶ原は開けて中を物色しだした。紙と煙草が散らかして、何処だ何処だと千ヶ原は必死に探している。

関野はそんな千ヶ原を横目に、自分も刺されてはかなわないと、虫除けを首と耳の辺りにぬり、残った分で軽く顔をこすった。

「おい、お前なんで虫除けつけてるんだよ。俺が出かける時はそんなの渡してくれなかっただろうが。出る前に掛けてくれる優しさはないのか」

「聞かれないのに吹きつける無礼はしたくなかったからだよ。貸して欲しかったら言えばいい。聞かずに取材に行ったお前に届けに行くほど俺も暇じゃあ無かったしな」

「お、その発言、なんか進展が関野の方でもあったってか。じゃ、俺がナビするから定食と飲み屋両方やっている店があるからそこで聞かしてくれよ」

「いいよ。道が暗いから間違えないようにしたいもんだ」

お互いが虫除けや痒み止めを塗り終わると、止めていた車を発進させ加の路にあるという居酒屋へと向かった。道中は虫が何匹かやっぱり入っていたので、運転中の関野の隣で千ヶ原が何度も手拍子を打つ音と、あまり入ってこないラジオとがBGMという騒がしい車が道を走っていった。

夜の道は都会の喧騒から離れた町並みが街頭の明かりで幾らか輝いている以外は、旅館の明かりや遠くに輝く高速の電灯が白く光っているだけだ。車は滑らかに走っていき、途中道をひとつ間違えはしたが、古ぼけた赤提灯が揺れる居酒屋に到着する事ができた。砂利ばかりの駐車場に車を置いてから店に入る頃には、とっぷりと

日は暮れてしまっており、蛙の鳴き声もいつそう高鳴って響いているようだ。手ごたえのあるガラス戸を引いて扉の中に入ると香ばしい匂いと煙草、そしてすこし埃っぽい空気と店の中で机を拭いていたエプロンをつけた女性が元氣よく迎えてくれた。

「はい。いいえ。お二人ですね。こちらへ」

「あ、はい。リュウタさんの紹介できたんですけど、定食頼めますかね？」

店の店員が案内してくれる前に千ヶ原がそう付け加えると、店員はにっこり笑って座敷のほうへと関野たちを通した後、大声で薦め定食二つの注文をつけていた。

店の中は普通の日だけれども、常連客場ばかりだったがテレビの野球中継にそれぞれ夢中になっており酒も入っているこの場は賑やかだ。周りから少し離れているこは、情報を話し合うにはその喧騒もちょうどいいくらいだろう。

注文はすでにつけられたので、渡されたお絞りで手を吹いている関野に千ヶ原は早速情報について聞いた。

「で、どんな情報が入ったんだよ。ここに来てまた同じ情報だったら佐原、いや愛華って言うんだったな。そいつに馬鹿にされるぞ」

「だったらいいけどな。情報については旅館の人間から出たんだが、正直これが使えるのかどうかも分からん。愛華が露天で誰かと話していたってこういうことらしいんだが、これじゃ彼女が事故に会う前から精神疾患の片鱗が出始めていた事の証拠にしかない」

愛華の情報に関してはその庭師の老人からだけなのだ、他は千ヶ原から聞いた情報や、テレビ報道で出された雑多な事柄ばかり。水を一口飲んで溜息をつく関野に千ヶ原もなんとも言えず水入りのコ

ップを置いたまま回している。

「はあ、はあ。で、それはどんなのよ。精神疾患説を促す説って言うのなら露天でおかしなことがあったのか」

「そうだな、おかしいというか庭師の老人から聞いた話なんだ。なんでも、旅館を立つ日に彼女が露天で話していたんだ。詳しく聞くにももうろ覚えらしくてな。なんでもそんな気が無いとかもいうやだといったことらしい。で、話しているということなんだが、相手が男で男湯には誰もいないはずだった。だから相手がいないはずなのに話しているって言う不可解な状態だったということぐらいだ」

千ヶ原はそれを聞くと、眉を片方上げて手で遊んでいたコップを止めると軽く舌打ちをして考え込むような姿勢のまま関野に言った。

「やっぱり怪奇事件だな、それを聞くとよ。で、お前さんも爺さんに捕まったかあ。その爺さん事件記事で唯事の連中が引っ張ってきただ爺様かもしれないな」

「唯事が？　じゃあ事件の鍵になる人間だったって言う事か」

千ヶ原はそういう関野に手と首を大きく振って自分も水を飲むと続けた。

「いや、唯事関係だからわかるだろ。鍵にも何もならない、彼女は疾患を抱えているって言うのを確定させるのに使われたネタだよ。お前が言っただけにな。庭師の爺様の話は俺も聞いたことあるぜ。ただ年が年だから耄碌しているとか、そんな話も出たのは知っているが、男湯に人がいなかったという裏は取れてるんだ。確かに」

今度は関野が加えていた煙草を下ろす番だった。また嫌なところで話は事実を見せるつもりらしい。おろした煙草をみながら千ヶ原は更に続ける。

「そ、唯事の奴らが探りまわって確かに愛華が入っていたであろう時間に男湯に誰もいないことを確認しているんだな、これが。話の内容までは聞かなかったが、それだけじゃ膨らませるに微妙だ。おそらくそれで向こうが切ったんだろ」

「考えるとこの多い言葉だとは思うんだけどな、俺もその言葉が何故彼女から出てきたかはわからない。精神疾患だというのも正直疑いたいところだ」

関野がそう言い切ると、香ばしいタレの匂いが急に近くなった。

「おまたせしましたー。お勧め定食地鶏の照り焼きと山芋天ぷら定食二つどうぞ」

店員がサンダルを脱いで頼んでいた定食をちょうど運んできてくれたところらしい。隣に置かれたお盆の上にはまだ揚げたての天ぷらが音を出して、サラダと一緒に出されている地鶏が焦げ目も魅力的にてらてらと輝いていた。

「あ、ついでに俺だけ生中ひとつ追加で！ こいつは運転あるから無しでいいですよ」

関野が定食に目を奪われている隙に千ヶ原は勝手にそう付け加えた。そういった千ヶ原に理不尽だと言おうと振り向けば、早速出された天ぷらに手をつけて頬張っているではないか。

「おまえ、これで酒が無いとか無いだろ。すいません、ここいらで代行ありますか？」

「代行ですか。お客さん生憎ですねえ。この前やってはいたんですが、不況のあおりでなくなっちゃいまして。地元の人だと車じゃなくて徒歩なんで皆さん必要ないんですよ」

「あ、いやいや、知らなかったんで気にしないで結構ですから。じゃあ……俺はウーロン茶で」

これだけ旨そうなのに酒がお預けになるとはと、早速運ばれてきた生ビールに口をつけて飲み下す千ヶ原を恨めしげに関野は見つめつつ、味がいいからこそもったいなさ過ぎる定食に箸をつけて話を続けた。

Key3 紐鎖の岐路2（後書き）

遅ればせながら、二話目の投稿とさせていただきます。
体調はまだ本調子ではないですが、徐々に量を増やしていく予定です。

Key3 紐鎖の岐路3

これだけ旨そうなのに酒がお預けになるとはと、早速運ばれてきた生ビールに口をつけて飲み下す千ヶ原を恨めしげに関野は見つめつつ、味がいいからこそもったいなさ過ぎる定食に箸をつけて話を続けた。

「くっそ、今度帰る時はお前が運転しやがってたんだ。

精神疾患の件だがな、俺はどうも彼女が偽っているような気がしてきてな。最近の言動をみてもまともに話せているし、多少感情が高まったりする時以外は普通だ」

千ヶ原も酒と定食の天ぷらを食べながら、それには頷いた。関野の話を多少聞いてはいたが、彼女が疾患を抱えているという事はあるにはあるのだが、その程度がそれほど大袈裟な事だとは思えないのだ。

話してないあの夢話の状態でも愛華は饒舌に語っていた。むしろ夢話のほうが正常であるかのようにだった。もちろん、正気を疑われる節だつてある。だが、真っ先に疑われるのは自分だろう。

千ヶ原の昼間の車内でのこともあって、それだけは千ヶ原内は会話を省きつつ繋げて話していた。

彼女があれの正体について語る気が無いのならば、今は現実の話には出せない。それとこれとは話も違う事だ。ひとりで内心の整理をしていると、千ヶ原が含んでいた口の中のものを酒で飲み下して、更に大きく頷いた。

「そうだな、彼女が事件の事を話しているのはまだすこしだけでも、

被害者にしては冷静さを取り戻しているようにも聞こえる。けど、そうすると俺は何でその当事者である彼女が、お前をここに越させたのか疑問だ」

「疑問？ こっちにあるかもしれないといったのは彼女だし、彼女自身が知らない事で何かあった可能性があるから俺はこっちにきたんだ。何処が疑問なんだよ」

更に酒をあおりつつ、千ヶ原は関野の言ったことに指を立てる。関野としては、何の違和感も覚えていなかった事を指摘されて、何があるのかと千ヶ原の答えを待った。頬が上気した朱色を帯びて、千ヶ原の口調もそれに伴い熱が入る。

「当事者の彼女が知っている事以外って何だよ？ 事件に係わりのある事柄は警察でも、調べたし、それ以上でてくる事がないから愛華に集中してたんだけ？ その当事者である彼女が何も知らないって言うほうが、俺は怪しい。情報があるって言ったって古い情報位しか見つかってないだろう」

「だが、情報は情報だ。愛華自身が言った事だぞ、疑いが出来たとしても彼女がここを示したんだ。情報源が彼女に集中していたなら愛華から聞き出した情報こそ真相に近い事柄だと思って俺はここに来た。何も知らないならそういうだろうさ」

交わされる舌戦に近い席の客達がチラチラとこちらとテレビの間で視線を泳がせている。お互いに熱くなるには早すぎると、関野は置いてあった氷の溶けかかった水を飲んで大きく息をついた。

千ヶ原と此処でそんな事を言い合うつもりで話し出したわけじゃない。千ヶ原も酒を更に飲むが、空気は熱のままに話したときより

も雰囲気下がっている。もくもくと定食に二人が手をつけ、こちらを見ていた客達が視線をテレビに戻し始めた頃になって、千ヶ原が新しく注がれた水を含んで、話をついだ。

「関野よう、随分と入れ込んでいるな。何がそんな確信の元なんだ。車でもそうだ、突っ走るというか係わりを持ちたくないというか……。悪い、感情的になっているのは俺かもしれないな。だけど、もう一回言うぞ。なんかあるなら俺にも話せ」

焦げ付く苛立ちがその言葉の棘を作っていた。勘が鋭いほうではない千ヶ原でも、分かるほどに昨今の自分はおかしいらしい。車で彼の心配も分かるのだが、関野は言った千ヶ原を見る前に深く目を閉じた。

分かっているはずだった、だからそれを話せるはずがないと。あの空間は体験した人間以外が聞いたら漏れなく精神病棟行きになる内容だ。それを分かっているからこそ、真摯に聞こうとする彼の心遣いの受け止め方が拒否をとる形になってしまう。

目を開けても彼と対面して話すことは難しい。残った定食に手をつけながらふと考える、愛華にも同じ事が有ったのだろうか？ 今感じている理解不能を他者に伝える術は無い。同じ感覚を共有できない限りは。

「そうかつ！！ それで」

「あ？ なんだよ俺に言いたい事が決まったか？ お前が最近おかしかった理由は何だ」

「いや、そのな。個人的な事だから言いたくなかっただけなんだよ。」

強いて言えば部屋の事だな……」

思わず口から出た嘘は半分真実だった。部屋の事、空間は初めて共有できる人間が自分だったからあの反応だった。それに気づけたこと、今まで考えながらそこが抜けていた。千ヶ原には悪いがその事はやはり話せない。関野は続けるようにそれらしい言葉を並べた。

「なんだよ、個人的なことで部屋？」

「あー……部屋に、最近 らしいのが出てきて、その対処に困っていた。それだけなんだ。俺は苦手だからな」

「ああ？　もしかし黒くて素早いアイツか？　そういえばお前虫除けとかの常備がしっかりしていたし、部屋もきれいな方だからそういうことに縁が無いと思っていたんだが。で、それかよ？　！　そこまで悩むような事か！　！」

「いや、虫があまり好きじゃないのは知っているだろ。黒いGは特に嫌いだ」

すらすらと自分でも言葉が出てくる事に驚いた。言葉は切れ切れだが確信に迫る要点はその実、抑えてはいない。事実はつなげている言葉だが千ヶ原に後はどうとでも取れるようにしか話していないのだ。だが、彼の表情は思いつめていた先ほどの疑念を溶かす笑顔だった。

「そうかよ、なんだそんなことだったか。てっきり俺はあの事件に関わったせいでお前が精神的に辛いんじゃないかって思ってたんだ。病院から戻った後はいつもより状態が目に見えて悪くなるからな」

安心したのか、追加で更にもう一杯を注文してつまみも付けると、千ヶ原は残っていた漬物に箸をつけながら微笑んだ。

「いや、病院で出ない分自宅に戻ったらって考えたらそうはならな
いか？」

「お前そんなに虫嫌いだったのか。じゃあ今度はカブトムシでも連れてきてお前の机に仕込んでやろうかね。俺を心配させた礼だ」

追加できた酒を飲む千ヶ原はいつも悪ふざけをするように話す雰囲気に戻り、関野の肩をバンバンと叩いた。酒臭い息がかかってきてそれをいえば、更に酒を注文するといった風だ。

顔では笑い顔を作っていたが、気づいたことは消せない。理解不能であるあの空間の理解をしてしまった自分だから、それを認識してしまったから、彼女はそれを感じ取って話しかけてきたのだろう。

そして此処に行くようなヒントを与えたのも、二人の間でしか理解できない事柄があるからだ。笑っている千ヶ原をみて、関野は運ばれてきたウーロン茶の冷えた喉越しが心臓に届くほど冷えた感情をもっていた。表の事に関わっている同僚を、あの空間の犠牲者にするわけにはいかないと。

愛華は見えたらと言っていたが、それも今では怪しい。いや、全てが信用に足らない。そうして、またひとつ謎の仮説が浮かんだ。男と話していたという愛華の相手、あの空間を彼女があそこでも感じたとしたら？

夢が現実に関わるなんてそんな筈は無い、だが………どれも確証が無い今現実さえ曖昧だ。来地嵐峠で一体何が起きたというのか、

笑い顔の内面で関野は抛り所の無い現実を、千ヶ原との間に出来た現実の境界線で隔てられた気がしてならなかった。

そこにいる彼との距離は確実に、すこしづつ引き離されている。顔を手で何度も押さえて今有る自分の形を覚えるように、関野は居酒屋で大きく紫煙を吐き出した。

Key 3 紐鎖の岐路4

それよりすこし前の時間、愛華は扉をじっと見ていた。関野が旅館を調べに行くといっってからまだそんなに日が立ったわけではないが、いつもだったら一週間のうちで二～三回しか来ないはずの毎日々々の記者が扉の向こうでまた話しかけているのだ。

「でな、佐原さん。俺の言う事わかるんだろ？ だったら俺の話に少しくらい耳を傾けてもいいと思うんだ、な？ 情報の提供が一人だけなんてそんな、独占的なことは許されてないんだぜ。だからくくく」

関野が言っていた対処方法を考えておくべきだったと、今更ながらに思う。まだこられてから数十分しかたっていないのに感情が昂ぶって神経に負荷が掛かっているのがわかるくらいだ。

扉の向こう側で話し続けている塚本という男に扉を開けさせるつもりなんてさらさら無い。が、ナースを呼ぶには彼の話声は一時期よりも随分と場所を心得ている。おかげで叩き出すにも叩き出せない。

扉に枕か、隣に置いてある花瓶を投げつけてやりたいが、折角落ち着いてきた病状とやらが不安定になったところを医者に見せて入院が長引くまねをしたくなかった。

「っ。嫌な客ね、彼の言った通り。かといってあの数ヶ月間の時とはまた状況が違う」

枕をかぶるようにして愛華は小声を布団で音を殺していた。塚本が軽くドアを叩く音も鬱陶しいが、黙っている以外に術は無い。

ドアを開けられて入ってこられるのは嫌だ。実際には鍵を掛けられる作りではないが、精神状態の不安定さを理由に医者が入るのを禁じていたからこそ、ドアの向こうとこちらを隔てられた。

だが、昨今の関野との会話での状態改善が認められるという事で、いまでは許可を取られたら……。

枕から顔を上げて扉を背に、窓の外をみる。おまけに今日は調子の波が特に悪い日和でもあった。息について布団を引き寄せて身の内からにじみ出てくる悪寒に耐える。

「ちがうの。違うんだったら」

低く言葉にならないほど小さな声は、僅かにあふれてからベッドに落ちて染み込んでいった。その間にもノックの音は響いてきて、断続的なそれは豪快に叩かれていたときよりも恐怖を引き立てた。

悪い予感についての的中率は、愛華は抜群だった。布団を替えていた看護婦が病室の前を塚本がちょうどいる時に通りがかったのだ。

「あら、貴方も面会の方でしょうか？」

その発言に塚本は目を細めて笑顔で看護婦に返した。

「ええ、面会したいんですが入れていただけなくて、向こうが認めてくれないと入れてもらえないんですね。こちらの患者さんは」

「まあ、面会でしたら時間は少ないですけど可能ですよ？ 最近別の記者の方とお話する事が出来るようになりまして、状態も良好ですからどうぞ？ 貴方も彼女の助けになってくれるとうれしいのですが」

善意の看護婦はそういうと、愛華の部屋の扉を何度かひねると、部屋へと塚本を通した。会釈もそこそこに塚本はすぐに愛華の部屋へと入る。

窓のほうを向いている愛華はこちらのから表情が見えないが、部屋で先ほど動く気配がしていたから間違いない、起きているはずだ。

「やー、こんにちは。久しぶりになりますか、私毎日々新聞社でライターをしている塚本 将一と申します。実は貴方が実真東の記者の方と話が出来るようになったという事で、よろしかったら私にもお話を」

塚本は言葉ぶりを優しくして、足音を潜ませるように愛華へと歩み寄っていく。ゆっくりとした足取りだがその顔は獲物の喉笛に噛み付きそうな笑顔だった。

が、塚本が近づいてくるのにも反して愛華は一向にそちらを向こうとしない。おびえているのだろうと高をくくって愛華と正面から話すために前に立ってみると、髪が顔を隠している状態でよく見えない。それにも構わず、塚本は愛華との距離を縮めるようにそばに寄り添う形をとった。

「佐原さん、きっと貴方にも辛いお話だとは思いますが、でも、貴方も事件を解決したはずですよ。ですから、すこ、ん？」

傍に行っても反応がほとんど無い。むしろ誰も寄せ付けなかった彼女にしてはおとなしすぎる反応だ。塚本がその髪を書き上げてやると閉じた双眸に軽い寝息が聞こえ、窓を眺めていた形のまま彼女が眠りにについているのが分かった。

「いやだなあ、佐原さん。寝たふりなんてしなくてもいいじゃないですか」

そう言って彼女の肩を軽く揺さぶりを掛けてみるが、揺さぶられた愛華の体は寄りかかっていた背もたれからずれて布団に倒れるだけだった。寝たふりを続ける気なのかと更に揺さぶっても、寝息が聞こえるばかりである。

更に別のところに触れれば起きるだろうと塚本が彼女の頬に触れても、起きる気配は無い。軽く叩いたり鼻をふさいだりもしたが眠りから目覚めることはなかった。

それを見て大きく舌打ちをすると、塚本はあろうことか愛華の胸元に手をつっ込んだ。寝たふりをしているならこれで目が覚めるはずだ。だが、入れられた手が下着の上でうごめいても愛華が起きる事はなかった。

起きない相手にこれ以上のことをしようとすれば、看護婦がまだ近くにいますでせう。ここでは、見つけれれば犯罪者になりかねない。胸元に突っ込んでいた手を抜き取ると、動かない愛華の横から伸びた髪を数本引き抜きそれでも起きない愛華を見下ろしながら塚本は悪態をついた。

「さっきまで起きていたはずだよなあ。一体どういうことだ。わざとらしく大人をからかおうとしているにしては、おきねえしな。ついでに不感症か？ 世間のいろはもしらねえ餓鬼が俺の質問を避ける事がどういふことになるか、次に来たときには覚悟しろ。その化けの皮をひん剥いてやる」

そういうと、抜き取った髪をゴミ箱に突っ込んで捨てると、塚本は病室から荒々しく立ち去っていった。

残っている寝乱れた状態に等しい愛華からは、まだ寝息が聞こえている。セミの声が静まった病室に響いても、愛華は眠りから覚めなかった。いや、覚められなかったのだ。

「きつしよく悪い感触がしたけど、アイツあたしの体に何をしたのかしら」

「さあね。今は僕も向こうを見てないから何とも言えないよ。アイ」

同じ形の病室で二人の話し声が響いた。とはいっても、そこは愛華の夢の狭間での病室でだ。

塚本が寄ってくる足音を聞いていたとき、不意に意識が遠くなり音も視覚も斑になったのを感じた、気づいたら愛華は布団の上で動かずに色彩を変える病室に落ちており、目の前にはシュウラが座っている状態。急激な眠りは目の前にいるシュウラが引き起こした以外考えられない。

「で、どうして私をいきなり引き込んだのよ。貴方こっちには干渉しないんじゃないの？」

「あれ？ 君は都合が悪そうだからわざわざこちらに引き込んであげたのにね。今来た奴とは波長もソリも合わないように感じていたのだけれど、僕の気のせいだったかな」

「礼は言うわ。ありがと、それでおしまいよ。でもなんで呼び出すのよ。それだったらもう用事なんて無いじゃない」

愛華はそう言って、自分の意識を目覚めさせる為に集中した、だ

が起きるまでにはいかない。引き起こされた雑音のような五感全て

に響くノイズ、意識が乱れて眩暈がした。

そう、彼は何処にも座らずにまた空間に座っていた。重みを感じない体で空間に座っているのだ。そうしてこちらを見つめ続けている。瞳を開かずとも分かる、昔に比べて彼の目は感情が出るようになっていた。それは楽しみを輝かせて、さぞ面白そうに自分を見つめているのだろう。浮かんだ空間の反対側は彼女の空間ではなくなっているのを感じ、更に連なる圧迫感に再度目を見開いた。

「呼び出したのは助けるだけじゃないって言いたいのかしら？　だから邪魔をする」

愛華の喉の奥から唸る怒声が吐き出されていく。怒りをはらんだ声にも、返す声はまったく感じないように明るかった。

「そう、今起きるにはまだ早いね」

シュウラの目線は愛華の右手に注がれていた。今は袖まですっぱりと服が覆っているが、愛華は目線に気づき急いでその左半身をシュウラの目線から遠ざけた。

「知っているでしょう。私がこの空間で貴方と隣り合せて居る時は、すぐにも目が覚めたいってこと。まだ約束は果たしてないし、その時は来てない」

ベッドの側とシュウラが座っている空間側の空気が激しく撓み、脳髓にまで響きそうな重金属が共鳴する音が響き渡る。それは、どちらかが空間を飲み込もうとする作用で起きる空間の喰らいあいだった。

視認する波紋以上に互いの空間が大口を開けあって支配権を争う、シュウラ側の空間は愛華が居たときと同じ白を基調とした一室を保ち、愛華側は窓にその激情を表して荒れ狂う風雨をみせた。押しやれば押しやるほどお互いの空間が歪曲して音が激しくなる。

双方で喰らっていた空間はゆっくりと愛華からシュウラの空間を侵していった。窓の景色が水滴に覆われ、空間の色彩は怒りのままに赤や黒さまざまな感情を乱舞させた。

だが、無言の攻防はシュウラの周囲まで来てその動きを止める。すでに白の空間はシュウラの直径一メートルの球体でしか残っていないが、それ以上は塗りつぶされる事を拒絶するように空間が弾き返しているのだ。

愛華が反らした左半身の左腕に力を込めるように右手がその左肩をきつく掴んだ。

「おやおやそれだけか、まだ足りないね。もっとも、その気がまだ入っていないというのが正しいかな？ 何せ存外君は優しいからなあ」

「うるさい。とっとと出ていけ。私は約束した事を、それを果たそうとしているだけだ。決定打が無い今来られるのは嫌なんだよ。」

圧迫されているはずの白の空間は座ったままのシュウラを包んだまま愛華の空間を拒絶するようだった。力を込めても肩透かしをされるのに近い、そしてシュウラ自身は抵抗しているのをおくびにもださず、空の茶器をこちらに向けた。

何も入っていない茶器はこちらに向かったと同時に、大きく水を噴出した。愛華は即座に握っていた右手を水の直撃を防ぐ為に掲げるが間に合わない。白の空間はその水ごと槍のように愛華の空間に

向かって広がると逆に愛華の内部の空間をその水で埋め尽くす。

愛華の空間は、その水を飽和させて内部に新たにシュウラの空間を作り出す形となってしまうた。

空気がまたも泡の形をとり、水が喉に詰まる前に口元を愛華は押さえた。茶器の出した水に自らがおぼれる事になっても、余裕をたたえたままシュウラは立ち上がる動作をすると、張り付く足音を響かせて愛華の傍に歩み寄ってきた。

「やれ、君の空間はどうも乱暴だね。そんな作りの空間を作るような事を僕は教えたつもりはなかったんだけどな。ああ、それとも喋らない方がいいならこのまま空気じゃなくてこれを水としてもいいけど。君の意見が聞けないのは困るからね、空気にしてあげよう」

幼い子供をあやす様な口ぶりですういうと、ひとつシュウラは指を弾いた。その音で空間に満ちていた水音はさっと引いて、緩やかな静寂が訪れた。

シュウラを見ていた愛華の口元から色のついた空気の泡が大きく泡音も無くこぼれると、愛華はきつく眦をあげたままシュウラに掴みかかろうとする。

そんな動作を見ているシュウラはつかみかかろうとする愛華に任せるままそこで立っているばかりだった。動かないシュウラに愛華は殴るようにシャツをぐいと掴み、自分の顔近くに引き寄せる。争奪に負けただけでは無いその怒りが、最初の声を奪っていたが、息が整うと歯でかみ締めたような言葉がシュウラに向かって放たれる。

「いい、私はね、約束は守る。貴方が言った事を忘れたわけじゃないんだからね。でなきゃ私はこうして貴方と話してもいたくないのよ」

「分かっている。だから確認にきただけだし君に対して不安があるから来たわけではないさ。現界との接触は直接的には出来ない」

引き寄せて掴んでいた手をシュウラは慣れた手つきで剥がすと、またペタペタと歩いて空間に腰掛けた。

白に一新され直した空間で彼は新たにお辞儀をしなおすと、愛華へゆっくりと告げた。

「さあ、どんな事に現界がなっているのか聞かせてくれるかな？ 僕が思っているよりも面白い事になっているのならいいのだけれどね」

怪しく微笑んだその面を白の空間で愛華は油断無く見つめていた。声も立てずに笑う彼が憎らしいが、これ以上突っかかっても自分が疲れるだけだ。本当は呼吸するのも嫌な空間だが、足元にかかっていた布団を引き上げ話をする体制になると、夢の空間でぼつぽつと彼らは話し出した。

その間、数時間は現実の愛華は目覚める事は無かった。

Key 3 紐鎖の岐路5

それよりすこし前の時間、愛華は扉をじっと見ていた。関野が旅館を調べに行くといっってからまだそんなに日が立ったわけではないが、いつもだったら一週間のうちで二～三回しか来ないはずの毎日々々の記者が扉の向こうでまた話しかけているのだ。

「でな、佐原さん。俺の言う事わかるんだろ？ だったら俺の話に少しくらい耳を傾けてもいいと思うんだ、な？ 情報の提供が一人だけなんてそんな、独占的なことは許されてないんだぜ。だからくくく」

関野が言っていた対処方法を考えておくべきだったと、今更ながらに思う。まだこられてから数十分しかたっていないのに感情が昂ぶって神経に負荷が掛かっているのがわかるくらいだ。

扉の向こう側で話し続けている塚本という男に扉を開けさせるつもりなんてさらさら無い。が、ナースを呼ぶには彼の話声は一時期よりも随分と場所を心得ている。おかげで叩き出すにも叩き出せない。

扉に枕か、隣に置いてある花瓶を投げつけてやりたいが、折角落ち着いてきた病状とやらが不安定になったところを医者に見せて入院が長引くまねをしたくなかった。

「っ。嫌な客ね、彼の言った通り。かといってあの数ヶ月間の時とはまた状況が違う」

枕をかぶるようにして愛華は小声を布団で音を殺していた。塚本が軽くドアを叩く音も鬱陶しいが、黙っている以外に術は無い。

ドアを開けられて入ってこられるのは嫌だ。実際には鍵を掛けられる作りではないが、精神状態の不安定さを理由に医者が入るのを禁じていたからこそ、ドアの向こうとこちらを隔てられた。

だが、昨今の関野との会話での状態改善が認められるという事で、いまでは許可を取られたら……。

枕から顔を上げて扉を背に、窓の外をみる。おまけに今日は調子の波が特に悪い日和でもあった。息について布団を引き寄せて身の内からにじみ出てくる悪寒に耐える。

「ちがうの。違うんだったら」

低く言葉にならないほど小さな声は、僅かにあふれてからベッドに落ちて染み込んでいった。その間にもノックの音は響いてきて、断続的なそれは豪快に叩かれていたときよりも恐怖を引き立てた。

悪い予感についての的中率は、愛華は抜群だった。布団を替えていた看護婦が病室の前を塚本がちょうどいる時に通りがかったのだ。

「あら、貴方も面会の方でしょうか？」

その発言に塚本は目を細めて笑顔で看護婦に返した。

「ええ、面会したいんですが入れていただけなくて、向こうが認めてくれないと入れてもらえないんですよね。こちらの患者さんは」

「まあ、面会でしたら時間は少ないですけど可能ですよ？ 最近別の記者の方とお話する事が出来るようになりまして、状態も良好ですからどうぞ？ 貴方も彼女の助けになってくれるとうれしいのですが」

善意の看護婦はそういうと、愛華の部屋の扉を何度かひねると、部屋へと塚本を通した。会釈もそこそこに塚本はすぐに愛華の部屋へと入る。

窓のほうを向いている愛華はこちらのから表情が見えないが、部屋で先ほど動く気配がしていたから間違いない、起きているはずだ。

「やー、こんにちは。久しぶりになりますか、私毎日々新聞社でライターをしている塚本 将一と申します。実は貴方が実真東の記者の方と話が出来るようになったという事で、よろしかったら私にもお話を」

塚本は言葉ぶりを優しくして、足音を潜ませるように愛華へと歩み寄っていく。ゆっくりとした足取りだがその顔は獲物の喉笛に噛み付きそうな笑顔だった。

が、塚本が近づいてくるのにも反して愛華は一向にそちらを向こうとしない。おびえているのだろうと高をくくって愛華と正面から話すために前に立ってみると、髪が顔を隠している状態でよく見えない。それにも構わず、塚本は愛華との距離を縮めるようにそばに寄り添う形をとった。

「佐原さん、きっと貴方にも辛いお話だとは思いますが、でも、貴方も事件を解決したはずですよ。ですから、すこ、ん？」

傍に行っても反応がほとんど無い。むしろ誰も寄せ付けなかった彼女にしてはおとなしすぎる反応だ。塚本がその髪を書き上げてやると閉じた双眸に軽い寝息が聞こえ、窓を眺めていた形のまま彼女が眠りにについているのが分かった。

「いやだなあ、佐原さん。寝たふりなんてしなくてもいいじゃないですか」

そう言って彼女の肩を軽く揺さぶりを掛けてみるが、揺さぶられた愛華の体は寄りかかっていた背もたれからずれて布団に倒れるだけだった。寝たふりを続ける気なのかと更に揺さぶっても、寝息が聞こえるばかりである。

更に別のところに触れれば起きるだろうと塚本が彼女の頬に触れても、起きる気配は無い。軽く叩いたり鼻をふさいだりもしたが眠りから目覚めることはなかった。

それを見て大きく舌打ちをすると、塚本はあろうことか愛華の胸元に手をつっ込んだ。寝たふりをしているならこれで目が覚めるはずだ。だが、入れられた手が下着の上でうごめいても愛華が起きる事はなかった。

起きない相手にこれ以上のことをしようとすれば、看護婦がまだ近くにいますであらうここでは見つけれれば犯罪者になりかねない。胸元に突っ込んでいた手を抜き取ると、動かない愛華の横から伸びた髪を数本引き抜きそれでも起きない愛華を見下ろしながら塚本は悪態をついた。

「さっきまで起きていたはずだよなあ。一体どういうことだ。わざとらしく大人をからかおうとしているにしては、おきねえしな。ついでに不感症か？ 世間のいろはもしらねえ餓鬼が俺の質問を避ける事がどういうことになるか、次に来たときには覚悟しろ。その化けの皮をひん剥いてやる」

そういうと、抜き取った髪をゴミ箱に突っ込んで捨てると、塚本は病室から荒々しく立ち去っていった。

残っている寝乱れた状態に等しい愛華からは、まだ寝息が聞こえている。セミの声が静まった病室に響いても、愛華は眠りから覚めなかった。いや、覚められなかったのだ。

「きつしよく悪い感触がしたけど、アイツあたしの体に何をしたのかしら」

「さあね。今は僕も向こうを見てないから何とも言えないよ。アイ

同じ形の病室で二人の話し声が響いた。とはいっても、そこは愛華の夢の狭間で病室でだ。

塚本が寄ってくる足音を聞いていたとき、不意に意識が遠くなり音も視覚も斑になったのを感じた、気づいたら愛華は布団の上で動かずに色彩を変える病室に落ちており、目の前にはシュウラが座っている状態。急激な眠りは目の前にいるシュウラが引き起こした以外考えられない。

「で、どうして私をいきなり引き込んだのよ。貴方こっちには干渉しないんじゃないの？」

「あれ？ 君は都合が悪そうだからわざわざこちらに引き込んであげたのにね。今来た奴とは波長もソリも会わないように感じていたのだけれど、僕の気のせいだったかな」

「礼は言うわ。ありがと、それでおしまいよ。でもなんで呼び出すのよ。それだったらもう用事なんて無いじゃない」

愛華はそう言って、自分の意識を目覚めさせる為に集中した、だ
が起きるまでにはいかない。引き起こされた雑音のような五感全て
に響くノイズ、意識が乱れて眩暈がした。

そう、彼は何処にも座らずにまた空間に座っていた。重みを感じ
ない体で空間に座っているのだ。そうしてこちらを見つめ続けてい
る。瞳を開かずとも分かる、昔に比べて彼の目は感情が出るようにな
っていた。それは楽しみを輝かせて、さぞ面白そうに自分を見つ
めているのだろう。浮かんだ空間の反対側は彼女の空間ではなくな
っているのを感じ、更に連なる圧迫感に再度目を見開いた。

「呼び出したのは助けるだけじゃないって言いたいのかしら？　だ
から邪魔をする」

愛華の喉の奥から唸る怒声が吐き出されていく。怒りをはらんだ
声にも、返す声はまったく感じないように明るかった。

「そう、今起きるにはまだ早いね」

シュウラの目線は愛華の右手に注がれていた。今は袖まですっぱ
りと服が覆っているが、愛華は目線に気づき急いでその左半身をシ
ュウラの目線から遠ざけた。

「知っているでしょう。私がこの空間で貴方と隣り合せて居る時は、
すぐにも目が覚めたいってこと。まだ約束は果たしてないし、その
時は来てない」

ベッドの側とシュウラが座っている空間側の空気が激しく撓み、
脳髓にまで響きそうな重金属が共鳴する音が響き渡る。それは、ど
ちらかが空間を飲み込もうとする作用で起きる空間の喰らいあいだ

った。

視認する波紋以上に互いの空間が大口を開けあって支配権を争う、シュウラ側の空間は愛華が居たときと同じ白を基調とした一室を保ち、愛華側は窓にその激情を表して荒れ狂う風雨をみせた。押しやれば押しやるほどお互いの空間が歪曲して音が激しくなる。

双方で喰らっていた空間はゆっくりと愛華からシュウラの空間を侵していった。窓の景色が水滴に覆われ、空間の色彩は怒りのままに赤や黒さまざまな感情を乱舞させた。

だが、無言の攻防はシュウラの周囲まで来てその動きを止める。すでに白の空間はシュウラの直径一メートルの球体でしか残っていないが、それ以上は塗りつぶされる事を拒絶するように空間が弾き返しているのだ。

愛華が反らした左半身の左腕に力を込めるように右手がその左肩をきつく掴んだ。

「おやおやそれだけか、まだ足りないね。もっとも、その気がまだ入っていないというのが正しいかな？ 何せ存外君は優しいからなあ」

「うるさい。とっとと出ていけ。私は約束した事を、それを果たそうとしているだけだ。決定打が無い今来られるのは嫌なんだよ。」

圧迫されているはずの白の空間は座ったままのシュウラを包んだまま愛華の空間を拒絶するようだった。力を込めても肩透かしをされるのに近い、そしてシュウラ自身は抵抗しているのをおくびにもださず、空の茶器をこちらに向けた。

何も入っていない茶器はこちらに向かったと同時に、大きく水を噴出した。愛華は即座に握っていた右手を水の直撃を防ぐ為に掲げ

るが間に合わない。白の空間はその水ごと槍のように愛華の空間に向かって広がると逆に愛華の内部の空間をその水で埋め尽くす。

愛華の空間は、その水を飽和させて内部に新たにシュウラの空間を作り出す形となってしまった。

空気がまたも泡の形をとり、水が喉に詰まる前に口元を愛華は押さえた。茶器の出した水に自らがおぼれる事になっても、余裕をたたえたままシュウラは立ち上がる動作をすると、張り付く足音を響かせて愛華の傍に歩み寄ってきた。

「やれ、君の空間はどうも乱暴だね。そんな作りの空間を作るような事を僕は教えたつもりはなかったんだけどな。ああ、それとも喋らない方がいいならこのまま空気じゃなくてこれを水としてもいいけど。君の意見が聞けないのは困るからね、空気にしてあげよう」

幼い子供をあやす様な口ぶりですういうと、ひとつシュウラは指を弾いた。その音で空間に満ちていた水音はさっと引いて、緩やかな静寂が訪れた。

シュウラを見ていた愛華の口元から色のついた空気の泡が大きく泡音も無くこぼれると、愛華はきつく眦をあげたままシュウラに掴みかかろうとする。

そんな動作を見ているシュウラはつかみかかろうとする愛華に任せるままそこで立っているばかりだった。動かないシュウラに愛華は殴るようにシャツをぐいと掴み、自分の顔近くに引き寄せる。争奪に負けただけでは無いその怒りが、最初の声を奪っていたが、息が整うと歯でかみ締めたような言葉がシュウラに向かって放たれる。

「いい、私はね、約束は守る。貴方が言った事を忘れたわけじゃない

いんだからね。でなきゃ私はこうして貴方と話してもいたくないのよ」

「分かっている。だから確認にきただけだし君に対して不安があるから来たわけではないさ。現界との接触は直接的には出来ない」

引き寄せて掴んでいた手をシュウラは慣れた手つきで剥がすと、またペタペタと歩いて空間に腰掛けた。

白に一新され直した空間で彼は新たにお辞儀をしなおすと、愛華へゆっくりと告げた。

「さあ、どんな事に現界がなっているのか聞かせてくれるかな？
僕が思っているよりも面白い事になっているのならいいのだけれどね」

怪しく微笑んだその面を白の空間で愛華は油断無く見つめていた。声も立てずに笑う彼が憎らしいが、これ以上突っかかって自分も疲れるだけだ。本当は呼吸するのも嫌な空間だが、足元にかかっていた布団を引き上げ話をする体制になると、夢の空間でぽつぽつと彼らは話し出した。その間、数時間は現実の愛華は目覚める事は無かった。

重かった空気が乾いた口の中で吐き出されて、昼よりも鈍い輝きの光が目に入り夢の空間から帰ったのだと悟る。うっすら明けただけの重い瞼が夕方の光にたじろいだ。

「眠って起きて、こんな時間じゃあっちとどっちかって話よね」

のしかかる気だるさを追いやるように無理やり目を開いて愛華は渴いて張り付いた口の中から言葉を追い出した。

想像以上にふらつくのはあちらとこちらの違いだ。狭間から帰ればこうなる事はあったが、あれほど長い時間をあの空間で過ごせばこうもなるだろう。傍にあった水差しをとったがすでに水は空。仕方なしに起き上がって水道の傍まで歩こうとして、ベッドから降りたところでシュウラが居た空間に目が止まる。

誰も居ない、現実の世界に彼はいられないからそこにいるはずはない。ふらつく足取りで歩き出した愛華の足はそれでも、シュウラが居たであろう空間を通らないようにして水道のところへと向かっていた。

「分かっていたって、押さえられるものですか」

起着たばかりの愛華の手に握られたカップの取っ手を手が白くなるまでそこを掴んでも、夢で引き起こされた怒りの渦は収まらない。投げつけないようにカップを掴み続けているのが面倒だが、何度も息をついて洗面台のところで強く拳を叩きつけてその怒りを押さえつけた。

乱暴にひねった蛇口から噴出す水にコップをつけると、自分も手のひらを差し出してその水を掬っていた。掬った水が指の隙間から零れ落ちていく様を見ながら、自分の感情をそこに置くように何度と無く水を掬っては滴らせた。水滴が自分の服をぬらして、替えが必要になるほどやっても、その日の怒りは去ってはくれなかった。

「何度も言ったはずなのにね、でも……。変わらないわ」

手が冷たくなり白さが増して青くなりだしたところになって、愛華はやっと自分の顔に水を叩きつけるように洗う事ができた。赤く燃

えていた火を灰に埋めるように怒りを内の深くに宿らせて、髪から顔から水に濡れた自分を鏡で見て、愛華は着替えダンスに向き直った。

びしょ濡れになってしまった服をさっさと脱いで着替えてしまうと、濡れて残った服をくしゃくしゃとまとめてベッドの下から籠をだして空いたそこに放り込んだ。新しく着替え終わった服は薄青のパジャマ。事故に遭う前には一番お気に入りであった服だった。

口角の下がった無表情に近い怒りの顔が服を見て、更に下がった。潜ませた怒りに変わるそれは熱じゃない別の感情で、思うほどに下がった口が震えた。

「だからなんだって言うのかしらね。私は今も選んだのに、今更後悔でもしているのかしら？ 分かっているのよ。耳にこびりつく位言った言葉だわ」

言った端から、声が震えて自嘲気味に笑っていた。彼女自身が決めたはずの秘め事は今でも揺らぎを与えられれば震える。理解していったって納得など仕切れない事だから。

もう一度服をみつめ青いパジャマの袖を掴んでから、天井を反り返るように見上げベッドに倒れこみ笑い泣く表情のまま、今は居ないおかしい新聞記者が隣に居なくてよかったと静かに息をついて後数時間で始まる夕食までの時間をどう潰そうかと、愛華は自分の左手に咲いている緑の花を宿す蔦を柔らかなぞった。

その新聞記者とシュウラにしか見えないであろう蔦は初めて作られたあの日から随分と複雑に育っている。腕の中ほどにあるその花もまた、服の下で隠れて見えてはいないがその疼きは愛華にも育っ

ている事を嫌でも教えている。

夕闇に怯える歳では無くなった自分が、今日の日の夜がやってくるのが怖かった。

震える理由は分かっているても止められないのだ。その理由がたどれば自分にしか行き着かないのを知っているても。

愛華がそんな事になっていたとは露知らず、居酒屋でその後たわいない事を話していた関野は、千ヶ原が酒にほろ酔い気分になってきたところで、勘定を払うと店を出る事になっていた。

「はー。旨かった旨かった。久しぶりに贅沢したから明日からカツプ麺とか受け付けなくならないか心配だぜ」

「食いも食ったりだな、此処のおごりで俺からのおごりはチャラだぞ、いいな」

顔が桃色から酔いどれの赤に変わった千ヶ原の肩を支えると、関野は会計を済ませる前に鍵だけ千ヶ原に渡して席に座っているように言っただけで先に車へと乗せた。

途中から気づいたことのおかげで後半は話半分になってしまいがちだったが、千ヶ原はそこを気にしないで居てくれたようだ。まだ給料は入っていないから今回の出費は少々痛いけれども、無用なひずみが出来ずにすんだことだけでも喜んでおこうと関野は思った。

客が引けてしまった店内はまだ夜の九時だというのに関野達とカウンターでうつらうつらと眠りこけている地元の人と店主らしき男

性が網の上の焦げを取る姿、そして今払おうとしているレジの前にいる朗らかな笑顔をした女性だけだった。

「ありがとうございます、店には紹介でいらしていただいたのに随分と味が気に入っていただけたようです。お連れの方もご機嫌でしたね」

上着のポケットに入れていた焦げ茶色の傷がついた財布を取り出そうとしていた関野に、その女性はにこやかに話しかけてきた。財布を取り出し札を数えながら関野はその雰囲気につきずられるように答えた。

「はは、いえいえこちらこそ。随分余所者なのに騒いで煩かったのでは？ 些か騒ぎすぎたのじゃないかと、えーと、一二、三やで、四千とこれで会計しますね。領収書は一応切っというて欲しいんですけど、実真東新聞株式会社で」

関野がそういうと、出されたお金を相手は無言で受け取った。関野がおかしいと思いい顔を上げると、朗らかだった目の前のおばさんは、何だか沈んだような顔つきをしている。会計を素早く打ち込んだ彼女は手の平に押し付けてつり銭を返して、困った顔をしてこう言った。

「お客さん、まだあの事件の事で何かしらを探ってるんですか？もうあの痛ましい事件に何かあるって言うんですか」

「何がといっても、やはりあれだけの重大事故ですからね。不可解な事も多い、それを上から調査するように頼まれて今はこちらに来てるんです。痛ましい事故ではありませんが、知られて無い事実を探るのも私の仕事の一環ですから」

「おい若いの。あの事故は此処らでは無暗やたらと語るもんじやないって言われてるんだよ。でないと、憑かれっちまうぞ。来地嵐峠の連中にな」

横から野太い声が関野の声をさえぎるようにかかった。それまで焦げを剥がしていた店主がこちらに向き直っている。片手に網を握ったままの姿で太い眉が鼻に向かってやや傾いていた。店主はそういうと、網を下ろして調理台の所から押し戸をあけてこちら側に来ると、丸太で作った椅子にどっかと腰を下ろして関野に鋭い声で注意をした。

「事件の全部を知らないのは誰も彼もだがよ、世の中関わり合いにならない方が上手くいく事が多い。憑かれるって言う迷信は俺あ信じてないが、悪い事は不幸しかよばねえよ」

「それは、忠告ですか？ それとも何かご存知ですか、仰られたくないなら聞きませんが」

「忠告にはちかいだろうよ。んだがあの事故については知らん。昔話の黷^{かび}た言い伝えばかりが残る土地だ、それでも土地のもんにつっちゃ常識でな」

店主はそういうと、まだ話が途中だが背を向けて客の後片づけに机を見て回るため関野から離れていった。何とも言えず立ち尽くす関野に、レジのそばで立っていた女性が関野へ話しの続きをつないだ。

「父さんたら。ごめんなさいね、他所のというか記者の人たち好きじゃないのよ父は、あたしも、だけど。あの事件の事寄^{たか}って集って

聞いてったのも知っているからね。ここじゃ『余計な事聞くと加の路にいくぞ』っていわれるから」

「いえ、旅館の方からもほとんど何も聞けなかったもので、そう言った文句があるとは知りませんでした。でも加の路、此処にくるのが脅しになるんですか。昔お化けでも居たんですか」

関野も不思議だったので、そう聞き返すと女性は父親の手伝いをするか迷ったようにしていたが、店主はそれに顎をしゃくって関野を示すと何も言わずに皿を音立てて運び出した。

「良いみたいですから、少しお話しますね。此処に伝わっている古い言い伝えがありまして。もちろん昔話ですから他愛も無い話ですよ」

「来地嵐、それと此処に伝わる伝承ですか。時間は気にしなくてもいいので、出来るならそれも詳しく教えてください」

関野はそういうと、手元にあった財布を素早く上着に突っ込んでメモ帳を取り出すと彼女の話に聞きいった。

Key3 紐鎖の岐路6

「お客さん、まあ立ったまままでお話しするのも疲れますからこちらへ。」

そうですねえ、此処の地方に昔から言い伝えられている昔話でね。もともと来地嵐峠は名前の無い峠でした。そこには風の神がいらっしゃったという話でね」

「ふむ、昔話らしいはなしですね。その風の神様が名づけたのが始まりなのでしょうか？」

関野がそう聞き返すと、女性はゆっくりと首を振って否定してこう言った。

「いえいえ、そんな優しい話じゃありませんよ。怖いお話でね。」

その頃は村も少なくて、新しい土地を開拓したり、山間に狩りに出かけながらこの近辺の地形を探る人もいたそうです。

そんなころから風の神は峠に住まわれていたそうですが、あるとき一人の若者が風の神見たさに夜の峠に向かい、峠で風の神とその峠の隣の森に住む鬼がなにやら話しているところに遭遇したそうです」

薦められるまま自分も丸太椅子に腰掛けると、その女性の話に耳を澄ませた。怪奇だろうが民話だろうが何が情報源になるかもわからない。昔話を真剣に書き綴る記者に、女性もすこし声を低くして話を更に続けた。

「若者は神に見つかり、峠の向こうで待てといわれますが、好奇心

を押さえきれずに隠れて二人のやり取りを見てしまいます。その結果神の怒りを買ってしまい峠から吹き降ろす風にこの土地に飛ばされてしまいます。

ですが、それだけでは神の怒りは収まりませんでした。飛ばされた若者には呪が掛かり、土地を通る道を幾度も変えて歩いててもこの土地から出る事はできなかったそうです。そこで名前がついたのが、嵐が来る土地の峠、『来地嵐峠』。そして若者が出られなかったここは道が加わり続けるので、『加の路』そう呼ばれています」

「随分と理不尽な昔話でもありますね。覗いてしまったことで死ぬことになってしなうなんて」

「ええ、ですからこの昔話の教訓では、好奇心は犬をも殺す。それを特に表しているんです。だからこそ、余計な事に関わってはいけないと。そういう言い伝えが残る土地でもありますから、他所様に對して排他的な態度を取ってしまうみたいです」

女性はそういった話をする、傍で書き続ける関野にお茶を入れる野に一旦席を立った。ボールペンの走る音が最初は早かったが、女性の物語が終わりまで来るとその音は鈍っていった。ペン先が止まって一筋の汗が流れる。

「そういうわけで、あまりお話は出来ない理由も、お分かりいただきましたと思いますから、あの事故のお話は聞いて回らないほうがよろしいと思いますよ」

「え、ええ。怖いお話ですけど興味深い話をありがとうございます。あ、お茶ちょっと思ったいたら相方が車で待ちぼうけになってると思いますので失礼しますね」

関野は淀みなくそう答えると、女性は軽くお辞儀をして地元の男性を起こしに関野のそばから離れていった。

お茶はそれほど熱くはなかったが口付けて一気に飲み干すと、すぐに店ののれんをくぐって出て行こうとした。

「おい若いの、つり銭忘れているぞ」

店主の声掛けにすぐ引き返してつり銭を引つつかむと、関野はそのままと横に引き戸を引っ張ると後ろを振り返りもせずに車に向かって歩いていった。

すぐに車についたが車内で待っていた千ヶ原はほろ酔い気分だったのもあってか、既に席を倒して寝入っている。車内に入る前に関野は車に体を預けて、一服する為に煙草を取り出した。

夜風に揺れるライターの火を見つめていたが、勢いよくそれを閉じると、くわえていた煙草を再度胸ポケットに突っ込み隣にあるメモ帳も、ふれる気が起きなかった。

言葉にならなかったのとは違う、只の昔語りの此処まで驚く自分じゃないはずだ。そう思うのに昔話に自分が重なった気がしてしまい、最後まで状態を保てなかった。煙草さえ吸う気が起きなくなる。

「なんだよ、なんなんだよ。俺ばかり振り回されて一体なんだって言うんだ。たかが夢に何で振り回されなくちゃならない」

そうはいっても昔話に重なった好奇心の若者は、今真実を知ろうとして、未知のところを踏み込んでいる自分に聞こえる。夜に冷や

される自分の体が熱どころか、生氣まで奪われる気がした。

「それとも、これもまさか愛華が知っている事だって言うのか？
そんな事あったまるかよ。彼女はここにいない。それに、俺が此
処まで調べるのを知っていることなんて不可能だ」

そうは言っても、それも不確かにしてしまう現実があった。あの
夢の空間、安定剤で不眠の状態に夢の空間に引きずりこまれたとい
うのが仮に、彼女が催眠術だの何だのを使ったとすると仮定する。
もし、それで自分の精神状態に深い催眠による罠が仕込まれていた
としても、催眠が簡単に効くようになる状態になるには一定の条件
が要る、それはだからありえない。

考えたくなくても思考は更に複雑になった。まとまらない思考に
もどかしさばかりが先走り、関野は持っていた煙草ケースを地面に
たたきつけた。飛び散ったまだ吸えるはずの煙草の白い色は、浅黒
い地面に放射状に飛び散っていった。

森が風にざわめき吹かれた煙草が軽い音を立てて転がっていく。
落ち着かない考えに、何もかも振り回された関野は、それ以上考え
たくもないと、煙草ケースだけ拾い上げると車に乗り、ラジオの音
を上げて加の路の居酒屋から旅館に向かった。

旅館についてから、千ヶ原を部屋の敷かれた布団に転がしてくると、
まだ十時をまわる前だったので残っている時間だけでも温泉につか
るか、服をまとめて薄暗い廊下を歩いて湯殿に向かった。

浴場について服を脱ぎだしてから、ハタと気づく。彼女が話して
いたのは隣の女湯だが男はいなかったと。

「きてから気づくってのも、面倒なもんだ」

半分脱ぎきってしまった状態だし、これ以上考えるのも億劫だった。なんでもないさと、服をロッカーに放り込むと関野は浴場へと入っていった。

夜遅くなのもあって人のいりはなく、すれ違った腰の曲がった老人等が最後に上がっていき浴場には誰一人居ない。掛け湯だけして湯につかると、湯の出る口からあふれ出る水音のほかには天井から時折滴り降りる雫、そして遠くで回っている換気扇の音ばかりだ。

関野はそれまでのむしゃくしゃしていた感情も思考も、湯に浸かってそれがほぐされていくのを感じた。室内の誰も居ない空間が余計に気持ちを和らげていく。

大きく息をついた関野は、入っていた手ぬぐいで顔周りを拭くと周囲に目をやった。湯煙がうっすらと浴場内に籠っている中、洗い場やサウナ室などに自然と視線が行く。誰も居ない風呂に隣の女湯からも女性の声は聞こえてこない。そのまま浸かっているつもりだったが、数分も持たなかった。

桶を抱えたまま露天の入り口に向かっていている自分に、居酒屋の昔話が耳で反響した気がする。音を立てて滑らせたドアの向こう側に湯煙が引き出され、熱の籠った体に外の空気がちょうどいい具合に吹き付ける。

露天は見回しても当然ながら誰も居ない。屋根の下にある風呂と作りが違う湯の口から同じように湯があふれるだけだ。

「ここだね。声は響くみたいだが逆に響きすぎる気もする。だったら誰と話してたんだ」

そういつつ、関野は屋根の下に入ると腰から下だけを湯船に沈めた。あれだけ加の路の辺りで鳴いていた蛙の合唱は今はずこし収まった様に思える。

女湯の露天は高い岩壁がさえぎっているので見えはしない。仕切りは大きいし、湯を流す為に向こう側には堀がある。

湯の中をわたって堀を確認したが、大きな岩で仕切られた岩の向こう側の堀は深さも幅もあり、黒々とした苔に覆われているように見えて、とてもじゃないが隣にいけるようには見えない。

「堀のほうから女湯に向かって話しかけるのは難しそうだな。だったら男が話していたというのもわからん。老人のそれが嘘だという線も考えに入れたほうが良いのか？ んー。」

一人考えを呟いていたときだった、昼間の悪寒が前振りもなく襲ってきた。関野は調べていた岩から手を離して大きく水をかくと、後ろを振り返った。

もちろん誰も居るわけがない。だが、直に肌で感じる悪寒は服を通してよりも気持ち悪い。何処から見られている気がしたのかを体ごと動かして左右をみるが、人影なんてありはしない。湯で濡れた産毛まで逆立つほどに鳥肌が立つ。

そして、色々と見ていた視線が内風呂とを繋ぐ入り口付近で止まった。何もない、それでもどうしてかそこに引き寄せられるように目が留まる。

内湯に続く扉は閉まったままだったし、何かが扉に触れたとかで扉にも変化はなし。

一分ほどそこを注視していたが、来たときと同様に悪寒は去ってい

った。

「この、悪寒も愛華繋がりがしてくるな。ここも曰くつきと幽霊が出るとか、そんなのであればそれで納得しておきたいぜ」

関野はそういうと、悪寒が去った扉に向かって歩み寄ると内風呂も早足に通り抜け、千ヶ原が寝ている分だけまだ現実に近い部屋へ向かう事にした。

鳥のさえずりが聞こえる。夜の空に浮かぶのは日差しをたたえた銀月だ。それを見上げながら木製の椅子に座る少年、いや青年だろうか。柔らかそうな服一式を身にまとい何かを青の花に彩られたティーカップで飲んでいるのは、愛華にシュウラと呼ばれたその人だった。

「やれ、愛華とも話したし、現状がどうなっているのかも聞けたね。けど」

誰に言うでもなく話す彼は、浮かんだ月を肴にテーブルに三つの腕それぞれに火を灯す燭台に、指を触れた。燃え上がりもせず揺れるそれは、指を包んで火を大きくすると指を拒絶するようにその舌の穂先を横に反らした。それさえも満足そうに眺めるシュウラの目にも、同じ色の火がともっている。

「これはどう転ぶのかさぞ見ものだ。愛華の言っていた約束も直に本当になりそうだしねえ。これはしばらく僕ものんびりはしていられなさそうだ」

忙しくなると暗に言いながらも、シュウラの口調に慌てた素振り

はまったくなかった。クスクスと笑いながら燃える火を掴みたくて
堪らないと、指先を動かす。

真昼の光の夜に照らされたスズランや露草を植えられた庭に夜風
が吹き付ける。彩られた庭で彼は静かに約束の時が来るのをいつも
と変わらぬ茶を飲みながら待った。

Key3 紐鎖の岐路

居酒屋の翌日、肌寒い空気を感じて関野は目を開けた。温泉からもどって窓側の布団にもぐりこんだところまでは覚えている。そうして寒さを感じるまで闇の中で眠りをむさぼっていたのだけは覚えていた。

愛華の言う夢は彼女が傍にいないと見る事はできないのだろうか？　まだくつついたままの片目をこすり上半身を動かして部屋をみまわすと、皺がついたシャツのまま寝ている千ヶ原がドアの側に向かって転がった後が見えた。

寝相の悪い男だとおもいつつ、関野は自分の布団をはがして頭を明瞭にする為に洗面台へ向かった。鏡に映る自分の見た目は若干の寝不足気味で、まだ瞼がくつついたままの関野は冷たい水で顔を洗って残った眠気を覚ますと、昨日途中まで考えて結局出なかったことで得られる情報について考えていた。

煙草ケースを開けて朝の一本を吸おうとしたが、昨日投げつけたのだから無いに決まっている。ケースの空いた空間を指が掴んで、引き出した指先を見て鍵を片手に財布をもって部屋の外に出た。

まだ朝早いのか廊下には足元を照らす小さな明かりが昇りの浅い日差しで、ぼやけた輝きで足元を照らしている。

まだ眠る人もいるだろうと、関野は冷ややかな空気の中足音を小さくさせる。どうしても出してしまう小さなスリッパの乾いた音が旅館の本館に続く廊下で中庭を映す窓や壁に当たり反響していった。

ゆっくりとした足取りで向かった本館にある煙草の自販機までたどり着くと、残念な事に気づく。気に入りの銘柄が無くなっているではないか。

財布の中身と煙草を見比べながら大きく溜息をつく。仕方なしに口寂しいよりはと同じ銘柄のライトを一箱買おうと、部屋に向かって歩き出そうとした。

時刻は午前四時と二十を回った頃、部屋に帰る途中で、彼の頭には此処にきた理由と、これ以上居る必要があるのかという選択に思考は移っていた。

老人、そして伝承とどちらにも決め手が無いのだ。土地の風習もそれに加わって、余計な事は聞きだせそうにも思えない。編集長に断ってきた取材も、これで良いのかとばかり思えてくる。

廊下が禁煙なのは知っているが、関野は煙草を啜えて部屋までの長い道のりを歩いた。

「どちらにも考えられないなら。いつそ愛華のところに戻るべきかもしれないな」

中庭の見えるところまで来たとき、関野はふとそう呟いた。見えないなら、見えるようにすればいい。それが何かに触れる事になっても。

庭に目をやっていた関野に新しく力がこめられた。信じられないなら、自分が体験した事も含めて考えれば良いじゃないか、あのときから経った時を考えれば日はかなり経ってしまった。此処で午前中事件漬けになって、それでもでなければ愛華の元に戻るべきだろう。

「手がかり無しって言うので怒られそうな気もするけどな」

そう言った関野は目線を上に上げると思い出していた。思い出さなくてもそうだ。間違いない腕を組んで堂々とベッドの上から毒舌を吐くのが愛華だろう。

すっきりはしない回答だが、事件当事者である彼女の他に事件を知り得ている人物が居るのかどうか、それも疑わしいと思えてきていた。

「そうか、逆に何が出来ないじゃなくて、何処でも伸びる可能性で伸びきっている芽を刈るべきなのか」

関野はそういうと部屋に向かって足を速めた。探さなければならぬ場所は此処じゃないと、決めたからだ。冷えた廊下に新しく灯した熱の足跡を残して関野は去っていった。

去った後、朝日の廊下のはめ込まれたガラスが結露でやんわりと曇る。

キュ

かすかに音がした気がした。それは観葉植物が揺れた音だろうか？ 窓際に置かれた棕櫚シュロの葉が風も無いのかすかに揺れていた。開いている窓は無いはずだ、玄関の自動ドアは開いていない。そして、その葉先にぬぐわれた窓の曇りは偶然にも指の先でなぞったような四本の細い線がついていた。

部屋に戻ってから煙草を吸いながら昨日脱ぎ捨てた服をまとめると乱暴にかばんに突っ込み、すぐにでも帰る準備をしていると、その動きに目を覚ました頭の髪が爆発した友人がまだぼぼ閉じた目で見上げていた。

「んだよ、朝っぱらから機敏な奴だなお前は」

「やっと起きたか。これだけ動いて手ほとんど起きないお前が鈍感なだけだと俺は思うのだが」

関野がそう返すと布団の虫と化した千ヶ原の手が伸び、携帯にそれが届く。片手でそれを開けて時刻確認をした彼の寝ぼけた怒りの抗議がしてくる。

「それは俺が寝坊なだけかもしれないと思ったが待て、まだ五時半だぞ！　せめてあと一時間は寝かせろよ。今日も俺は現場のほう回らなくちゃいけないんだから体力回復に練る必要があるのに」

そう言ってもう一度布団にもぐりこみ、虫から蛹へ逆変化した千ヶ原に、関野は残っていた資料を突っ込みながら言った。

「悪い。だけど俺も予定が変わった。ここいらで調べても出てなさそうだから一旦愛華のところに戻る。情報が何の役に立つか聴かなきゃならないし、あの事件に他に関わっている被害者からも意見を聞きたい」

「あ——そうですかあ。……………んだと？　かえるだあ！？」

関野がしまい終わったところで千ヶ原が布団を跳ね飛ばした。先ほど閉じていた目が完全に開いていて、現状を把握できて無いが帰

るの言葉に反応して大きく頭を左右に振っている。

「関野いきなり帰るっていうのはどういうことだ、俺にも分かるように説明しろ」

「一度言ったんだが。ここで調べても何も出てこないように思える。だから愛華に直接効きに行く。そのついでで生き残った被害者達の証言も聞く。それだけだ」

そう言った関野に頭を抱えて聞いていた千ヶ原だったが、口を結んだまま表情は硬い。昨日の今日でいきなり帰ると言われれば無論納得など出来ない、おまけに収穫はあの唯事の見つけてきた爺さんだけだ。千ヶ原は額に手を当てたまま関野を見やって言い返した。

「お前、それだけで帰るのかよ。というか待て、俺が寝ている間に何があった。そしてどうして帰る結論になったんだよ。おまけに、お前だって何回も俺に言わせるな、なんかあって話せる事なら俺が力になるって行っただろうが」

「いや、何があったも、どうしたのかも無いが？ 強いて言うなら来地風の由来をお前が寝ている間に聞かされたのと、此処の住人がその昔話のせいで、好奇心には目をつぶれと言われているのを守っているのが分かっただけだ」

関野がそう告げると、千ヶ原はまだ納得がいかないように乱れたシャツの上ボタンをひとつ外すと、そこをふって首に風を送り込んだ。関野の言葉の後でお互いに言葉が続かない。

千ヶ原は何か言いたげだったが、それを黙っているようで、あえて何も言わないで居るようだった。お互いが目を見る沈黙が数分は

続いただろう。黙っていた千ヶ原が、そこでやっと口を開いた。

「あのよ、関野。お前本当にどうかしているぞ」

「黙ってからの開口一番がそれか。俺は何処も変わってない、只情報がないから知りたいことのあるところへ行きたいだけだ」

「それがおかしいって言ってるんだ。昨日の晩のあれも、中身は違うな？ え？ そうだろうが」

「中身が違う？ ゴキブリは出るし俺は虫が嫌いとか言っていないぞ」

「それは本当だろうが違う。それ以外で、あの記事に関わってからの前が変だって言っているだろうが！」

千ヶ原はそういうと、布団の上でダンと拳を打ちつけた。音に関野が驚くとすぐに布団から立ち上がり、収まりきらない感情で関野の襟首を掴んだ。

「ちがうって言ってんだ！ いきなり帰るだの、メモ帳の束にあるおかしいだの何だのって言葉の羅列は何だよ。俺が気づかないとでも思ったか、知らないなんて思ったのかよ？！ お前一体何に関わったんだ、事件だけじゃないだろう」

千ヶ原が掴んだ襟が締められ喉が痛い。掴まれた手を引き剥がすと、足元に崩れ落ちるように関野は咳き込んだ。

上からそれを見下ろす千ヶ原の両の手は引き剥がされたままの形だったが、それが僅かに震えている。関野は顔を上げてから、その両の手の震えに気づいたのだった。襟首を掴んだのは千ヶ原だった

が、その顔は苦しんでいた。

「おまえよ、抱え込むなよ。言いたくないのは分かるがよ。何で言いたくないのかぐらい聞かせてくれよ。そうじゃないとおれだってわからねえ、どうしてそこまでして他人を関わらせたくないのかな」

「千ヶ原。げほっ、コホッこほっ。あのな、俺が関わらせたくないからとか、そんな事だけじゃなくて話せないでいるのも分かってくれ。だけど、すまない。気、使ってくれてんだろ」

咳き込みながらも、関野は目の前で立っている千ヶ原にそう言った。分からない事を知りたいと思っっているのは何も千ヶ原だけじゃない、今の自分がそうなのだ。まして、信用できそうにも無い話をどう話したら良いだろうか？

関野はそう考えるほどに千ヶ原に話せば楽になれないと考えていた。だが、心配してくれる同期の悪友にもこれ以上心配をかけても良いとは思えない。千ヶ原が何かを言おうとして口を開いてから、関野はそれにかぶせるように言葉を続けた。

「悪いな。関わらせたくないとか、そうじゃない。今俺も整理出来てないから、それを話していいのか分からないんだ。来地嵐の事件が怪奇事件だというのを、いや、それより前だな。愛華と話してから俺も頭が整理できなくなったのかも知れん」

「佐原と話してから？ 話の内容は、その言い方だとまだいえないみたいだな。いい、わかった。俺も突っ込みすぎたよ。整理が出来てからでいいからお前の話を聞かせろ。」

事件とかそういうの関係なく、同期の友人としてだ。分かったら心配かけるなよ、お前の様子からまさか早駆のあれみたいになったかと思っただぜ」

納得いかないのを我慢して千ヶ原が言った最後の一言に、関野は飛びついた。

「さて。早駆だと？ それは別口の記者のことか？ そっちに何があったか教えてくれ、もしかしたら手がかりになるかもしれない」

逆に肩をつかまれて、千ヶ原は関野から頼み込まれて朝一番に大きな溜息をつく事となった。

Key3 紐鎖の岐路（後書き）

愛華の居ないときには、関野ではなくて千ヶ原さんが振り回されていて、今後もしかしたらそういう役回りになるかもしれないーとの溜息かもしれません；

Key3 紐鎖の岐路8

その日の午後、早速関野は取材を切り上げて来地嵐を下っていた。ラジオの音は前に比べて幾分か小さく、それは同僚の話しなかった事から、新たな手がかりが得られた事があるからだ。

千ヶ原が話していなかった、いや、そのせいで関野のことを事ある毎に心配する心情になったのは、同じ新聞記者仲間で、戦線を退いた早駆新聞のある記者の話を耳にしていたからだ。事実上、その人物は心神耗弱、精神不安定を理由にして会社を退職させられているそうだ。

溜息をついた千ヶ原が言うには、そう言うってから関野へも同じ事が起こっているのではないかという不安に駆られて、あえて話す事ができなかったし、そんな事でへたばるような関野ではないと思っていたからこそ、それが話せなかったそうだ。

大きく曲がりくねったカーブをくだりでスピードを落としながら、関野はその話を思い出していた。何があったかにせよ、愛華と出会ってからそうなったという点では、ある種の共通点を感じる。

関野は精神面に確かに負荷が掛かっている事を自覚していたが、これが他人にも向けられるとは考えても見なかったことだ。なにせ愛華自身も、此処に入れる人物は自分が初めてだと思っていたからだ。

言う必要もなかったのだろうが、そこに人を入れたのは確かに自分が初めてなのに違いはない。けれど、自分以外の反応は大まかな事しか聞いてはいなかった、しかし事件の事では、あの時自分は周り

の人間が行かされているという取材について、自分も一通りの取材をすればいいだけ思っていたのだ。それ以上聞く必要はないと……。

それがそもそも混乱が分裂する起点となる一点に違いないだろう。後手後手に回るしかない情報探索は、どうあがいても先手が取れない。

苛立ち紛れに、峠に車が来てない事を確認して大きくハンドルを切って、停車地に止めることにした。

止めた車にもたれて道中で新しく買ったライトではないほうのタバコを吸いながら、新しい情報で熱くなっていた頭を冷やす。こうして新情報が出たとたんに飛びついていた自分にも原因があると、関野は考えていた。

日差しは頂点からすこしずれただけなので、これから一番日がきつくなりアスファルトの照り返しもきつくなる頃だろう、中古で買ったこの車がエンストを起こす確率は低いが、自分休みのついでで二十の頃から使っている車を休ませてやった。

じわじわと鳴きまくるセミが、杉林の向こう側からツクツクボウシを伴って熱さを倍増させる音を放っている。朝方や夕方に比べてしまえば、セミの鳴く声は感慨も消えうせるだろう。

一本目の煙草が森のほうに流れていって、薄い煙が掻き消える。ささやかながら吹く風が時折その暑さをさらっていき、二本目の煙を今度は道の先へ流していって、何も言わずにそれを見ていた関野は次の目的地を愛華のところに決める。

「一番こっから近い上にアポイントが取れやすいのはあいつだ。早

駆のほうは、編集長に裏を回してもらうか」

そう呟くと、二本目の煙草をくわえたまま関野はまた休ませた愛車を走り出させた。

来地嵐からもどると、関野はその足で早速白永原衛生病院へと向かった。数日しか離れてなかった病院は、変わりようも無いが、気のせいか愛華の部屋に向かうのが躊躇われる気がした。数日間だったとはいえ、愛華から特に連絡も無かったし変化も何も無かったと思うのだが。

そう感じると、愛華の病棟患者の数がいつもより少なく感じられ、関野は愛華の部屋へ足早に歩みだした。

ナースステーションの前を通り過ぎたところで、誰かに声をかけられるまでは。

「よう、色男。今は面会謝絶だぜ」

聞き間違いのような無い耳につく声で、関野は足を止めた。視界にあの帽子が入っていなかったが、座っている男を再度確認すると間違いが無い、塚本が帽子を取って座っていた。

「生憎お前さんが、いや、お前もか？ 気に入っている佐原はちよっと前からあのお決まりの精神疾患をだして病室から俺も追い出されたばかりだ」

「なんだと、おい。その頬についた手当ての後とお前さんが帽子を外して巻いている包帯にも理由があるのか」

塚本が帽子をわざと外したわけじゃない理由がそこにあった。頬

には重ねたガーゼが取れないように大き目の絆創膏、更に上から十字に大きいバツ印のつけたテープがはりつけられ、すこし血が滲んでいるところから少々深い傷が付いている事が伺える。頭部のほうは頬に比べれば小さいがガーゼが当てられそれが取れないように包帯が巻かれて、包帯は頭の左後ろ辺りで止められている。塚本はそれを待っていたように、自分がいつもかぶっている帽子を目の前でひらひらさせつつ、言った。

「だから、俺が言った通りになっただけさ。アイツの疾患はよくなくてはいないし、頭がおかしいのも治ってない。証拠がこの傷さ。俺の頭に水差しぶつけてきやがって、割れた欠片でな、後は言わなくてもみりゃ分かるだろ」

「お前がその前に何を言ったのかが気になるな」

関野は冷たい目線で塚本を見ると、休憩室の椅子に腰をかけた。何があったか分からないが、塚本が愛華に対して何かしたと考えられるからだ。背筋を貫くようなその目線にも、塚本は意に介さないように座り直した関野へ半笑いの顔を向けた。

「はは、そんな事を気にしてどうするんだよ。あいつの取材は成立しない。話もまともにも出来る状態じゃなかったぜ。お前がこうなるのだって分かりきっていた事なんだよ、代わりに俺が怪我をしたんだ。むしろ感謝して欲しいくらいだね」

塚本の笑みは憎悪をしたたかせた悪意に満ちていて、彼女に何らかの形で襲わせる形をとったに違いなかった。

「どの口が、何を言ったか、それを俺は聴きたいって言ってるんだよ」

声の低さが増した関野に塚本は眉をあげて、それをにらみつけた。手当てを受けたばかりの相手だが、そんな怪我を気にしてやる優しさなど、彼に対して関野は持ち合わせたくなかった。睨みつける状態が続いて、塚本は持っていた缶を飲みながら関野同様に声を低めて話した。

「あん？ お前にどうして言わなきゃいけない。感謝してくれたら話してやつても良いが、感謝の言葉ひとつ無い礼儀知らずにはなす事なんざねえよ」

「なら、言おうか？ わざわざ怪我までしてくれて止めてくれたんだな、ありがとう」

関野の低い声は変わらず、怒声も消えてはいないが謝った事で、プライド負けしたと思った千ヶ原はまだ怒りは解けないまでも、しゃあしゃあと言ったのけた。

「はんっ。そういえばいいんだよ。なあーに、簡単な事しかしてねえよ。アイツの両親、奴の前で車の中で火に包まれて死んだんだろ。だからな、『どうしてご両親の車内脱出機能をセットしてあげなかったんですか？ あ、それとも自分だけ助かる為に飛び出して助けなかったんですかあ？』ってきいただけさ。俺は、聞いた、それだけだよ」

その言葉に、関野の拳が硬く握られた。何を言ってもと堪えていたが、先日とは逆に関野が今度は塚本の首を掴みかかった。

「ふざけるな。例えそれが質問だったとしても、許される代物じゃないだろう。被害者は彼女もだ！ 助けに行かなかったんじゃない、

助けられなかったんだろうが！」

「どうして、そんなに肩をもつかない？ 関野さんよお、俺がしたことは見られてないし、聞かれてもない。俺がやったという証拠もない。あるのは俺の怪我したって言う事実だけ。録音テープもとってない、声の証拠も残らない。なのに、どうしておれのせいになるかな？ ねえ」

塚本は喉で低く笑うと、喉元を締め付ける関野の手を掴むと外そうと力を込めた。お互いの力が拮抗してどちらも軽く動いては戻りを繰り返すばかりで、熱はより高くなっていく。

「ふざけるな。だからといってお前にどういう権限があるんだよ。俺は今此処でその話を聞いている。愛華と面識があるにしたって俺との時と変わり様が違う。ならお前とあった性に来る、違うか」

そう言った関野に塚本は堕ちた人間を笑うように低く笑いながら、喉の所から自分の手を離して関野を見つめた。

分かりきった事を聞いている自分が滑稽でたまらないと、塚本が手を離してまで腹の近くに手を当てているのに気づいて関野も掴んでいた襟を放す。おろされて机にずり落ちた塚本はまだ、その両の手で腹を抱えて押し殺すように笑っていおり、笑いすぎて途切れる声で関野に言葉を更に突きつける。

「は、は、はは。お前、何処まで馬鹿なんだよ？ なあ、冗談で言っているだろう？ 出なきゃこんな面白い冗句でなきゃしないさ。言っているじゃないかよ、証拠らしい証拠は無い、お前だって只の一記者にしか過ぎない」

塚本は関野を指差しながらさらに泥のようにまとわり付く毒の言葉
を吐き続けた。

「そうだよなあ？ 俺は確かに愛華ちゃんからは嫌われているが、
お前は気に入られたって、結局のところ血のつながりどころか古く
から家で付き合っていたわけでもない。とどのつまりは俺と同じ穴
に住むムジナだろうが」

「お前みたいなのと一緒に」

「するな。お前がそう言っても俺が言っている事実はかわらねえだ
ろ。俺は記事にする為に此処にきた、お前も記事にする為に此処に
きた。気に入られたか気に入られなかったか、違いは只それだけだ。
角砂糖に集る（たかる）蟻と大差ない」

腹を抱えていた両手は目の前の机に下ろされて、その両手を支え
に関野へと塚本は笑ったまま言い募る、此処に来るきっかけとなっ
たその事実を。

だが、その事実にはその相手に気に入られただけでない事実があ
る。例えばそれが愛華の妄言だったとしても、彼女は事実を話そうと
すると約束したのだ。力の籠った口内で大きくきしむ歯の音に、塚
本はニタリと口を大きく歪ませた。だが、これ以上言いかえせまい
と笑った塚本に、先ほどの怒りに低くなった声とは別の抑揚の無い
返し刃をはなった。

「大差がないだ？ 人の傷口えぐってまで聞き出そうとするような
悪漢と一緒にしないで欲しいもんだ。お前はその傷口をえぐる事で
しか彼女から情報を得るやり方が無いと思い込んでいる馬鹿だろう
が」

関野のその言葉に、塚本は歪んでいた口元が小さくなった。馬鹿と言いかえされたことにも、怒りを覚えて加えて言い募ろうとするのに、逆に関野が言葉をかぶせて押さえ込んだ。

「なんだと、馬鹿は」

「馬鹿だろうが。情報を一番握っている相手に対して傷を付けければ情報を吐き出させる事ができると思っっているなんて大馬鹿にもほどがある。一体何時の時代手法だよ？ それとも効率の悪い恐喝か？ そんな事したところで得られる情報に、それは情報提供者が教えてくれたスクープとして流せると思っっているのか」

机に手を突いてこちらを睨みつけていた塚本を見下す関野の目は、突きつけられた刃の数だけ相手に突き帰そうとする憤怒が燃え始めていた。見下ろされているのを我慢できず、塚本もそれに対抗して立ち上がったが、立ち上がった塚本に見た目では見下ろされていて、内面ではまったく逆の光景が二人の間で冷たくかちあっている。

視線が上を向いたところで、関野が自分を見下すのをやめる訳ではないのに気づいて、塚本が大きく机を叩いた。

「ふざけるな。どんな事だろうが吐き出した事と事実を変えられるわけがねえだろ。アイツは現に俺に怪我を負わせた、それを変えられるわけがないっていったんだ。奴が言った、それが事実だ。だからそれだけでその言葉が事実になるんだよ」

「それが馬鹿だって言ってるんだ。何で彼女が怪我を負わせたか？ たとえ疾患が有ったとしたって引き金になったのはお前だ。そこを追求されてどう答えるんだよ？ まさかそこまで彼女が、何て言

い逃れしようとか考えてるんじゃないかな？」

関野が突きつけたそれも、塚本と同じ事実だ。叩かれた机の音でナースがこちらをちらほらと見ているのを見て取りながらも、言い返せない様子で塚本の顔が上気して赤くなり出している。関野はその反対で、先ほどたぎっていた怒りは静けさを帯びるほどに冷たく燃え出したのだ。

嫌悪は憎悪になり、関野はそれを一層に際立たせるように目を細めて立ち上がった塚本をねめつけた。

「立場が上とかどうかまだ言うようだったら、何度でも俺はお前を叩き潰してやる。同じ新聞記者だと言ってたがな、出入りのフリ」と記者をしている奴とを一緒にするな胸が悪くなる」

そうはき捨てる関野はゴミでも見るように横目で塚本を見やっ
てから、席を立てて愛華の部屋へ向かう為席を立ち上がった。塚本はそれを見てはいたが、何も言わずにこちらを睨みつけるばかりだ。そんな塚本に付き合いきれないといった体で関野は廊下の角を曲がり愛華の病室の前まで歩いていった。

やはり塚本が言ったように愛華の病室には白にゴシック体で面会謝絶という文字が刻まれた札が、患者名の隣でぶら下がっている。関野が来たというのに、扉の向こう側では気配があってもこちらに来る様子が無くて、言葉の一つもかけられそうに無い。

小さく扉を叩いてはみたがそれで反応が戻ってくるはずも無く、反響音が沈んで扉が揺れただけだ。反応が無いのを確認しても頬を軽く搔いてから関野は扉の横で愛華がおきてくるかどうかともわからずに、そこで待った。

煙草を吸うことが出来なろうと話しかける言葉を自分が持ち合わせていなかろうとも、只そこで待ちたかったのだ。あの小憎らしい笑みを浮かべて自分に話しかけていた彼女が、こちらに気づいてくれるだろうと信じていた。

感傷に、らしからぬ青臭さを自分に感じたが、それを分かっている。でも関野はそこから動かずに愛華を待った。

冷房の聞いた廊下で奥からは自販機の機械音が重々と響いてくる以外は自分の腕時計の規則的な秒針が進んでいくときがこぼれていく音ばかりだ。

立って待っていた関野が左頬からの衝撃に吹き飛ばされ、唐突にその沈黙が破られた。

待っているだけだった関野に横からきついストレートがその頬を打ち抜いたのだ。金属音と何かが腿に刺さって痛みを感じて見上げると、そこには怒りのままに拳をぶつけてすっきりとした顔をしている塚本の顔があった。

「かっこいい事言っただけな顔して立ち去るなよ。お前が、只の偶然で来る羽目になった奴がよお」

音に驚いてばたばたと人が集まってきて、看護師たちの声が飛び交う。背中にも鈍い痛みがあり恐らく後ろにある台車に背中をぶつけたせいだろう。頭をそのもち手にぶつけたせいで、それ以外の状況把握をしようとして鋭い痛みで頭を押さえた。足には注射器の針先がズボンに沈んでおり、その部分に小さな赤丸が滲んでいる。それを見ていた関野に、看護師の一人がひざを付いて声をかけてきた。

「もしもし、もしもし。大丈夫ですか？ 意識はありますか？ 記者さん、記者さん」

「ある。でも、痛いところが幾つかもある」

「意識はあるみたいです。誰か外科の先生に言ってきて、一人手当てして欲しい人がいるって」

そういう声が聞こえた向こう側で、看護師から悲鳴が上がり、彼女は引き剥がされて床に転がされた。複数の看護師に抑えられながらも、塚本が関野に寄ってきたのだ。

「お前なんかが関わっていい山じゃなかったんだよ。お前如きのパツと出てきて、人の目の前で手柄を搔つ攫っていくような野郎がな。後悔する前になって俺は言っちゃただろうが。あのおかしい奴は相手にするなって、なのに手前はそんなのお構いなしだ挙句に、こうなった。これは全部お前のせいだ！ お前のお前のお前のお前の」

狂ったように自分に唾が飛び散るのも構わずに塚本は話し続ける、拘束している看護師たちもぞっとしたように其の手を離しかけた。それを機に、一気に周りを腕を振って振り払うと、まだ頭がぼうつとしている関野の襟首を掴んでさらにぶつけ続けようと塚本は顔を近づけた。

「あんたが、たかだか貴方みたいな奴がその人に代わりになれるわけがないでしょう。どけ」

掴まれていた襟首が急に緩くなった。振り払われた腕に壁側に体が倒れて、冷たい感触が背中にする。目を開けて塚本がいた場所を見ると、周囲が騒然としていた。最初に視界に入ったのは何かの葉

液が入ったビンの形をしていたはずの物、続いて足元に掛かった其の中に入っていた液体の掛かった自分のズボン、そして、其のビンの支えを持った愛華だった。意識はあるが、痛みを感じたままなのでもう一度頭を振って痛みかた意識を取り戻すと、愛華がそれを見下ろしながら呟くように言った。

「あたしが待っていた人間に、お前みたいな奴が手を出せるはずないでしょう」

周囲が自分を見下ろす愛華を取り押さえたのはその言葉が終わるか終わらないかだった。床に飛び散ったガラス片のせいで騒ぎが大きくなり、塚本は愛華にノックダウンされたせいで、一階の事務所隣にある守衛室に寝かされて、その後警察に引き渡される事になったと別の階にある外科医から話を聞かされた。もちろん、意識がはっきりしてから殴られたせいで出来た傷の借りを返すために一発塚本に報復したいと思い聞いた結果だ。

だが、それよりももっと大きな問題がその『病棟暴行事件』で愛華が薬液の入った点滴を自分を助けるためとはいえ、起き上がった扉を無理やり開いて叩きつけたせいで点滴を途中で外した事がばれてしまい、厳重な監視役が付いた状態に移され、しばらくは話せなくなっただろう。

色々はまだ聞きたいことも話せずにいたというのに、突発的とはいえこんな事になってしまったのが悔やまれる。愛華は、看護師に文面を一度見せた状態の手紙を部屋から渡してきた。

関野がそれを開いて確認すると、そこには『宿題の答え』とこぎれいな字で以前病室を訪れた際に渡された答えが一文で書き込まれていた。

「それは、私の五感が途中からはっきりと分かるようになった事よ」

白いスケッチブックの切れ端に書かれた其の手紙は、関野の手の平におさまるほどの大きさしかなかった。

「これを忘れていたといったら、間違いなくなじられていただろうな」

関野は治療後に騒がしいセミのいる白永原衛生病院の隣にある記念公園に来ていた。手紙の短い文面を見ながら、以前書きとめていた手帳を見直して、宿題と其の答えについての整合性を確かめていた。メモ帳には確かに途中から愛華が其の感覚を感じ始めていたことが確かに書いてある。だが、それが余計に不可解だった。

「だから、其の宿題の意図はなんだったんだよ。愛華」

感覚が出来た事が何だというのだろうか？ 其の問いかけを懇切丁寧に説明してくれる相手は、あの病院の一室で今は薬剤投与をされて眠っている事だろう。ぼやくように独り言を繰り返す関野へ日差しを避けてきた鳩達が細かな足取りで向かってくる。

誰のせいとは言いたくはないが、今は警察に届けられた彼のおかげで、愛華にしばらくは手がかりを訪ねることが出来なくなり、関野は折角切り上げてきた取材も、無意味になってしまったと大きく溜息をついて、ポケットから千ヶ原に次の手を打つべく、来る前に聞いていたある人と会うための連絡を繋げるメールを打ちこんだ。

Key3 紐鎖の岐路 遇路

連絡を取り付けてくれたのは、先に帰っていた自分では無理だという事で、千ヶ原がその記者とコンタクトを取ってくれたらしい。

その日の二時過ぎという事で、教えてもらった住所へと関野は車を走らせた。病院で喰らった一発のせいで口を切ったところの絆創膏がまだ取れないのも、触れて鈍い痛みが頭の奥にまで響いてくるので、思い出す。

殴れるものなら殴り飛ばしてやりたいところだった。塚本があれだけの事をしているとは、あのせいで面会謝絶となってしまった愛華には二三日どころか、下手をしたら一月以上は会えないかもしれない。手がかりになる事をつかんでもこれでは確かめようも無いだろう。

郊外にあるというその人の自宅は、何処にでもありそうな住宅地の中にある一軒だった。客が止められるところも付いている駐車場をのぞき、少々広い二階建ての瓦葺はなんとも味のある家だ。

車をそこまで走らせると青年がひとり駐車スペースの前に出ていて、手振りで付いてくるように指示すると、そこから二十メートルほど離れた空き地へと案内された。

スペースには看板が幾つかあるところから察するに、共有駐車場なのだろう。教えられた場所に車を停車させて、下りると丁寧に青年は出迎えてくれた。

「こんにちは。父のご友人からの紹介は聞いています。僕は市田

俊樹と言います。よろしく、関野さん」

「いえいえ、そんなにかしこまらなくても結構です。こちらが無理を言ってきたのに」

「いいえ、何か取材をしたいとのことで……父に来るということはあるの事件に関したことでしょうか？」

青年は迎えてくれた目は穏やかだったが、そのことになると、陰りを帯びた瞳を付した。事件で精神的な不調を訴えてからというもの、職場の一線を退いてしまった彼の父親の不調がどういったものは、詳しく聞いてはいない。

「私も友人の話を聞いていただけですので、詳しくお伺いするにはやはりそちらでお話を聞かない事には分からないかと思います」

まだ向こうで情報を集めている千ヶ原が送りつけた文面では、退いてからはだいぶ容態も安定しているようだからと書いてあったが、息子の様子から察するところ本当はよくなっていないかもしれない。そう言った関野に伏せていた顔を上げてから軽く頷くと、市田青年はこちらへと、家のほうまで先にたって歩き出した。それほど離れていない家の道のりを彼はゆっくりと歩きながら関野にこう言った。

「そう、ですか。わかりました、ではこちらに来てください。父の状態は、安定はしていますけれどもあまりこの話について語ろうとはしてくれません」

住宅地の中、一步一步をわざと遅く歩く青年は関野へそう話し出した。歩みの遅い青年の後ろに従って関野はそれに続き、低く聞き

取りづらい話を聞きながら、彼の家の事について聞いた。

「お父さんは、来地嵐の事件以来で君たちに何か話してはくれなかったのですか？」

「そうです。僕たちにも姉さんにも、先に逝ってしまった母さんだけにすこし話を漏らしたそうですが、母は父の話については、僕らにも語れないと言っていましたから」

青年は前を向いていたが、そういうと小さく溜息を漏らしていた。母親が死んでからのことも青年から聞いたが、どうも進展は無かったようだ。道中は、そう言った話以外では関野が家に入ってから出来るだけ父親とは、注意して話す事、彼が心的に辛くなったら話はそこまでという話を話しながら、市田家の玄関までを歩いた。

玄関口まで到着して中へ招かれると、並んだスリッパと隣で二十代前半ほどの女性が挨拶をしてくれた。

「こんにちは。関野さんですね、弟から話しは聞いていると思いますが私は姉の千恵です。父は客間のほうに居るので、こちらへどうぞ」

「いえいえ、二人ともご丁寧な挨拶をわざわざありがとうございます。弟さんからはそれ以外も伺っていますので、本日はこちらこそ、よろしく願います」

関野がそういうと、姉はすつと立ち上がり軽く会釈をしてから左奥のドアへと歩き去っていった。弟の先導で花の活けられた玄関口からフローリングの廊下を通して、その奥の突き当たりのドアへと案内される。廊下にしても道中にしても何故か香草の香りがよくする家というのが市田家の第一印象だ。スリッパの音が扉の前で止ま

り、市田青年が扉を軽く叩いて父親に知らせる。

「どうさん、千ヶ原さんからの紹介の関野さんがいらっしゃったよ。いいかい」

閉じられた扉の向こう側でくぐもった肯定の声がして、向こう側で誰かが動く音が響いてからノブが下がった。

「ああ、いらっしゃい。千ヶ原君からの紹介だそうだね。ま、こちらに来てくれ。俊樹、お前は千恵と居間にいていてくれ。お茶は三十分ほどしてからでいいからな」

やつれた、頬がこけているのが始めてあった関野の目から分かるほど出会ったかつての記者は、疲労感を漂わせていた。白髪の混ざったぼぼグレーに近い頭髪はところどころではねていて、目は落ち窪んでいる。着ている服装は皺が寄っていないが、暮れ葉色のパンツと白地にチェックの入ったシャツを着た姿で、実年齢が四十代とは思えないほどに老け込んで見える。精神的な負担が体に表れるのは愛華でも見たが、これはそれを上回るほどだ。

「いいけど、父さんは大丈夫？ 無理になるなら止めて欲しいよ、まだ十分に回復したと姉さんもボクも思っていないんだから」

「俊樹、こちらへ来てくださった関野さんの前で失礼だろ。お前は姉さんのところへ行ってなさい。さ、早く」

促される形で青年は客間から去ると、市田氏は扉の横に立っていた関野にも腰掛けるように示した。

客間は穏やかな送風のクーラーが付いており、室内は涼しい。茶色の合皮製ソファーに浅く腰掛けると、ロマンスグレーに近い髪色

の彼はゆっくりとその前に腰を下ろした。

「はじめましてだね関野君。自己紹介からはじめようか、私は市田俊尋。元早駆新聞社で記者をやっていたよ、君の尋ねる事件に関わるまではね」

「初めまして市田さん。関野幸一です。早速で悪いとは思いますが、来地嵐峠についての事から、尋ねてもよろしいでしょうか？ 私も追っているのはその事についてもあるので」

関野がそういうと、乾いた微笑で市田は浅くうなずき返した。送風で揺れる髪がそれと相成って灰色の波も小さくうねった。

「そうですね。私も、貴方と同じ立場だった。社の違いはあっても、あの事件に関するところは謎だらけだったなあ。私のところでもそうだし、事件関係者の家族たちを当たっても進展の兆しはなかった」

そういうと、彼はゆるとうなずいた。数ヶ月前の事をかみ締める様に思い出しているようで、それが辛そうに見えて関野は具合を聞こうとすると、市田はそれが分かっているように手をかざして止めた。

「市田さん、あの」

「いいんですよ。三十分と、いったでしょう、あれは私が決めた時間です。恐らくもう一度なってしまうだろうという覚悟ですよ」

市田はさらりとそう言ってのけた。関野が来るのが決まってからそうと決めたのだろうか、くぼんだ目の彼の瞳は穏やかだが、これからの事に耐えるような震えを宿しているように見える。

「市田さん、折角よくなつたと聞いていますのに、どうしてまたそんな事を仰るのですか」

「ええ、来地嵐のことも話したい。でもね、あなたは彼女のところに行ったのでしょうか？」

笑顔と同じように乾いた声が関野に突き立った。来地嵐の事ではなくて、彼に話があると言いたい市田の言葉に少なからず、関野はまたすこし足を一歩進めた感覚を覚える。

「それは、どういうことですか？ 確かに行きましたが」

「いいんですよ。そうして順繰りに聞こうとしなくてもいい。私は気が狂ったわけじゃないと、貴方になら分かってもらえそうだと、私は思ったから話をしています」

市田氏はそういいながら、緩く目をつぶって浅く息を吐いた。そのさまは、続けるのが辛いのを分かっているも話したい、どうしても分かって欲しいという感情を関野にぶつけたでている。

「妻はね、私の言葉を信じてくれた。妻だけは。先に行ってしまったけれど、千代子だけは私が正気を失いきっていないと」

「市田さん……………」

「ねえ、関野さん。私はね、おそらくあんな目に遭うはずじゃなかったんですよ。千代子はいつもそう言ってくれた。私は、目が合ってしまったただけなんだと、それだけだからもう見えないって」

関野が話しかけようにも、市田氏は既に涙声になりながらこちらに耳を傾けていないように見えた。名前を口にしはいるけれども、目には涙がたまっていてこちらは滲んでしか見えないだろう。掛けていたメガネを取り熱くなった目頭を押さえて、亡くなった妻の名前を呟きながら、市田氏の宙に話しかける独白は続く。

「そう、私はね。おかしくなかなかったんだ。千ヶ原君にもそう言ったんだよ。君も気をつけないとって」

「気を、つける？」

「そう、気をつけないといけないんだ。さもないとね、さもないと私と同じところに踏み込んでしまうんだ」

時計がカチカチと音を響かせ、市田氏のひざもその音にあわせて小さく震えだす。踏み込んでしまう。そう言った市田氏に関野も体を硬くした。それは、まさかと思うことだから。

震えは収まらず、手にも表れだす。辛いだけでない、恐れのが感情が徐々に現れだしているのだ。

「ああ、そうだ、そうなんだよ。踏み入れちゃいけないんだ。昔見た本にそっくりで、逃げなくちゃいけないくって」

「逃げる？ 何から？」

「ああー。逃げないと、逃げないといけないんだよ。そこは居ちゃいけない！」

市田氏は唸るようにいいきってから、その目を大きく見開いた。落ち窪んだ瞳は大きく開かれた瞼の下で血走った目を関野に向けた。

見開いた瞳のまま、震えた市田氏は、ぶんぶんと大きく頭振って嫌々と駄々をこねる子供のようにも見える。話が出来なくなりそうな気配に、関野は大きく頭を振る、市田の腕を掴んで落ち着かせようと話しかけた。

「市田さん！ 市田さん落ち着いてください。ここはあの病室じゃない。私たちは現実に居るんです、怖くないところに居るんですよ」

そう言った、自分の言葉に思わず関野は掴んでいた手を離して口を押さえた。自分は、市田氏が同じことを言っていると、勝手に思い込んでいるにしか過ぎないのにあの事をもらしてしまったのだ。それを感じて自分にも震えが走り、関野は大きく自分の頬を張った。

「関野さん！ あ、ああ、大丈夫。まだ話しきってないのに。申し訳ない。だが、だが、ああ、貴方もやはり見てたんですね」

関野が何度と泣く自分の頬を張って、震えを止めようとしているそばで、市田氏は少ないながらも正気を取り戻した。まだ震えを押さえつつある関野よりも体を抱えて震えているが、その声に途中で囚われた狂気を振り払うようにして話を続けた。

「そう、今私のはっきりと聞いた。あなたも彼女の病室に行っていたのだと、そして、気もどうやら私と同じ目にあってしまったようだね」

「同じ目？ 一体何の事ですか」

頬がジンジンしてきてからやっと収まった関野は、市田氏は何を言いたいのかわかりかねていた。愛華の話ならば、初めて部屋に入ったのが自分だと、聞いているからだ。まさか、同じ目にあったと

いつている市田氏は彼女の部屋に入ったのだろうか？ 市田氏は、関野にやっと思つけたといわんばかりに大きな涙をこぼして訴えかけた。

「そうだとも、そうだとも。妻もここまでは判ってはいなかった。そう、わからなかったんだ。俺が現実でそういう目にあつたんだって分かつてくれなかったんだよ」

体を抱える様が愛華と同じだったのにも、大きく背筋をざわつかせながら関野は市田氏が話続けるままにさせる事にした。市田氏を支えるのに立ちっぱなしだったので、ソファーに座り直して話を聞く体制をとってやると、市田氏は喜色のままにしゃべり続けた。

「分かつていたんだ、きつと同じ人がでてくるはずだ、だからそのときにも私の、俺の話をきいてもらおうと。あの場所をみたのは俺だけのはず無かつたんだよ」

「あの場所？ それは、やっぱり」

「そうさ、あの病室内だよ。おれは、俺は気が狂つたかと思つたんだ。扉が空いてもいない病室がどうして見えるのかって」

何を言つたか、関野は理解できないが頷き返していた。自分と同じといつているこの男が体験したのは実は自分とは違ふという事がわかつて、その続きを聞くためにまた熱をもちだした彼の話を引き出すしかなかったのだ。

「俺は、俺はあの時早駆の記者として取材するつもりで、あの子の部屋を訪れたんだ。そしたら、廊下がまっかで、ああ。

遅かつたから夕焼けのときでな、もう面会時間も終わる頃だつたん

だ。そうなんだ、そうだったんだ」

「そうか、それで、部屋を見たのか」

「そうだ。急がなくちゃとおもって俺は部屋の前に立った。そのはずだったんだ」

そういうと、市田氏は体を抱えたまま震えを止めた。一拍の沈黙のあと、空気をかむように市田氏は声を絞り出してその先を続けます。

「な、そのはずだったのにな。俺の目の前にドアは無かった。あったのは、あったのはただっ広い空間と扉のところに立っている女。それから、それから化け物だ。化け物と女が話してたんだ」

「化け物だと？ 女は、愛華？ なんだよな」

「そうだろ、そうに決まっているじゃないか！ ああ、ああああ、俺は見たんだ、俺は見たんだよ。あの化け物が、昔童話で見たのにそっくりな鉤鼻で毛むくじゃらで横から牙が突き出した化け物を！ あいつはな、それだけじゃないんだ。お前も見ただろ、あいつな、あいつは俺の目を見て笑ったんだ！！」

そう言い放った市田氏は話しきったのだろう、荒く息をしながら関野へ同意の目を向けて押し黙った。だが、何も言わない関野を見ると彼は部屋の上を見上げるように何処かへと視線を変えて、聞き取れない何事かをぶつぶつと言いながら爪を噛んだ。

其の目からは狂ったというよりは、妄信したひたすらな思いが別の世界を見せているようでもあった。

けれども、その目を関野は見えていなかった。

思い当たっていた事が、あまりにも違いすぎていただけじゃない。嫌な勘が大きく鐘を鳴らして響き渡り、市田氏が見た事と自分が体験した事を結びつけるのをやめさせようとしている。頭が痛み出し、そうはなるまいと必死に抑えた心臓が張り裂けそうだ。座っていたソファの斜め前に置かれていた飲み物を一気に飲み干して、引き連れてしまっている心臓に潤いを与えようとした。

「市田、さん。その、愛華さんはその化け物と話していましたか？」

早鐘の鼓動が口から飛び出てきそうだった。出した言葉に、市田氏は軽く首をひねって思い出すと関野が知りたくは無いことを言い出した。

「話しては、いたと思う。あいつと話していた。音は聞こえなかった。あんな事、音がまるで無かったんだ。でも俺は見た。アイツ化け物と親しそうに話してたんだ」

「じゃあ、部屋は？ 部屋はどうだったんだ？」

言うたびに傾いていく確信の天秤は真実に傾いているはずなのに、その皿の下で虚構の現実が舌をさらして皿ごと飲み込んでしまおうとしている。部屋の空気が冷ややかなのに淀んでいるのを感じて、関野は咳き込んだ。吸い込んだ空気がここでも愛華の部屋と同じ異質な気がする。

「部屋？ だから何度も言っているじゃないか。俺は見たんだ。あいつらが話しているのを、楽しそうに笑っているのを。そして、そ

して、ああ。俺は俺は」

中空に向いていた市田氏の顔はこちらへと大きく向きなおり、其の瞳を開ききるようにぐっと両の目を開ききった。そうして、ひどく真面目な眼差しと大きく裂かれたように笑う口元という、感情が剥落しかかったような顔で、市田氏は其のあとの言葉を続けた。

「俺は、聞こえたんだ。彼女と其の化け物の声が」

「なんだと?!」

聞こえていなかったといった泣きそうな市田氏は、先ほどの顔のまままで驚炉いた関野へ更に言葉を織り出していった。

「そうだ。話したんだよ。女は、俺は早かった。早かったんだと言った。化け物は、なあ、日本語をしゃべったんだ」

「……」

「ええ、驚かされたさ。あの化け物も日本語をしゃべりやがった。そして、俺を見ていった『まあだ。まあだのヒトだね』と。あは、はははは。おれはまあだまあだだと。女に言ったんだ。女はそんな俺に向かってこようとした、だから、俺は逃げたんだよ」

市田氏は笑っていた口元が閉ざされていくのと同じように、だんだんと小さくなりながら言葉を切った。あとに残った表情はまるで話し終わったテープレコーダーが止まったような空虚さを孕んでいるばかりだ。

客間のガラスの引き戸の向こう側からバイクが通り過ぎる音が聞

こえてきて、部屋の空気にも振動を伝えていく。開かれたまま無表情でいる位市田氏、そして口元を押さえつつ何も言えずに座り込んでいる関野の両名は、どちらも一言も発さずに通り過ぎた余韻がなくなっても動けない。

お互いが言葉の出ない空間で、どちらともが言葉を発さずにいた状態を変えたのは関野のこぼした囁きに近い無意識の発言だった。

「なんで、おれが彼女とはなすことになったんだ」

沈黙していた市田氏は呟いた関野の言葉に肩が上がる。そうすると、最初は小さく徐々に大きく彼はその首を振り出して関野を身ながら言った。

「はなすこと？ はなすことになった？ 扉の向こう側の化け物を見たんじゃないかって、女と話すことになった？ 嘘だ、そんなのまやかして冗談で信じられない。そんはず無いんだ。あっち側で話なんか出来無いのにどうして」

首を振り続けながら言い放った市田氏に、関野はあふれ出して収拾が付かない思考に言葉を只続ける。それは市田氏が体験している事とは似ているが非なる事実。彼が今尚悩まされ、憶測が飛び交うばかりの現実だ。

「おれは、彼女が開けてくれ病室に入り、そして、あんたが見たのと同じ世界を体験している。何度もだそして、其の女とやらと話している」

「やめろ！ お前は嘘を言っている。あんな世界に何度も足を踏み入れられるわけが無い！ 話だって出来るはずが無い！ 嘘だ！

大うそつきだ！」

放心しかかった関野の肩を強く市田氏はつかみ、大きく揺さぶりながら『嘘だ』と言う言葉を繰り返した。揺さぶられるままに関野は掴まれた肩が痛もうが、頭がそれに合わせて大きく揺さぶられようが市田氏の思うままにさせていた。

声がだんだん大きくなり、市田氏の掴んでいる手の力も大きくなってきた時、大きくドアが開かれて、市田氏の息子と其の娘が必死の形相で飛び込んできた。

「父さん！　しっかりしてくれよ、治ったんじゃないのかよ！　ねえさん俺が押さえるからその手を離させてくれ」

「お父さんたら、やめて、やめてってば、お客様を放してあげて！　いたっ。やめてったら」

俊樹が掴みかかって離そうとしない市田氏の両腕を後ろから羽交い絞めになると、つかみ掛かっていた手を外すために千恵がその指を外しにかかった。二人がかりで外そうと必死になるが、市田氏はそんな事にも構いもせずに嘘をつくなど関野をのしり、指を外そうとした娘の腕を引っかけて更に関野へ掴みかかろうとする。

やっとの事で二人を引き離せたがその距離は小さく、何時また関野に父親が襲い掛かってもおかしくなかった。大きく暴れる父親を必死に止める俊樹君は動かない関野を見る余裕もなく、千恵さんも引っかかれて赤筋のついた手で関野に触れて声をかけるが、関野はその場にぐず折れた。

「ねえさん。頼む、早くその人を移動させてくれ。長くは俺だって

捕まえてられない。家から出て行ってもらってくれ」

「嘘つきめ！ あんな空間に耐えられる人間なんている訳が無いんだ。なのに話しただと、入って同じ空間を共有しただと！ うそつきのうえにお前はおかしいやつだ！」

重なって聞こえた二人の声に、くず折れた関野の肩を支えて立たせると、千恵は下を向いたままの関野を覗き込むように話しかけて、その場から連れ出そうと支えたまま歩き出そうとした。

「関野さん、関野さん。父が再発してしまった以上もうお話は出来ません。早く家の外に出てください」

だが、そう話しかけて動かそうとした千恵から関野は腕を手で押しやって体をどかさせると、まだ暴れている市田氏のほうへとふらつきながらも寄っていった。それに気づいた俊樹は何をするのかと、客である事も忘れてののしった。

「やめろよ、お前のせいで親父はまたおかしくなったんだ。話をさせるなんて出来るはずがなかったのに、お前がこんな事にさせたんだ！」

そう言われても関野は、顔を下に向けたままで誰の顔も見えていなかった。まだ暴れる市田氏は其の様子に更に暴れようとして、大きく首を振って息子の腕から逃れようとした。

「あんたが、俺とは違う形で彼女と接した事が分かった」

顔を上げないまま関野はそう言って、動き続ける市田氏の前にまで来た。様子のおかしい事に気づいた千恵がそれを止めに入ろうと

体で間を割って大きく手を広げて止める。足元しか見えてないだろうそれに、関野はゆっくりと頭を上げていきながら言った。

「迷惑を、かけました。だがおれは、貴方が逃げ出したところの先を知る事が出来そうだ。そういうことを教えてくれた事を、俺は感謝する」

「なんだと？ うそつきめ」

もはや嘘つきとだけ執拗に繰り返すばかりだった市田氏の顔に疑問が宿った。言葉尻が関野の言った事を理解しようとしてすばんできき、固められた姿勢のままで力を込めていた四肢がだらりと垂れる。

急に力が抜けた父とののしった男とのわけの分からない会話に、姉とともに疑問附を浮かべながらも、俊樹は睨みつけるのを止めずにもう一度対峙した両者の距離を開けようとした。足元のカーペットに跡をつけながら引きずられる市田氏に、関野は更に言葉を続ける。

「嘘はついてない。だが、確かめていない事がある。知りもしなかった事も、そして、これから知りたくも無い事も知る羽目になる」

顔を上げきった関野が言った中身は、またもうひとつ、男が深みに足を踏み入れた事を指し示していた。関野は、市田氏が言っていた言葉の化け物が、御伽噺のような怪物の正体がシュウラだと思っていた。誰もを入れなかった愛華が何故市田氏に扉をすかして自分の部屋を見せることが出来たのか？

どうして市田氏には話し声が最初には聞こえなかったのか？ ま

たあらたに噴出してきた謎は、そのどれもが真実の形を、常軌を逸して実を結ばせているに違いない。

そして其の根には、この事故もそして自分を巻き込んだ世界についても、何故事故が起こったのか、そうして市田氏にも見えた彼女の夢の狭間があるのか、シュウラが実在するのかどうか。それらをもつれ合うようにして核となっているのだろうか。

息子に別室へと引きずられるままになっていた市田氏は、仮面をかぶったような表情のまままで関野へと最後となりうる言葉を返した。扉が閉まる間際まで、彼はこう言ったのだ。

「お前は何処に行く気だ。あいつらは人じゃないのに、人じゃないあいつらのところへ言って待っているのは何なのか知りたいだけで」

最後の言葉は、息子が片手で閉めたドアの音でかき消され続くように、大きな鍵が閉まる音がした。

市田氏空の話し合いを強制的に終わらせられた後に、関野自身も追い出されるように玄関口まで押されていた。押していった千恵の目には大粒の涙がたまり、鼻声になりながらも出て行って欲しいと言う旨の事ばかりを関野へ言っていた。

玄関口までつれてこられると、其の後ろから父親をどこか別の部屋へと連れて行った俊樹が戻ってきていた。其の表情は姉よりも疲れきった顔で、最初に会ったあの穏やかさはもう、向けられる事も無いのだろう。

「貴方を迎えるべきじゃなかった。僕も、ねえさんも父さんをおん

なにする人だと知っていれば、この家へ歓迎はしなかったんだ」

「言わなくても分かっていたかもしれませんが、我が家には二度というらしいでください。父のご友人である千ヶ原さんにもお伝えください」

姉弟はそれぞれで関野に対して言うのと、玄関口で出て行くのを見届ける為にそこへ立って関野を見続けた。

「失礼しました。今後は一切こちらには来ません。ですが、千ヶ原は俺とは別だ。それだけは」

「いいえ、もう父は今後新聞記者の知り合いとの接触を一切避けるべきなんです！ 千ヶ原さんだろうが編集長だろうが私たちは、昔の父さんを取り戻すためなら誰であろうと追い出します。とっとと出て行ってください！」

関野がそれ以上何かを言う前にと、大きく玄関の扉が閉められて、隣の窓から俊樹が何かを抱えて玄関へ向かって撒き散らし始める。其の白い粒が当たり玄関口が白く染まるまでそれは撒き散らされた。

大盤振る舞いに撒き散らされた塩が上着に掛かったが、それを気にもせず、関野は塚本につけられた傷が痛むのも構わずに車に向かって走っていった。

市田家での混乱は、自分が思っていたよりもずっと短い一時間程度の事だった。だが、其の一時間が関野には一番確信へと近づける時間を得られた事に変わりは無い。

踏み込んだ足は既に向かうべくして、階段を下りだしている。愛

華の話していた事件の事実を、そして彼女がついたであろう嘘を暴く為に、関野は彼女が話が出来ようになる状態になるのを待った。けとなった。

夕闇はそんな彼を覆い隠すほどに、深く深く色を増していくのだった。

そして同刻、何処とは言い切れぬ同じ闇の空間で、一人の少年が座りながら片手に持った燭台に上へ上へと伸びようとする炎を、ちかづけてみていた。それは以前シュウラが見ていた火と同じなのだろうか？ ささげる燭台の形は一緒だったが、火の勢いはすこし衰えながらも、その熱が高いのか、ほの白い明るさで燃えている。そして、片側の腕にはそれよりも激しく燃え盛る白い炎があった。

「ふふふ、思ったよりもいいテンポだ。彼女も学習したのかな？ だが」

一人でそう呟いた少年は、やはりシュウラだった。以前にもまして其の笑みが確かなもに変わり、火を見つめる目も渴望するようだ。彼はまだ白くなりきっていない炎を見つめつつ、思っていたよりも早い時の到来に密かに歓喜した。

「ねえ。アイ、私の愛しい鍵人どの、君はまだ僕にすがろうとしているのかい？ そう、僕が言った言葉を信じて」

消えない炎がゆらゆらとお互いを励ましあうように燃える様を、見つめるシュウラは其の片方の赤みを残した炎に手をかざしてみた。

炎は、其の手の動きにかすかに揺らいだかと思うと小さ区丸い形を取ったように見え、またすぐに炎の型を取り直した。闇にひとつ、ふたつと灯された燭台の火のほかに、上空にもいくつもの火が赤々とこちらへ向かって其の輝きを放っていた。

Key3 紐鎖の岐路 遇路（後書き）

最終章は、開門ではなく今回はグウロ（遇路）とさせていただきます。
さあ、この終わりの意味するところは？

次章で第四章、夢刻の理門を書きこの物語の第一巻分を終結させる
予定です。

Key 4 終章 夢刻の奏門 1

小さな水滴の落ちる音までが耳に痛い。愛華はそう思いながら薄目を開けて自分の腕に刺さっている点滴の針を見つめていた。精神安定剤の以前より一段階強い薬は、自分の中にある意識を朦朧とさせる。今はもう消灯してしまった夜で、傍には寝ずの番をする人はいないまでも、薬のおかげで立てない状態では起き上がる事さえ困難だった。

「は、あ。」

息をして言葉を出そうとして出るのは乾いた喉の音と眠りを含んだ空気ばかりだ。助けた結果どうなるのか分かっていたさ、そう、わかっていたのにね。

愛華はふらつく状態で、反対側の手をベッドの手すりにつけてゆっくり半身を持ち上げていき、緩慢な動作ながらも其の力の入らない体を上半身だけ起こす事に成功した。

起き上がって窓から入る公園の電灯の明かりが、カーテンの隙間から外で輝いているのが分かった。ベッドの対角上で座っている見張りがいないのを確認して、其の状態から意識を落とす為にゆっくりと自分の外を閉じていった。

とろとろとまどろんでいる愛華はいつでも眠れる状態だった、実際薬は利きすぎるくらいで、彼女がこの体制で起き上がるのも必死の事だったのだ。無理して起きる必要はない。だが、あの世界に入るときに横になっただけは避けたかった。

愛華が意識を手放したのは、そう思ってからすぐだった。瞳が閉じて背中に柔らかな布団の感触を感じてすぐ、彼女は別のところで目を覚ました。

それは、眠りに入る直前の感覚を持ったまま、光を感じて目覚めるのに等しいまさしく、連眠の状態だった。

目覚めた先に誰かがいると言う以外は。

関野とともに入り込んだ夢の病室ではなく、愛華はまったく異なる空間に一人立っていた。それはあの話に出てきていた庭園、シェウラが作り出した庭だった。周囲は霧深く視界は白い靄ばかりだ。ざわざわと足元に生えそろうているのは柔らかな緑のコケの絨毯、今回はどうも日本庭園よりだが現実世界ではあまりお目にかかれないう庭のようだった。

裸足のまま踏み出すと、自分の予想通りで何とも言いがたい。コケだと思っていた一面緑の植物は一つ一つに粒が付いたきのこのような物体だった。弾力はきのこよりもあるし、柔軟性も優れているが、長くは足に感じていたくない代物だ。

足跡が付くたびに、小さなつぶれる音がしてそうして緑のきのこ達がつぶれた跡には真っ青な液体が残る。おまけに暖かいのもいやだ。

踏みつけながら進むとそこ此処から風船から空気の抜けるような音が響く。靄を吐き出す何かがいるらしい、時折それが吐く音が低く響いている。

白い視界に目が慣れてくれば、徐々にそこがどういうところなのか分かる。周囲には低い灌木たちが並び、横で這うように根を絡

ませあいながら、頂点の光を受けようと其の葉を樹上へと向けて青々とさせている。コケキノコ絨毯は、そんな灌木たち体にところ構わず生えて、あたり一面が白と緑、ところにより青と言った景色だ。足跡を残しながら歩いた先で立ち止まると、切り株がコケキノコとは別の何かに覆われて薄茶色の毛を生やしている。愛華はやつとみつけた椅子に座ると、周囲に生い茂る灌木と木々を見渡しながらシユウラを探した。

「随分とあの時の夢がお気に入りなのね。数ヶ月前だったかしら？ このキノコはたしか、宮殿入りしたときに見たのと同じだったと思うけど」

声が反響して木々の合間をかけていくところは、幽谷といったところだろう。響いた声に返す声は、やはり同じように響いていた。

「やあ、いらっしやい。君からこちらへ来るなんて珍しい事だ。それとも、僕との約束が果たせる目処でも立ったのかな？」

灌木のあいまで大きくそびえ立つ大樹、その上から声は聞こえたようだ。切り株に愛華が座ったままで返答を返さずにいると、切り株が大きく揺れた。ごそごそと根を器用に使って歩く様などまるで蜘蛛が足を動かしているようだ。

愛華を乗せたままの其の切り株は背もたれのような大きな突起をはやすと、大樹に根を突き刺してゆっくりと登っていく。乗せられて揺られる愛華は、もはや慣れた様子で切り株には目もくれずに頂上で待っているであろうシユウラに向かって声を飛ばした。

「約束ね、目処も何もあとひとつよ。私が関門の話をしきったら、彼にはあの事件の真相を話すと告げているもの。でも、それが何を

意味するかまではまだ教えるつもりは無いのだけれどね」

声が飛べば、もうそこそこの高さに昇った切り株が其の声に驚いたように時折足を止める。そして、ゆっくりとその足を上へ上へとむかわせていく。そうしていくうちに、切り株の根先はまるで爪が生えた手のように徐々に複数の根を大樹に食い込ませていき、それはより合わさって固まっていった。

そんな変化にも、愛華は気にする事も無くシュウラとの樹上に続くまでの会話を始めた。

「そこは、君に任せているからな。なんせ僕は今回の一件での手助けはしないつもりだったからね。無論、君が危機に晒されるとき以外はだ」

「そういうだけなら紳士よね。あなたも。だけどね、どれだけ時間が経っても忘れられるわけが無いでしょう」

「おお、怖い。だけど君と交わした約束についての契約の条件、あれを満たすには些か条件が不利だと僕は思うがね」

会話の中に度々でてくる約束の二文字、愛華はそれを思い出して組んでいた腕組みをきつくした。自分の下で背もたれ付きの切り株は更に変形して、今では籠つきの切り株、いや籠をしまった手足の長い生き物になっている。乗り主の沈黙に切り株の蝶の触覚が上下に揺れてこちらを確認している。

「このまま登っていいんだ。気にするところじゃないさ」

切り株に優しく話しかけてやると、切り株はそれならと、大きな腕を強く木に打ち込んで登るスピードを速めた。頂上にいる自分の

主を目指す為に。不利だと言ったシュウラの言葉は正しい。だが、愛華はそれに落ち着いた声音で答えた。

「条件を満たすのが不利？ そんな賭けなのは、はなから承知済みよ。さも無きゃこんな賭けなんて臨んでないわ」

昇るスピードの上がった生けるエレベーターは光が強くなる方向へと枝を避けつつどんどんと昇っていく。愛華がちらちらとエレベーターの外の景色を覗けば、九十度傾いた世界で霧を吹き散らす果実が見えた。

もう、灌木が下で黒くたごまった毛糸くずのように見えているのも何ともいえない光景だ。第一灌木かどうかも実のところ怪しい代物で、触るとほんのりと暖かかったのを思い出して揺れる籠の切り株に同じように目線をめぐらせれば、もはや切り株ではなくなっていた。

根だった腕は茶色の柔らかな毛をまとった腕に、籠の部分は木のままだがその下には何かの動物のたてがみが生えだしていた。切り株の上を向く側に出来た小さい頭はとがった耳が突き出している。

「迎えの来させ方にも随分と面白みが出てきたじゃない？ シュウラ。今までは歩いたりなんだりしたのに比べれば随分と上等よ」

「なに、君があそこまであの男をひきつけた事に対する賛辞のようなものさ。だが、約束を果たすにはまだ足りてない。それを話すため、に、来たわけじゃなさそうだな。現実世界でも弱っているのは分かったがこちら側に来ない眠り方を続けていたな」

籠に揺られているうちに、気づけば大きく張り出した枝の一本に

かごは止まっていた。下から息とともに獣が喉を震わせる音がして、降りろとかごの扉が開いた。

枝の付け根からすこしはなれたところ、どうやったのかあの喫茶店は其の枝の上に建っており、シュウラはこれまたどうやって持ってきたのかおなじウッドデッキの上で何かを飲んでいる。こちらを見る格好にもやはり卒が無い。

「ええ、こちら側にこれられない眠り方をさせられていたからね。安定剤の強力なのを飲んでいてこちら側に意識を集中するどころか、散らす羽目になっていたのよ」

箆を振り返ることなく愛華は裸足のままで歩いていき、背後で箆を背負った獣は大きく伸びをすると、大きく尾を振るって彼らには興味が無いように、大きな毛玉の塊になって動かなくなった。

シュウラは緑茶にしては刺激臭がある飲み物をついで愛華の前に差し出し、あの時と同じだがすこしだけ手すりが丸くなりつやが出た椅子を引いて彼女を向かえた。

「だからか、現実世界で何があったか聞かせてもらいたいことだ。とはいっても君とあの男が何をやったのかぐらいかは想像が付いているがね」

注いだお茶には興味を示さない愛華に、やれやれと肩をすくめて見せると彼は自分が愛用している椅子に戻った。枝の上で開かれている茶会は、樹上からみる広大な森林の海を背景にして雄大なその息吹を直に感じられる。

何もいないわけではないその息吹は、途中の枝でみたあの果実が

吐き出す花粉や、灌木から立ち上ってくる水と落ち葉を混ぜながら立ち上る森の匂いだろう。静かに流れる水の音に、木霊する何かの嘶き（いななき）はここが何処だったのかを愛華に思い出させていた。干渉に浸っているつもりではなかったのに、引き込まれていた愛華は、氣付とばかりにシュウラの不気味なお茶を飲み下すと、顔をしかめていった。

「うっわ、すっぱ辛い。この夢のお茶はこんな味じゃなかったはずよ？ おまけに後味はえぐいし。ああ、こん名ことはなしたいのじゃないのよ。想像が付いているって言うの、貴方が。想像が付いているなんて白々しい台詞を」

口元を押さえながら話す愛華に、見向きもしないでお茶の御代わりを飲み下すシュウラは、愛華が言ったような味など感じていないように平然としていた。そうして、細く目を開けると、茶器を置かず愛華との話に戻った。

「景色はこっちのが私は好きなんだ。だからこの景色を使わせてもらっている。もっとも、君が好んでいるザナイ地帯の景色も僕は嫌いじゃないがね」

「そんなことを話すつもりで来たんじゃないでしょう、話をそらしながら会話するのには慣れているけどね、こっちにいられる時間を長くしてられないのよ、今日は特に」

愛華がそう言って茶器をシュウラに付き返すと、彼はそれにもまた先ほどのお茶を注ぎ返した。返すつもりで渡された茶器に愛華の口元が下がる。注ぎ返された茶器にたまったお茶とシュウラの顔を見比べて、取っ手を握り締めると、まだ湯気の立つそれをシュウラめがけて投げつけた。

「おっと、本当に切羽詰っているね。お茶を飲む時間さえ惜しいか」

「いっているでしょ、約束を果たそうだけど、そっちはどうなのかって事よ。私ばかりが果たそうとしてそっちが何も、じゃねえ。話にならないじゃない」

まだ湯気立つお茶がシュウラに掛かったが、掛かったはずのお茶はシュウラを避けてとびちり、掛かった大樹の枝を深い青に染めた。飛んでいった器は彼にぶつかったが、音とは裏腹に痛そうでも無ければ切れた様子も無い。茶器が欠片を散らして霧散してしまい、後にはお茶が飛び散ったしみが残るだけだ。

ことが終わったのを見計らうと、懷をまさぐって飛び散った茶器を焦る様子も無く懷から取り出してまた注ぎ直すシュウラの周到さは、愛華の眉間に刻まれた皺を深くする。

Key 4 終章 夢刻の奏門 2

その様子に、シュウラはいささかやりすぎたかと言った様子で、彼女の話を答えた。

「果たせる約束なら、僕は必ず約束を守ると何度も言っているだろうに。出なければ君がここにいる理由も無い。いや、それは違うか、どうあっても君はここにいなければならぬ。そうじゃないか？」

「それには答えたくないわね。またこの前のように私のことを怒らせたいならはっきりと言えばいいじゃない」

他愛ないやり取りが、急速に氷点下へと向かった。愛華の眼光が鋭くなりシュウラに対する口調へ明確な敵意が向けられる。周りではざわついていた森の生き物たちさえ黙らせるその怒りに丸くなっていた切り株がその気配を察して少しずつ枝元に向かってその場を離れようと動いていった。

「怒らせることはもうしたのを自覚している。でも、君もそうだが、結構僕らは論点がずれるね。聞きたいことと時間はどちらも足りないと言っているに」

そういわれて、愛華はハッとすると机の上に出されていたシュウラが作り直したお茶をまたぐつと飲み下して、冷静になろうとした。先ほどよりも濃いその味にぐつと喉が詰まり、咳き込みそうになるのを押さえる。鼻に抜ける酸味に目元を潤ませて、噴出していた怒りをその勢いで散らせて元の話へと軌道修正をした。

「……っつ。こちらこそ悪かったわね。だったら手早く話をするわ。

率直に聞けば後どのくらいなの？ 私はそれが知りたいのよ」

「なるほど、目標を置いておきたいのか。ならいいさ。実のところ、いいところまで来ているかね。目標の数値までは仮では届きそうだが、それを届かせるための一手をどう君が積ませるかが見もの、というところだ。色は変わり、時も変わり、そして君も変わる。それは全てに等しくね」

そういうシュウは片手を軽く握り離すと、一本の燭台を出現させた。その二つのろうそくの上にとる火は片方が今は大きく大きく緑色の炎を輝かせてその内側にちいさく濃い緑の核をもっているようだ。その左にある炎も、輝いているがこちらはまだその緑よりも赤を帯びていて、緑に染まっているのに赤だけは変わらないようにその中心の炎はまだ赤みを残していた。

「それが、昔はなしていた奴？ 目に見えるって言うのは何ともいえないけど！」

そういう様、愛華はその燭台に向かって手を伸ばす。だが、シュウが笑いながら愛華の手を避けると、それを上へと投げてしまったため届かない。燭台は宙を二回転ほどすると、虚空にある枝に掛かったように片方の腕を傾けて止まった。

「だめだね、触らせられない。というより、触ってしまったては君の約束が反故になる。ついでに、あれに触ったところで変わるわけがない、あれは指標にしか過ぎないものだ。君がどちらを選んでも、約束を果たす事を優先にするべきだと僕は思うね」

遠く上がってしまった燭台へと無念そうに腕を伸ばす愛華は諦め切れないようにその腕を上げたままにしていた。上に放り投げた手

のままでシュウラはそう言ったあと、伸ばされたままの愛華の手に触れた。

燭台を見ていた愛華の腕が大きく震えて途端に今まで現れていなかった草の文様が引きずり出されるようにその腕を覆いつくした。腕を戻そうとして大きく引っ張ったが、先ほどまで自由だった腕は上空にある燭台同様、目に見えない何かで固定されて袖で隠していた腕はシュウラの手によってまくられて、そこにいくつも絡み合う蔓と葉を見せた。

そして、その腕の中心の内側。緑の色で描かれながらも周囲の蔦草と違う模様が大きく腕に浮かんでいた。それは何枚も重ねられた花卉を思わせる文様で、愛華が初めてシュウラと会ったときよりもその花びらを増やしていて、そこに刻まれる文様も多様さを増している。

鮮やかであり複雑に絡み合ったその花に、シュウラは感嘆の声をあげ、大きく溜息をついた。

「昨今の君はどうしてこれを隠すかは知らないが、ああ、一段とまた文様を刻んだようだね。前回からたしか現実世界でも結構な時が流れただろうに」

「はなせ！ お前に見られるために腕を伸ばしたつもりじゃないんだ。とっとこの腕を開放しろ」

文様に見とれるシュウラへそう怒鳴り散らすと、残念そうにシュウラは鳥肌の立っている愛華の腕をはなして、袖を元通りにしてやる。腕が元通りになると、引っ張っていた力が抜けて後ろへのけぞったのはほぼ同時。無くなった力の分だけ引いていた愛華は背中

から後ろに倒れこむと、背中を痛めながらもシュウラへと言い募る。

「いきなり離すな。気持ち悪がっているヒトの腕を急に離せばこうなるのだって分かっているでしょ。おまけにこれは見世物じゃない、どうなっているともうすぐ関係がなくなる代物にじゃない」

「たえそうだとしても、見ていたい気持ちにさせるだろう。君がそれを作ったんだ、それを作るのは君で、結局のところ僕じゃない。きっかけは与えたけどね。ああ、でももしそうなら名残惜しい事この上ないね、折角此処まで美しくなったのに」

シュウラはそういいながら、至極残念と言わんばかりに宙で腕を撫でるそぶりを見せる。ほんのりと頬が赤くなっている気がして、それが更に気色悪くて後ずさりながら愛華はシュウラから引き下がった。

「美しかろうがなんだろうが関係ない。聞きたいことは聞けたし、これ以上いる必要もないから帰るわ」

「本当に現実世界は忙しそうだ。もう少しぐらいこちらにいたっていいだろう？ そろそろ滞在を長くしないと君との間にひずみが出ると思うんだが」

「そのひずみ、どうなるのかその目で確かめて頂戴。私はそのひずみさえ無くして見せるのだから」

そう言い切ったが、まだ未練が残るようにシュウラは愛華の腕を見つめ続けている。

その様子にまだ輝いている腕ごと半身を傾けると、愛華は大きく舌を突き出して、くるりと後ろを向いてひらひらと反対の手を降った。

「そろそろ向こうに戻るわよ。あれとの決着をどうするのか大体の話は決まってるんだからね」

「思い通りになるといいけど、まあ、どちらにしても僕は楽しみがあるから歓迎はしておこうかな」

双方が顔を見ずに笑いどちらもが手を振った。シュウラは愛華が行くの見届ける前にそのままずっと立ち上がると、喫茶店の隣にあるウロ型の扉を開いて、その中に足音軽く消えていった。

その音を耳にしながら愛華は店が建っている枝の上を端へと向かってあるいていくと、その丸みが下へ向かうところまで来てもう、毛糸の塊と噴出してけむる白いもやをみつめるとそのまま、両足で前に向かってジャンプした。

体は重力のままに頭からはるか下の灌木に向かって落下していく。耳の傍で風を切る音が痛いくらいに響いて、加速していく速度に顔に当たる森の空気が冷たく冷える。

落下していく先に見える黒い灌木たちがはつきりと見え出して、まもなく地面にぶち当たるところで、愛華の目の前で灌木たちが場所を空けるかのように動いたのが分かり、そのまま地面へともぐる。それは粘度の高い液体の中へと飛び込んだようで、加速していたからだが急速に止まるのがわかるほどだった。

そうして、ゼリー状の地面の中で愛華は大きく息を吸い込むと瞼に力を込めるようにしてその瞳を閉じ、ゆっくりと体を丸めると土に抱かれるようにその体の色を薄くして、土に溶けていった。

愛華がそうして落ち込んだ地面の上で、灌木たちはわらわらと開

いた場所へ同じように枝をめぐらせると、何事も無かったかのように叉森はヒトではないものたちと、霧を噴出す植物の音をひびかせていくのだった。

愛華が目覚めたのは、土と溶け合ってからすぐの事だった。はじめに聞いたのは時計の音、そして開けた目から写る点滴の管と葉のせいで気持ち悪くなっている自分の胃袋だ。夢の中から冷めた自分の体は、眠っているときよりも倍に動かしづらくなっていた。眠ったあとで体が傾いて、右側ぎりぎりに頭が落ちかけていたらしく、首が寝違えたような鋭い痛みを感じた。

「やっぱり、ね。寝て起きてからがこんなにも最悪なもの。長居なんて出来ないわよ」

口の中で張り付いた舌をもどかしく動かして、息と一緒に寝起きの第一声がでてきた。喉の奥がひりついて言葉も上手く出せないが、それでも、こちら側に戻って来られた事の確認で声を出す。まだ目の前の焦点が合わずにぶれていて、暗い夜の闇がまだあることから夜だという事しか分からない。

何度かばちばちと瞬きをして目をしっかりと開けば、時計が指しているのは午前二時過ぎだ。視界が横で見ずらかったが、時計の針を確認して傾いた体を起こすと、右腕に鈍痛とつめたい液体が伝っているのを感じた。

「あら？」

おかしいと思い自分の腕を見ると、倒れた拍子に点滴針が抜けてしまったのだろう、抜けたところで布団が点滴で濡れて自分の腕からも血がまだこぼれている。

起きたら薄赤に染まった布団に寝ているなんて現実までもが、夢の

ようだ。それも、飛び切りの悪夢の。

「血が止まってないし、これ一人で何とかできないわね」

そう言いながら、愛華は自分の腕からこぼれている赤をじつとみていた。こぼれて時間が経ったところは固まっていた、もう赤錆の色に変わっているのだろう。闇が濃くなければ、もっとはっきりと見えただろうにと、その錆をこすればあっけなくそれは布団にばらばらと落ちた。

付いた粉を指ではらって、まだ出ているところに触れば、自分の熱が分かる。

脈打つたびに熱があふれて、いつもよりもずっと現実である事を覚えた。

「関野だったらなんていうかしらね、こんな様になってたら」

ぶっきらぼうだが、いじりがいのあるあの男の顔を思い出して、愛華ははじめは小さく笑っていたが笑いはすぐに消え、浅く唇をかんであふれ出している血を見るその姿には、いつもよりも悲しげに座る少女がいるばかりだった。

「わかって、くれはしないでしょね」

出た言葉にはより深い、ないまぜになった寒寒しい色合いが滲んでいるようだった。

みても止まりそうもない血に、愛華はベッドの左横につけられているナースコールを押すと続く足音に耳を済ませ、起きた先の手をどうしようかと、ぼんやりと考えるのだった。

Key 4 終章 夢刻の奏門3

その出来事は、愛華が思っていたよりもよい状況を運んできた。

「君には強い薬を投与しすぎたようだね。すまなかった」

「別に、気にはしていませんから。だってそういうことになるのを知っていてああした行動を取っただけですもの、そして薬が強くなるのも分かっていました」

薬液での失血があつてから慌しく病室を看護婦が訪れて、患者が又管を抜いたの何だのと騒ぎ出したのも、どうでもいいことだった。主治医である医者が駆けつけてきて騒ぐ看護婦の隣で薬液が抜けたあとの愛華の傷跡と濡れた髪、そして顔についた薄い血の色を見て手当てを優先させてくれたおかげで愛華の点滴が故意ではなく、眠っている間に起こった事だと判断されたのは運がよかった。実際、眠りについていたわけだからそれ以上追求されはしなかったのだ。

看護婦はまだ何か言いたげであつたが、愛華がナースコールを押したのは事実だし、乾ききっていない血が付くボタンを見てしまつては助けを求めたようにしか見えない。

過去に逃亡を図ろうとしたり、常軌を逸した言動をした患者ではあつたが死のうとした事はなかったもので、昨晚の点滴が外れたせいで貧血を起こしたから意識が朦朧としたのだと言う話に昨晚彼女が寝静まってから決まったらしい。

それを朝食後の回診に聞かされているのが今である。

「そのことも、聞いたが。君は何でああいった行動を取ったのかな

？ 出来れば教えてもらいたい。最近になってようやく君の感情の昂ぶりも押さえられてきて、人と長い間はなす事もできるようになってきた。どうしてかな」

担当医はその白衣につけていたボールペンを取ると、愛華にそう穏やかに尋ねた。片手にあるカルテには速記で何やらが記されており見ても読めない。愛華はおきてからもまだ残る薬の効果のせいでだるいまま背もたれに埋もれて医者を見ている。

その顔をみながら枯れた声で医者に顔だけむけて言った。

「単純よ、外で音がしたうえに、私に良くしてくれている見舞いのお客に暴力をふるったから。あとは、すこしは今いる場所から出たと思ったから」

「なるほどなるほど、君は治る事に対していい方向に向かっているんだね。よかったよかった。なら、また面会できるようにしておこうか？」

医者が発言はどろどろとした愛華の脳内でもはっきりと形になるほどに嬉しい言葉だった。すこし見開いた目に、医者はいいい反応だと大きく頷くと愛華にこやかに話を続けた。

「そうだね、きみが嬉しそうで何よりだよ。君がああいった行動を取った理由もわかった、それに、君が殴ったあの男性についての話も警察や、ほかの看護師から聞いてね。

僕は見てないけど、どうやら最近君が辛くなっていた原因にもなる事を彼はしていたそうだね？」

誰かに見られていたのだろうか？ いや、あの声と扉の前で色々やっていたのを見咎められてないはずがない。愛華はそう思うと、

小さく頷いてみせる。

医者はそれに頷き返すと、やっぱりそうかと、顎に手を当てて困ったように眉尻を下げてみせた。

「看護師から聞いたのは、半分は大げさだろうと思っていたよ。なにせ、君の病室に入りたがる記者は最初の一月ほどであれだけの数だった。そのために措置として謝絶と言う形をとったのは知っているね？」

「ええ、私も入れるつもりありませんでした。でも、誰かと繋がりには欲しかった。もう、私は一人ですから」

「ああ、そうだね。そうだった。僕も辛い事を言わせてしまったね。大丈夫、もうあの男は此処には来ない。君がああ男を避けていた理由も分かったし、君が仲良くしている見舞い客のおかげで体調が回復したのも聴いて、あの時この目で確かめさせてもらった」

塚本の動向が暴力的だった上に関野にまで被害を出した事で、病院側としてもそういう男には遠慮してもらいたところだろう。事細かには言わなかったが、どうやら塚本に対しては今後病院側から個人請求として備品や暴力行為による名誉毀損などで訴えると言う事らしい。手短に医者はそう言って、カルテのページを静かに閉じると愛華の開き始めた目を見つめてペン先で頭を搔きながら言った。

「そう言ったことで、昨晚の自分から点滴の不具合を言い出したことや、君が大切な人を助けようとした行動は君が外でも暮らしているいい兆候だと僕は思っただね。もしよければ、今後は面会の制限を外して、点滴もやめようと思うんだが、どうだろうか？」

その言葉に、愛華は穏やかに微笑み返していた。

「先生。すごく、うれしいです。私はやっと薬なしでいられるようになるんですね」

愛華はそういうと自分の手のひらを開いたり閉じたりしながら、そつと頬に当てて唇をゆるく上げた。ゆつくりと笑うその穏やかな顔をみて、肯定したとみた医者も微笑み返すと、カルテに丸をひとつ描いて愛華へ手を振りながら部屋をあとにした。

あとに残った愛華の手は頬に当てられたままで、医者が出て行った後でも頬に触れていた。そうして時計とセミの声を背景に、数分して頬から手を離してこう言った。

「笑い顔、きつくなりすぎてなかったかしらね」

愛華の微笑みは緩い笑いから確信をもったことへの自信で、大きく半円を描く喜びを表していた。頬から離れた手にも震えが走り、続くように声を押し殺した笑いが腹の辺りを痛くして漏れてくる。

それは、好機を喜ぶ笑みでもあった。愛華は面会を許可されるとは思ってもいなかったのだ。元はと言えばあの塚本と言う男が引き起こした自分の発作だったが、悪化していなかったかといえば、実はどちらとも言えなかった。

関野が来る前にアイツが言った言葉にぶちきたるのは事実だが、だからといって精神錯乱の状態にまで陥ったわけではない。看護婦たちが勝手に判断したところもあった。

「ふふ、ふふふふ。あの時はしばらく彼とは話せなくなる事を承知でやったけど、まさかねえ？　こんな事になってくれるとは思わないじゃない」

愛華は小さく窓に向かって呟くと、堪えきれない笑いを大形だけで笑う事でおさえようとした。ベッドの上から降りると、まだふらつく足に力を入れて日が差し込んでくる窓辺へと彼女は立った。ドアから誰かが来てもその後姿は、窓で外を眺め手いるようにしか見えない。華奢で儂げなどでも形容できるだろう、だが、窓側から見た彼女はその言葉とはまるで逆の形だった。それは豪胆、そうして昂然と言うべき笑みだ。

しかし、その笑みの形はくずれると、恍惚としたように愛華は天に向かって笑った。さながらその顔は狂ったように笑っているようにしか見えなかっただろう。口からでるのは喉で笑う小さな破裂音のような笑い、セミたちがその破裂音も聞こえないほどに鳴いている。彼女が思っている以上、事態の進行速度はその結末へと向けて転がり始めていた。

「さあ、どうでるかしら？　ねえ、関野さん。もうすぐ、もうすぐなのよ。私が約束と、いえ契約を果たせるのは」

愛華はそういうとまだ頂点に上るには遠い太陽をまぶしげに見上げていた。そして、必ずやって来るであろう探求者をじつくりと待つことにしたのであった。

白い病室はじつとりと汗ばむ熱気が忍び寄ってきているのも関係ないように、ひっそりと窓から差し込むところ以外では冷気をためているようだ。どちらが何処へ転がるか、それを知っているのはこの部屋だけかもしれない。

高音の機械音、それが何度となく鳴り響いている。耳に入っているはずの音をかぶった毛布の中から聴いていた。もう日は昇っているし、携帯の着信も多数来ている。

だが、流れ落ちる汗にも構わずに眠ろうとしている男がいた。紛れもなく、それは疲れきった関野だ。

病院からの処置を受けてから彼の時計で六回目の目覚まし音になるだろう。目覚まし音はもう二十回ほどなっているが、消す気にもならない。時間の過ぎる長針がずれる音がしてから、けたたましかった音は止んだ。

掛かった毛布越しで天井を見ている関野の額には汗の粒が浮かんでいて、その玉はすこしこけた頬を伝って落ちていった。暑苦しいほうが現実だ、そう言い聞かせながら脱水症状にはならないようスポーツ飲料と、買いだめしてあった簡易食品で病院から戻っての間、彼は自堕落とも言える生活を送っていた

腕で毛布を押しやって木目の天井をみれば、小電気のついたままの明かりが昼間の日差しに負けているのがわかる。じっとそれを見ていた関野は、むくりと起き上がると汗で濡れた服と顔を洗いに洗面台のところまで歩き出した。

病院での愛華の事件、続くように市田氏によって語られた別の事実と事実になづくたびに現実はどうどん遠くなっていってしまう。石鹸の泡があまり立たないまま水を出して、そのぬるい流水を顔にかけて息を吸った。

「っふう」

洗いづらいと思った自分の顔の無精髭は結構な長さまで伸びていた。あまりいいひげ面とはいえないそれを見て、関野は持っている電動剃刀でさっそくそれらをそり始め、つけた泡が切れ切れになる頃にはやっとまともな顔になることが出来た。

だが、鏡に映っている自分はまともなのだろうか？ 不摂生がたたっていたのもあってか、やはり水分不足もあってか、その顔はこけて以前はしっかりとついた肉も薄くなっている気がする。いくら顔をなげても変わりようは無いので、又部屋に戻ろうとして脱ぎ捨

てた上のTシャツを足元に感じて足でどかすと、シャツの下で床の色がすこし変わっているのが見て取れた。

「今日は。……何日だ？ あれから」

そう呟いて、上半身を晒したまま関野は部屋に戻って筆筒をあさり新しいシャツを探し出すとおざなりに着ると、布団の上で胡坐をかいて座り込んだ。

カレンダーを見れば、既に日数はあれから結構たっているのが分かる。洗ってきたあとの布団の周りを見れば、周囲にはメモ帳と、それから分かりそうな予想を書いた紙が複数、いや、数十枚は散らばっていただろう。その中心は布団だった。

六日前、もぐりこんだままで、見向きもしないようにしていたその皿に書き散らしたメモの散乱を、関野は見ないようにしていた現実を思い出して、自分で息をしている事でさえ信じられなくなっていたから放棄していたのを思い出す。

「そうだったっけか。いや、だが」

言葉にならないままで、やっと起きて動く気力が出た関野は、この惨状を何とかする事からを手始めに動き出す事にした。

メモの散らばりを見ながら、ゴミが散らばっているかのようなそれをどう扱おうかと思いつつも関野はその資料を整理し始めた。

散らばった紙一枚一枚に極力目を通さないようにして、壁際にまで散乱していたそれらを集めると、一冊の本ほどの厚さになるほど散らばっていた事がわかった。見ようとしなくていたがやはり見えるものの中にはあり、特大のバツ印が付いて、違うと大きくかかれたものや、赤字で大きな赤丸でいくつも囲ってある項目なども見えた。

「アイツが一体何をしたいのかについて、か」

読まないようにしていたはずなのに、目はいつの間にか文面を追っている。現状把握など望んでいるはずが無いのに、関野の手は次の紙をめくって、殴り書きで読めないと見るとすぐに捨てる。それを繰り返していき、何でこうなったのかについても思い出している自分が信じられなかった。

市田氏のことについて書かれた複数のメモ書き、そこには関野が導いたひとつの考えがあった。

市田氏は確かに精神的な負荷に耐え切れずに、あのような状態になったと見て正しいだろう。だがその先にある文面は、自分でも書いたと思えない内容で、それは読むごとに口から自然と形になって出て行った。

「市田氏の、あの思考状態ではまともに考えていると考えるのは無理。だが、それではどうして彼があのだ日を知っているか？ 仮定、それは、俺と同じ形であの世界に入った。

しかし、それは不可能。彼は扉の外でといった、状態が違う除外」

思っているよりも形になり出て行く言葉に、自分が何を考えているのかを考える事を、関野はやめていた。今はただ、ページをめくりそれを得る事だけに集中するように、自分に働きかけるだけでいいぱいになっているのだから。

水分不足の割には、めくる指にはもうじんわりと汗が滲んでいて、乾いたページに張り付くと感嘆にそれははがれていく。

「次、の仮定。では、何故彼は俺と同じ景色をみたか？

俺が見たと仮定している世界、では、見る条件は？ オレンジの光を真っ先に見た点では共通する。しかし、空間に入ったときの色は違う場合もあり、相似ではあるが同じと言いきれない」

そう呟きながら次々とめくられていくページの最後、そこで、関野の指はとまった。

そのページに差し掛かってしまうと、自分の言葉も止まってしまふ。それは、あり得ない、あってはならない仮定だったからだ。それでも、関野は固まっていた唇をほぐすように何度か噛むと、言葉をつむいだ。

「もし、もこの俺たちの共通点が、違う事だと、仮定したとき。絶対的な相違は、化け物の存在だ。

化け物の姿を見ていない俺と、化け物を見たと言う市田氏。それが市田氏に向けてはなった言葉。思いたくは無いが、愛華の話が、もしも、事実ならば」

最後の行に通じる文字は、自分が今震えているのと同じように大きくぶれていたが、関野にははっきりと読めた。

そこには、『シュウラの存在を認める必要があるかもしれない』と、書かれている。

「そんな馬鹿な事があってたまるか！」

関野はそういうと、持っている自分の資料の束をまた壁に投げつけた。雑誌の厚さの紙束は壁に当たる前に散らばり、壁際のあたりに降り積もると、紙同士がこすれあう音が響きあいながら関野の部屋に響いた。胡坐をかいていたまま後ろの布団の上に倒れると、一度思い立ったあまりに奇天烈な自分の発想のせいで、此処まで混乱していた事が思い出された。

煙草をくわえようとしてケースをのぞけば、もう既に煙草はない。天井の木目をみても一度自分が導いた考えを否定しきれる要素もない。何もかもが手詰まりに近い状態だった。

Key 4 終章 夢国の奏門4

「何がどうなってるんだよ。俺は一体何を求めているんだ？ もっともな言葉も無ければ、事実も無い。根拠も何も無い。何処でこんな中から事実を探し出せって言うんだよ」

ごしゃごしゃと頭をかきまくり、考えたくないという思考を追い出そうとしても自分の頭は考えるのをやめない。それは、関野がこの状態を脱したいと考えるほどにその思考を強めていつているからだ。

「一体どうしたんだ、俺は」

関野は落ちている紙を再度拾い上げて、そのいく先を聞いてみたが、思いついた先にあるのはやはり病室に座っているあの少女しかない。

そう思い至ったが、ついでも忘れてはならない事も関野はもうひとつ思い出した。

「はああああ。思い出した。アイツ俺を助けようとし塚本の奴を殴ったせいで面会謝絶になってるんだったなあ……。いや、でもこれ以上こんなままでいるのに俺も耐えられそうに無いなあ。っ」

小さく舌打ちしたが、そう思い立ってからこの六日間の間は何度も堂々巡りをしていた自分の思考も同じことをしていたのだと思いつき、どうしようもないのかと、再度溜息をついた。

何も動かないでいた間の混乱も収まった、関野はこれ以上こうしていても仕方がないと、自分の携帯に手を伸ばした。

まとまらない思考の嵐のなかで何度も電話の着信の音になっていた気がするが、いま、この携帯から見えるのはブラックアウトした電気の通わぬ画面だけだ。

「そういや、誰から連絡がかかってきてたんだろ？」

関野は散らかりっぱなしの部屋の隅から、携帯の充電器の先を探し出すと差し込み、さっそく携帯を起動させた。電源の入る音がして携帯の画面が開くまでのログの間に、関野は手近にある飲み残した清涼飲料水を全て飲み干してしまうと、起動を止めていたPCも起動させて自分がいつでも動ける体制をとった。

高音がして開いたのを確認してから先についた携帯を確認しようとする、画面が開くのと同時に着信音が鳴り響いた。

「うわっ、はいはい」

音に驚きながらも携帯を手にとれば、第一声で飛び込んできたのは聞き覚えのある怒鳴り声だった。

「生きてやがるのかこのやろおおおお」

「だあっ」

怒鳴り声にひるんで思わず携帯を放り出すと、畳に落ちた携帯から続いてなじみの声が聞こえてきた。

「関野？　おい、関野だよな？　生きているのかよ！　おいおいおいおい」

「あーと、生きている。いきなり怒鳴り声で怒鳴られて耳がおかしい以外は、すこしやせた？　ぐらいで何とか生きているぞ、千ヶ原」

関野に対して怒鳴った電話の主は大声をだした割には、湿っぽい声で言った。

「馬鹿野郎。こっちからの連絡付かないうえに、市田さんところに連絡取ろうとしたら俺が怒られ、お前のこと色々と言われてだな。とにかくそっから連絡とろうとしても連絡が付かない、こっちの取材が終わらない。だから、何度と無く連絡したのにお前は出ない！　心配かける前に連絡しろ！　このどあほ！」

千ヶ原がそう言い切ると、電話の向こう側で何かをすすする音が聞こえてきた。あまりいい音ではないが、彼がかなり心配してくれていたのだろう。電話越しで聞こえてくる啜り声に悪い気になりながらも、関野はたどたどしく弁解をした。

「悪い。どうにもこうにもまとまらないことばかりだな。一人で考えているほかなかったんだ。その、市田さんのことに関してはすまない。俺のせいですこし病状が悪化しちゃったみたいで、それで多分お前にもとばっちりがあったんだと思う。」

大丈夫だ、もうすぐ全部分かりそうだ」

「あ？　何言ってるんだよ。何が分かるにしろお前おかしい。これ以上調べたらお前もおかしくなっちゃうぞ。もう、やめろよ。市田さんを引き合いに出すのは悪いかもしれないが、関わったらお前もあんならとも言えなくなってきたんだ」

そう言って何とか止めようとする千ヶ原に、関野は答えられずに

その言葉を聴き続けていた。千ヶ原の言葉ももつともだろうし、市田氏のあの精神状態になるかもしれない切欠は俺にもあると言う事も認めなければ習い状態にまでおちこんでいた事も事実だ。

千ヶ原の言葉は耳に痛く、自分自身も知っているいや、内側から叫ばれている『引き返せ』という言葉と同じだ。だが、関野は千ヶ原が連ねる言葉を最後まで聞き届けると、こう言うしかなかった。

「悪い、又ちよつと電波が悪いみたいでな、よく聞こえない。今から行くところがあるから又あとではなしを聞かせてくれ、そんな時に心配させた分ぐらいはおごるからな」

返事を待たずに、関野は千ヶ原からの電話を切ると顔に両手で活を入れて、だらけた格好から全てを知るはずの彼女の基へ行くべく、準備を始めるのであった。

病室に掛かる時計が、ちこちこと規則的に時を刻み付けるのを、愛華は目をしっかりと開いてみていた。

「薬の間の出来事こそ夢みたいね。でも、これで私が求めているところにいけそうね」

薬を打たれなくなってから数時間、さらに貧血状態になっていたのも重なっていたおかげで回復するには更に掛かりそうだと言われていた愛華は、いくら状態が悪かろうとそんな事は気にならなくなっていた。

点滴の外れたあとに張られた絆創膏のしたでうずく傷も、退院す

る事が出来るかもしれないという希望も、瑣末にしか過ぎない。

「早く、早く来て。舞台は整っているの。あとは役者がそろえばいいだけなのよ」

熱の入った声が窓にあたって弾け、日差しと混ざって部屋にこもる。病室には誰もいないが、見えている先の公園には子供たちが遊んでいる姿が見えた。声は愛華の部屋に僅かしか届かないが、水遊びに公園内にある川や噴水で遊ぶ様を見ていると、昂ぶっている気持ちを抑えられる気がした。

「ねえ、私のことを知って欲しいだけなのよ？　ただ、それだけなのね。でも限られている」

夏の日差しが顔に掛かると、愛華の頬は血の気が薄いせいで陶磁器のような白さにみえる。その目に反射している白い光もガラス細工に見えてきそうだった。

子供たちを眺めている愛華は、自分の部屋に入れられた冷房に、小さく震えると、窓から室内へと視線を移した。

愛華はもうすぐ、きつと早足でやってくるであろうあの男を今か今かと待ち構えてほくそ笑んだ。

白永原衛生病院に関野は何度も足を止めながらも、たどり着いた。日にすこし焼けた肌は薄く色を変えているが、彼の風体では夏バテを起こしているようにも見える。

煙草ケースに新たに入れなおした煙草をくわえて、関野は導かれるように歩き出した。

院内に入り、入り口の案内に来ると、以前とは又違う看護婦がそこ

で何かを記入しているところだった。

「すみません。ちょっといいでしょうか」

関野が尋ねると掛けていた眼鏡を指で押し上げながら、鼻の高い看護婦はそれに怪訝そうに答えた。

「はいはい。あら、夏バテの患者さんですか。でしたらまずは内科の案内ですとこちらでご記入いただいて」

「いえ、違います。以前こちらで佐原 愛華さんのところに見舞いに来ていたものです。彼女の面会は、可能かどうかを伺いに来ました」

途中で説明をさえぎられた事に看護婦は不服そうにしてはいたが、関野が愛華の名前を出すと、眉を跳ね上げて興味深氣に関野への声を和らげて聴き直した。

「え、あら。患者さんではないの。えーと、佐原さんと仰ったかしら、少々お待ちいただいてよろしいかしら？ 今内線でそちらの事について尋ねますから」

関野に対してそういういながら、その声は音程が少々高くてあからさまに何か別の期待をかけているようにも見えた。いそいそと内線かけた電話口を手元で隠しながらちらちらとこちらを伺う様からして、以前愛華がいていた看護婦たちの噂話が寄りいつそうひどくなっている事だけ関野には理解できた。

「はい、あ、ねね、みたいな。ええ、分かりました。そう伝えておくから、ほかの子にはあとでね」

そう言っている看護婦の鼻息荒い声にも関野は興味がない。聴きたい事はただひとつ、愛華と会えるのか否かそれだけだった。ひそひそと聞き取れない会話がその後続いた後で、看護婦は関野がやぶ睨みに見ている事に気づいて、その電話をおろして偉ぶりながら言った。

「あ、あら、コホン。貴方がお見舞いに行きたい方というのは、三一八号室の佐原さんでよろしいでしょうか？」

「そうです。で、それ以上何か聞きたいことは？ 彼女に用があるんで出来るなら面会時間内で話をつけたいんで」

「ええ、大丈夫になりましたよ。少々貧血の気があるのであまり長い時間はおやめくださいね」

「わかりました。ありがとうございます」

そう関野が言うと、まあ、と声を黄色くして看護婦はニコニコと笑うとカウンターから手で階段をさすと実務に戻った振りをしてチラチラと関野のほうを見ていた。

それに気づいてないわけでもないが、今の関野にはそんな噂が広がろうがどうでもよかったのだ。指された階段を指して振り返りもせずひたすらに愛華の部屋を指して上って言った。クリーム色の壁のきれいな角をまがり、白壁に一線引かれた外科処置の部屋を通りすぎて、彼は愛華の部屋まで無言で歩き続けたのであった。

冷房が効きすぎではないかというくらい背筋に何度も氷を当てられているようだ。廊下を曲がり、突き当りにまでたどり着いたとき

に、関野はふとそう思った。

目の前にある三一八号室の表示はこの前の争いのときに何かされたのか、すこし以前よりもプレートにひびが入っているように見えた。

以前よりもハッキリと威圧感を感じたが、関野はそこにある愛華の気配だけではない何かを思っても怖さを感じてはいなかった。

「上等だ。此処まで来たら食うか食われるかだろ」

Key 4 終章 夢国の奏門5

そういって、関野は以前だったら躊躇っていた愛華の病室のドアを三度叩いた。内側からはそうして彼女の声がまたくぐもって聞こえてくる。

一方、ドアの反対側で聞こえた来訪の鐘にも等しいその音に、愛華は歓喜した。微笑を出してはいけなさと分かっているにもかかわらず、もうその笑みに、自制を強く働かせて頬をつねっているのと同じ声を出して答えた。

「来たわね、いいわ、入りなさいよ」

扉のがたつきはほとんどなくなっているかのように、音も柔らかく隔てていた壁はなくなり、彼と彼女の間は繋がった。二人がかち合うそれぞれの目に籠る熱と鋭さを潜ませた短剣が見える。自分と同じく求める瞳がそこにありそれはどんなものよりも鋭く輝いていた。

「お久しぶり、とはいわないかしらね。たかだか六日間ほどですもの」

「久しぶりに俺は近いな。まるで数ヶ月はお前にあってないと思った」

お互いの第一声は互いの事を探りあうような言葉の応酬だった。関野はドアの外で愛華の声を聴いていたが、なぜかいつもよりも明るく聞こえたその声に、何をたくらんでいるのかと警戒し、一方で愛華は関野が何処まで食いついてこられるのかを見る為に最初だけ

声をやわらかくしていた。

「あら、そうかもしれないわね？ 貴方ってそんなに顔細かったかしら。それともあの男に攻撃されたショックで食事も喉を通らなかったとかそんな乙女チックなことを言うつもり？」

「いや、ほうけていたのは事実だな。だが、聴きたい事がいくつもあったし、お前と病室の前で別れた後で別の事も調べていた。それに、面会謝絶がこうも簡単になくとも思ってもなかったよ」

関野はそういうと、定位置に座るために愛華の隣に置いてあった椅子を引きずると、ベッドの正面に椅子を構えて横座りにその場に腰を下ろした。目線はその椅子を構えている間も愛華から外さないようにしているが、その目線を愛華が嬉しげに受け取っているように見えてならなかった。

「あら、そっち側じゃなくてももう少し近くによって話してもいいんじゃないの？ それとも私に近づきたくないかしら」

「近づきたくないのは、あるかもしれない。だが聴くまでは出て行くつもりもないし、お前、あの後の手当てでも貧血起こしているそうじゃないか。病人なら病人らしくベッドの上で座りながら離れたほうが体にもいいだろう？」

お互いが距離を置いているそれを、愛華はじっとみてから軽く手を振って、理解を示すと自分のベッドの上に乗って、関野と同じように相対した。

互いが一步も引かないような臨戦の気配にどちらも引かない。愛華は先に言っていた関野の言葉が気になり、黙っていたお互いの先

を取った。

「ねえ、聞きたくないことって何よ？ 向こうにいる間の宿題の答えも渡したし、向こうでは私に関して何か情報でも得られたんじゃないの？」

「ああ、得られたには得られたが、旅館で何かと話をしていた、それから特に変わったところは無いはずだったという話だったな」

「へえ、誰かと話していたかね？ それは確かに、私は話していたわよ」

愛華はさらりとそう応えた。関野はそれに眉を動かしたがそれに動揺するまいと、言葉の調子を崩さずに愛華の答えを受けきつてみせた。

「そうか、誰かと話していたのか。ならば、お前の会話も事実だと思っただけなのか」

ベッドの上でひじを付いてこちらを見ている愛華が又笑った。何故彼女は笑うのだろうか、自分が話したことがなかったことを聴けば聞くほどに彼女は嬉しそうになっていくように見えるのだ。

「事実、と言うなら事実ね。話をしていたもので、その本当と後はほかで喋っていた事の裏が取りたい？ と言うところかしらね。なら、私はいつもの言葉を言うしかないわ」

愛華は張り付く微笑をこちらに返すと、何度か瞬きをしてこちらを見て返す。関野はやはり話を聞かなければならないかと、内で毒づいた。愛華が笑っているのは、恐らく話を聴かなければ此処で

切っても言いという表れだろう。

「話を、聴いてからか。だったら聞く前に幾つかの質問にだけ答えろ。それからその話を聴きたい」

「貴方が聞きたい話？　じゃあ、事件についてと話のラスト、それから真相について直接聞く質問じゃなかったら私はそれに答えるわ」

かたわらに置かれた水差しをとってコップに注ぐと、愛華が注いだ水はコップの中で音と水泡を立てた。こちらを見ながら水を注いだその量は、若干多くも見えたが構わずに愛華は軽く口をつけてこちらの続きを待っている。

質問的一幕が切られてから時間はさほど経ってはいない。それでも彼らが相對している時間は体感する時間ではより長い時を感じられた。注がれた水の一滴もがスローモーションで再生されるように緩慢だと思えるほどに。

「ならまず、真相じゃないことで聴きたい。どうして俺がこの部屋に入った初めての人間だと言った。現実なら初めてかもしれないが、あの部屋に入った人物である市田氏を数に入れるならば、俺は二人目になる」

「へえ、いちだ？　名前では覚えてないけどあの部屋に、って貴方が言うところから察するに、私の空間のことね」

愛華はよどみ無く答えたが、自分の隙が露呈しないように作り出された言葉は関野へと軽々返される。

「そうだ。俺が聞いているのは俺がこの部屋に入ったのは最初だが、

あの部屋にはほかにも誰かが入った事があるかどうか。そしてそれで何が起こったかだ」

「あら、聞き方を変えたわね。そうね、市田かどうかは知らないけど私の部屋を見た人はいたわ。入ったのは無い。見ただけで逃げ出してしまったもの。何が見えたか？ あなたはそれを聴いているのじゃないの？ で、それで更に私に聞こうとしているのじゃない？ 違う？」

愛華の質問に対する返しに突きつける何かが乗ってきて、眼光が鋭くなる。その様子に、関野も椅子の背を軽く握って愛華への答えを鋭く返す。飲まれたらまた、いいようにされてしまう。

「知っているなら話は早い。アイツは化け物を見たと言ったんだ。俺は見なかったからその点が分からなくて困っていたところだよ。で、その脇に女が立っているという言葉も聴かされた。それは、お前以外に誰でもないと俺は思っている。だが、化け物についてはまるで分からない。市田氏も化け物と言うだけで事実がつかめなくな」

愛華はそう返してきた関野にすこし口を詰まらせたかに見えた。声がでてないが、また残っているカップから水を一口飲んでいる。言葉が出なくなると、周囲の音は戻ってくるがそれも遠い残響のようだった。

「化け物、ねえ。知っているかどうかはその形にもよるわ。見た事あるなら覚えているかもしれないし、その化け物がどうして私の傍にいたかも分かるかもしれない」

「知っているだろう？ 少なくとも市田氏は俺に、女と化け物が話

していたと言ってきた。この病室ではお前ぐらいしかあそこにいるのはいない、そうじゃないか」

「ええ私ね。でも、なら化け物は？　どんな形をしていたかしら？」

関野はメモ帳を取り出してその化け物の形容を語る節を探そうとして、すでに擦り切れて汚れているメモ帳の書き込まれたページをめくった。自分から顔をそらした相手にベッドの上にいる少女は唇を閉ざしつつ小さく歪ませる。

「ああ、そうだ。市田氏が言うには鉤鼻で毛むくじゃらでおまけに牙が突き出た童話から抜け出たような化け物だったそうだ」

「で、それが私と話していた？　化け物と言えば化け物っぽいけどね、何かと話していたとしたらそれが何だと思うわけよ？　先に言わせてもらえるなら、相手は化け物とは違うわね。私が話していた相手はね」

否定をした愛華の言葉に嘘は無いのだろうか、関野はそう考えながらも、その先にあえて踏み込まなかった。愛華も次に来ると予想していた言葉が来なかったので怪訝な顔で関野に聞き返した。

「あら？　話していたかもしれない相手が化け物じゃなかったらその実なんだったのか、何て聞くのかとも思ったのに拍子抜けするわね」

「聞こうとは思いますが、それを語ってくれるように見えないんでな。それとも正体を教えてくれるのか」

場違いな空調の入る音がして空気が冷房で震えると、その音が答えを阻んでいるようだった。愛華も正体と言う言葉が出てから首を傾げて考えているが、こちらを見ないで数度自分の頬を指先で叩いてから、関野が思っていた通りの言葉をしゃべった。

「正体を聞きたい？　なら私が語る話を聴けば分かるわ。言うか言わないかの選択を聞かれれば、言うほうだけど、本当のことを直接聞くのに近いから駄目としておきたいところ」

そういわれて突っ込むところは多々あるが、関野にはそれをする事が出来ない。愛華がこの場では上なのだ。挑むような目つきだった愛華は今ではベッドの上から自分と対等に近い感覚で話をしていた。愛華の自信は関野が話を聞きだそうとして、答えを出さないでいることにあるのではない。

むしろ、答えを出すがその回答が真実であるというのが何故なのか、その理由を握っている愛華に関野が掴まれているからなのだ。

踏み込んでしまった関野が、求めている真実を知るまで引き下られなくなっている事を知っているからこそ、愛華はこのような不遜な態度を取れているのだ。

事実を知らせることなく彼を混迷の迷宮に叩き込む事ができるのが、佐原愛華、今の彼女の存在である。

答えを求めて拮抗している内心を見透かされても、その答えの確実性を求める為に、関野は愛華から譲歩する形でその質問をはねた。

Key 4 終章 夢国の奏門6

「わかった。なら後で話してくれ。次に聞きたいのは、感覚とかなんだとかのことについてだ」

「はい？ 感覚についてって」

「お前がおれによこしたこの前の宿題の回答とか言う奴だよ。悪いが、俺にはこれがどうしても、お前が宿題にしたかった内容には思えないんだ、夢で五感が働くようになった事が何で知らせたいことなのか分からないんだ」

関野は深くまである疑問に鍵を掛ける形で仕切らせると、もうひとつあった、あの事件の後に渡された紙とその答えについての質問を続けた。

彼女の夢の中で第二関門を抜けた際に、夢の中でありながら五感が作用していることについての疑問は無かった。その前からもそう言った言葉を多用していたし、彼女自身第一関門のときに感覚があったはずなのだ。それを今更のように語られては分かるものも分からない。

「もしかしくなくても、第一関門と第二関門のときとの違いについて、でしょう。感覚があったなかったの議論はとりあえず置いておくわ」

愛華はそういうと、持っていたコップを下ろして隣にある自分のメモ用紙と紙を取り出した。この前のように彼女なりのやり方でそこで何があったのかを説明してくれるらしく、関野は手招きされた。

「そんな遠くじゃ説明しても見えないでしょ。何でか知りたいならすこしぐらい近くによって話を聴かないとわからないわよ」

「何もないなら、俺はその説明を聞きたいんがな」

椅子の上で腕を組んでいた関野は、手招きする愛華のほうを見てはいたが、そう言って傍までは寄ろうとしなかった。警戒をしていてきりがないとも言われそうだが、彼女の傍によってしまったらあの空間がいつ何時開いて飲み込もうとするか分からない。

ならば、それに警戒しておかないほうがおかしいと、思うのは自明の理だ。離れた椅子の上で腕を組んでその図を見たほうが、その確立も減るだろうと関野は愛華が再度手招きするも、そこから動こうとしなかった。

「あんたね、何処まで抜けているかと思ったけど、説明聞きに来たくせに説明を聞く態度がなっちゃいけないじゃないのよ」

呼んでもどうしても来ようとしないう態度に業を煮やした愛華は、ベッドから立ち上がると、つかつかと関野目の前まで歩いてくるなり、彼の鼻を力いっぱいつまみあげた。

「いだっ！　だにすんだ。いきなり」

痛みに鼻をつままれた愛華の手を乱暴に払うと、鼻の辺りにまだ残っている痛みにごしごしと鼻を何度もこすって取ろうとした。こすっている関野に対して、当然と言わんばかりに愛華はペン先を突きつけて言った。

「聞かない態度を取っているからそれに対するあたしなりの罰と、

ついでに説明をかねての事。今痛いって言ったでしょ」

「ああ、痛いっていったがどうした」

「その感覚が無いっていうと何が起ころと思う？ 簡単でいいから聞かせてよ」

もったいぶる態度にいきなり鼻をつかまれた理由と感覚が出来た事がどう繋がるのかと、ペースをもって行かれ始めていることを考えながらも関野はありきたりな事をあげ連ねた。

「痛みが無ければ、そりゃ危機管理が出来なくなるとか無謀になるとかだろ。夢にそんなものが必要なのかよ」

「必要かですって？ 痛みはそれだけじゃないわよ。そりゃ確かに主要な事を外してない貴方の言い分も正しいと言えば正しいけど」

愛華はそういうと自分の手のひらをぐっと握るとすこし間をおいて、赤い雫がそこから滴った。数的こぼれて下にはねたそれは生々しい赤でどう見ても血だ。

何をするのかと、関野は急いで手元のハンカチを取り出して愛華の傍に近寄ろうとしたが、愛華はそれを制して関野の目の前で手のひらに出来たばかりの傷口を広げて見せた。

小さな欠片の落ちる音がして見せられたそれは、割れたガラスの欠片で傷つけられた小さな傷口で、出来たばかりであるそこからはあふれた流れがゆっくりと手のひらを伝って一滴ずつ床へと落ちていった。

「お前貧血なんだろう、そんな真似したらぶっ倒れるぞ」

「ご心配なく、でもね、正解を説明するのには必要だったからこうしただけよ。傷を見れば分かると思うけど、此処には切れたという事実がある」

そう言って切れ傷口を見せ付ける愛華が何を言いたいのか、関野は余計に分かりかねていた。傷があるという事実があったから一体なんだというのだろうか？ ガラスで傷つけた事に意味があるのか、それとも傷をつけなければならなかったのだろうか。

傷を見るばかりの関野に愛華はその手のひらをかざしながら、もう片方の明いた右手で器用にベッドの上に渡る置き台の上で又絵を書き出した。

「わからないみたいねえ。言っているじゃない。切られたという事実があるって。その切られたという事実は夢の中での出来事だとするわ。でも、夢だから自分の感覚が繋がっているとは限らない。

実際そうでしょ、普通の夢から覚めたら痛みは無いけど怖い夢を見れば恐怖は残る」

「それだから分からない。恐怖は感情だから残るものだろうが。夢は現実じゃない、起こっていないことが起きているように感じ取れたからどうなる。五感が総動員された夢がなんになるんだよ」

関野の言葉に絵を書き続けている少女は、横顔からこちらへ目線を僅かに向けると又紙にもどして、書きながらその言葉に答えた。

「感情が残るねえ、むしろそれは夢の恐怖という記憶が残っているのよ。だから怖いという感情が残る。分かっているのよ。」

ね？　で、どうして痛みが必要なのか。それも私の話を聴いていたら見当が付くとおもったけど、一人よがりに近かったみたいね。ならいいわ、このままその話を続けるわよ」

愛華は切れた手のひらをみせていたが、その手を握って見せると、又布団へと戻っていった。スリッパも履かずに来たその冷たい裸足の音が踏みつけられた血の跡で赤い点を残していく。

「痛みが必要な理由を、又あの夢語りではなすって言うのか？　夢語りなんかどうして毎回必要なんだよ」

関野がそう言って愛華を見ているが、愛華は手に引き出しから取り出した包帯を巻きつけると、器用にそれを手のひらにまきつけてから関野に先ほど書いていた絵のような何かを突きつけた。

はためく音がして関野の目の前に出された紙には、人が何人か書かれていて、一人ひとりとは違う姿をしている。

ある人はまるで十二単を羽織っているかのような豪華な着物をまとっているようだが、その後ろから大きな尾が突き出している。右側に行くと、その人の隣で小さな子供？　のような絵が描かれていて、子供の胸元は鉛筆で塗りつぶされていて赤い。

三番目にいる人物は、……関野は思わずじっと見入った。その人物は白いパジャマに横からたらしたおさげ髪、そして左手には大きな腕の長さよりもある鍵が握られていた。

「これは。一番右はお前なのか？　ほか二人の人物の関係は分かんが、この一番右端の鍵を持っているのはお前だろ。で、これが一体」

そういいかけて目線をあげた関野に、愛華はそらして自分を見る彼の顔から見る先を変えて、窓の外を見るように頭を向けた。

関野は愛華がそうして表を見るのに、また自分があの世界に引きずり込まれるのではないかと思っ、今回は目線を愛華から外さないようにして質問の答えを待った。

「その手にはのらないぞ」

「あら、一体どんな手かしら？ 貴方も随分私と同じようにスムーズにあちら側にいけるようになったの？」

愛華はそういうと、目線だけをこちらに戻した。

その目に関野はぎょつとして椅子の上でひじを付いていた顔をあげるとあこちらを見た愛華の金色に近い瞳を見直していた。

ややあってから、その目が何だと愛華の顔を恐れ気も無く見つめて軽く咳をした。

「いや、俺は驚かないぞ。だからどうしたっていうんだ。ここが夢ならそれくらい」

「何時から夢の空間になったんでしょね？ で、あなたは夢の空間に行くまいとしていたんじゃないかったかしら」

言った自分の言葉をすぐさま訂正しようとしたが、顔を向けた愛華の目は元に戻り、外からはあの工場地帯と何かが飛んでいく姿が目についた。覚悟してはいたのだが、言葉にひっかかりすぎる自分が、うらめしい。

Key 4 終章 夢刻の奏門7（前書き）

かなり間がいての投稿になってしまい、土下座しても足りないと思います。もうしわけありません。・・・

終章はこのまま続けていき、あと10未満程で完結させる予定です。最初の頃と違い不定期になってしまい、度々謝罪いたします。

Key 4 終章 夢刻の奏門 7

「夢だと決め付けたときからこっちだったんじゃないか」

関野はそういうと飛んで行った何かがまだいくつも在る事がわかり、更に窓の外をよく見ようと逆光に目を細めてそう言った。何か飛んでいった音がしたのだから、

きつと何かがいるはずだと表をみていると、愛華がそれを見ながら軽く彼の肩を叩いてきた。

「関野さん、貴方も三回目になるから随分となじんだのかしら」

愛華はそう言って関野が探していた飛んでいる何かを指差して、説明しました。

「あれはね、ザナイ地帯では移動用に使われているものらしいは。私はアレを使ったのが数回しかなかったから何ともいえないけど、

あまり空気がいいところじゃないからね、ザナイは。移動して住居に戻るときに使うまあ、エレベーターみたいなもの」

「エレベーターだと？ あれが？ いや、まあそんな説明聞きたくてみていたわけじゃなくって、おれは、そうだ、何で痛みが夢を見るときに必要なのか、

いや五感がどうして必要なのかを知りたかったんだ」

説明されている先を聞きたかったが、そんなことばかりで話をそ

らされていては肝心の事も分からなくなりそうだと、関野はまだ風を切る音がする表から目線を外して隣に立っている少女を見下ろして言った。

彼女はそうやって何かをそらしているような気がしてならないのだ。関野が質問した事に対して確かに答えているように見せかけて、その実まったく違うところに誘導している。

今もそうだ、表を見ていて親切そうに説明しているが彼女は関野から見下ろされているにも関わらず、その瞳を真っ向から受け止めて笑っている。

そうして見下ろしている関野に対して、愛華はゆっくりとその手をあげて関野ポケットのあたりに手を触れた。

「あなたはね、それを否定しているけど入ってきたときはどうだったかしら？ 夢の中なのに痛みを感じていたのを私は今でも覚えてるわ。そして、今私に触れられている手のひらの熱も感じているはずよ」

愛華の小さな手のひらからは確かに熱が伝わっている。関野はそうまでされて何を彼女が言いたいのがわかり、触れられた手を掴んで離すと、自分が最初に打ちつけた手のひらの痛みを思い出していた。

「俺も痛みを感じていた？ だが、そんなまさか、それだけで夢の中での五感がそろっうわけが無いだろう。現に今まで俺は外の、おとがきこえて いなか った」

言った言葉を反復するように切れさせて関野は、今まで愛華との

話し声しかなかった空間が窓の向こう側の音も聞こえだしているという事にいつそう驚かされた。そうして、愛華が何を話したそうとしているのかを更に問い詰める。

「愛華、何をしているんだ。俺に一体何をしているんだ」

「何かしている？ 何もしてないわ。ああ、でも現実では薬を盛ったかしら。でも意図的にじゃなくってだからカウントされないと思いたいのだけれど。」

あとね、いい加減驚きすぎて話が進まないから答えも言っちゃわ。痛みやね、五感が必要なのはこっち側の世界でのことをおぼえて置く必要があるから。

あまり貴方には重要じゃないことだけど、それが五感のある理由らしい、わよ」

オレンジ色の残光が、消えて紫と黒の色が表から忍び寄ってくる。説明された五感がある必要性は夢を覚えていることからきているものだという。

それがどうしてなのか分からずに、関野はまだしっかりしているはずだと思いたい脳を活動させてその答えを受け止めて話をした。

「そう、か。五感が必要なのは夢を覚えている必要があるからか。ならなんで俺がそれを感じる必要があるんだ。おかしいだろ。赤の他人で、いきなりこっちの空間に来てそんな事ができるようになるなんてご都合にもほどがありすぎる」

「そうやって否定してもね、もう貴方は視覚も聴覚も触覚も、こちら側を体感できるようになっているじゃない。それをどう受け止める気？ ご都合だと言い切るなら、はじめ見えたこちらの片鱗はな

んで？ ほら、貴方が説明しきれないじゃないの」

愛華は受け止めた関野の言葉を分かりきった事をと、軽々と返して、巻かれた包帯の手をひらひらとさせてベッドに戻っていった。そうして布団に戻ると、彼女はまだぐるぐると思考が回りっぱなしの男に椅子に座るように促した。

「ねえ、説明してもわからないからってね、そう悲嘆にくれる必要はないわよ。私が説明しているのが分かればいいんですもの。今知ったことで、知る事が出来たからもうそれは知らない事じゃない。だから、貴方には何が必要だかもうわかってきたのじゃないかしら？
」

愛華はそういうとまだ立ったままの男をなだめるような猫なで声で慰めた。

「知らないことを、知ろうとすることが今必要なんでしょう？」

愛華がそう言った慰めは、関野の思いを揺らした。知りたいからこそ、此処まで来たのだと。だが、そう思うほどに逃げ出したいという悪寒はよりいっそうひどくなるばかりだ。

「お前は何がしたいんだ」

呟いた言葉に、愛華がすこし慌てたように返した。

「知りたいの？ねえ、知りたいの？だったら私の話聞かなきゃ教えてくれないわよ」

あまり愛華らしくない慌てぶりで、それに何かあるのかと問おう

としたら、窓の向こう側から大きな音が響いて反射的に後ろを振り返ってしまった。

背後の窓の向こう側では、先ほど愛華がエレベーターといった物体が壁にぶつかったらしく、誰も人を乗せていないそれがどうしてこちらに來たのかは分からなかった。

「なんだ？　こっちにしても、表にしても俺には知らないことも理解が出来ない事も多すぎるんだ。おかげで頭がおかしくなる。組み立てようとした端から愛華、お前さんに崩されている気がするよ」

「そういわないでよ。私も今のは私のせいじゃないわよ。向こうが勝手に來たんだったら私のじゃないしね。

向こうの住人が乗っていたように見えただけ」

愛華がそういうと、関野は更にもどかしさの苛立ちに任せて彼女を強くにらみつけた。もう、いい加減筋道立てて話したって何が変わるわけでもあるまいに、と突っ込みたい。

そんな関野の内心に気づいたのか、愛華も話すトーンを変えて脱線や寄り道ばかりだった会話を元に戻そうとしているようだった。

「睨まないでよ。で、そうね、今日話す第三関門が終わったら必ず私の事故について話すわよ。そうね第三関門。たしか、扉に放り込まれたところだったかしら」

「俺の疑問も解決してないのにそのまま話を続ける気なのか？それじゃ納得もできないだろうが」

「貴方も大概しつこいわね。わざわざ私だって遠回りして話しをし

ているの。分かりやすいように」

愛華が舌打ちをしながらそういうと、関野は釈然としないまま黙り、乱暴に自分のポケットからメモ帳を取り出すと、立ったまま話を聴く体制をとった。

愛華は、そのままにいる関野を見て何とも言いがたいと、呆れながら第三関門についての話を始めた。

「あれからちょっと経つから、何処まで話したか思い出すのも面倒ね。でも、そう、確か区切りがいいところだったはずですよ」

そう、目が覚めたところからだっただかしらね。そう切り出した愛華は立ったままの関野の顔を物憂げに見ていた。

愛華は目を覚ましたときに自分が何日も寝ていたのでは無いのかという錯覚に襲われたという。正確な時間など分かるはずでもないが、向こうにはまる三日間はいたようなときが流れているのを感じたそうなのだ。

眠りから目覚め、その日の学校にいる間も浮ついた気持ちのままで楽しかった体育の時間や、図工の時間も忘れるほどに愛華はその夢の続きを気にしていた。

いくら彼が又次の関門が待っているといっても、夢は夢でしかない。続きが見られる夢なんて聞いたことも無ければ実際見たこともなかった。それを考えれば考えるほどに、愛華の気持ちは沈んでいき、残念だという思いばかりがつのり食事もなかなか喉を通らないまま夜を向かえ、眠りに落ちたのだという。

瞳を閉じて瞼の裏に昨晚の冒険に満ち満ちた夢を思い描いて愛華は落ちる意識を感じていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1064k/>

夢譚(ムタン)

2010年10月15日21時32分発行